

【テキスト中に現れる記号について】

〈〉：ルビ

（例）這入^{はい}って

：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）仏蘭西語教^おせて

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号またはUnicode、底本のページと行数）

（例）「#「言+墟のつくり」、第4水準2-88-74」

「#5字下げ」 「#「」は中見出し」

「こいさん、頼むわ。」

鏡の中で、廊下からうしろへ這入^{はい}って来た妙子^{たえこ}を見ると、自分で襟^{えり}を塗りかけていた刷毛^{はけ}を渡して、其方^{そちら}は見ずに、眼の前に映っている長襦袢^{ながじゆばん}姿の、抜き衣紋^{えもん}の顔を他人の顔のように見据^{みす}えながら、

「雪子ちゃん下で何してる」

と、幸子はきいた。

「悦ちゃんのピアノ見たげてるらしい」

なるほど、階下で練習曲の音がしているのは、雪子が先に身支度をしてしまったところで悦子に掴まって、稽古を見てやっているであろう。悦子は母が外出する時でも雪子さえ家にいてくれれば大人しく留守番をする児であるのに、今日は母と雪子と妙子と、三人が揃って出かけるとうので少し機嫌が悪いのであるが、二時に始まる演奏会が済みさえしたら雪子だけ一と足先に、夕飯までには帰って来て上げると云うことでどうやら納得はしているのであった。

「なあ、こいさん、雪子ちゃんの話、又一つあるねんで」

「そう、」
姉の襟頸から両肩へかけて、妙子は鮮かな刷毛目をつけてお白粉を引いていた。決して猫背ではないのであるが、肉づきがよいので堆く盛り上っている幸子の肩から背の、濡れた肌の表面へ秋晴れの明りがさしている色つやは、三十を過ぎた人のようでもなく張りきって見える。

「井谷さんが持って来やはった話やねんけどな、」

「そう、」
「サラリーマンやねん、MB化学工業会社の社員やて。」

「なんぼぐらいもろてるのん」

「月給が百七八十円、ボーナス入れて二百五十円ぐらいになるねん」

「MB化学工業云うたら、仏蘭西系の会社やねんなあ」

「そうやわ。　　よう知ってるなあ、こいさん」

「知ってるわ、そんなこと」

一番年下の妙子は、二人の姉のどちらよりもそう云うことには明るかつ

た。そして案外世間を知らない姉達を、そう云う点ではいくらか甘く見てもいて、まるで自分が年嵩としかさのような口のきき方をするのである。

「そんな会社の名、私は聞いたことあれへなんだ。本店は巴里パリにあつて、大資本の会社やねんてなあ」

「日本にかて、神戸の海岸通に大きなビルディングあるやないか」

「そうやて。そこに勤めてはるねんて」

「その人、仏蘭西語出来はるのん」

「ふん、大阪外語の仏語科出て、巴里にもちよつとぐらい行てはったことあるねん。会社の外に夜学校の仏蘭西語の教師してはつて、その月給が百円ぐらいあつて、両方で三百五十円はあるのやて」

「財産は」

「財産云うては別にないねん。田舎に母親が一人あつて、その人が住んではる昔の家屋敷と、自分が住んではる六甲の家と土地とがあるだけ。

六甲のんは年賦で買った小さな文化住宅やそうな。まあ知れたもんやわ」

「そんでも家賃助かるよつてに、四百円以上の暮し出来るわな」

「どうやるか、雪子ちゃんに。係累はお母さん一人だけ。それかて田舎に住んではつて、神戸へは出て来やはれへんねん。当人は四十一歳で初婚や云やはるし、」

「何で四十一まで結婚しやはれへなんだやる」

「器量好みでくれた、云うてはるねん」

「それ、あやしいなあ、よう調べてみんことには」

「先方はえらい乗り気やねん」

「雪きあんちゃんの写真、行つてたのん」

幸子の上にもう一人本家の姉の鶴子がいるので、妙子は幼い頃からの癖

で、幸子のことを「中姉ちゃん」、雪子のことを「雪姉ちゃん」と呼びならわしたが、その「ゆきあんちゃん」が詰まって「きあんちゃん」と聞えた。

「いつか井谷さんに預けといたのんを、勝手に先方へ持って行かはってん。何やたいそう気に入ってはるらしいねんで」

「先方の写真ないのんか」

階下のピアノがまだ聞えているけはいなので、雪子が上って来そうもないと見た幸子は、

「その、一番上の右の小抽出あけて御覧、」

と、紅棒を取って、鏡の中の顔へ接吻しそうなおちよぼ口をした。

「あるやろ、そこに」

「あつた、これ、雪あんちゃんに見せたのん」

「見せた」

「どない云うた」

「例に依ってどないも云わへん、『ああこの人』云うただけや。こいさんどう思う」

「これやったらまあ平凡や。いや、いくらかええ男の方が知らん。

けどどう見てもサラリーマンタイプやなあ」

「そうかて、それに違いないねんもん」

「一つ雪あんちゃんにええことがあるで。 仏蘭西語教せてもらえ

るで」

顔があらかた出来上ったところで、幸子は「小槌屋呉服店」と記してある畳紙の紐を解きかけていたが、ふと思いついて、

「そやった、あたし『B足らん』やねん。こいさん下へ行つて、注射器消毒するように云うといてんか」

脚気は阪神地方の風土病であるとも云うから、そんなせいかも知れないけれども、此処の家では主人夫婦を始め、ことし小学校の一年生である悦子までが、毎年夏から秋へかけて脚気に罹り罹りするので、ビタミンBの注射をするのが癖になってしまつて、近頃では医者へ行く迄もなく、強力ベタキシンの注射薬を備えて置いて、家族が互に、何でもないようなことにも直ぐ注射し合つた。そして、少し体の調子が悪いと、ビタミンB欠乏のせいにしたが、誰が云い出したのかそのことを「B足らん」と名づけていた。

ピアノの音が止んだと見て、妙子は写真を抽出に戻して、階段の降り口まで出て行つたが、降りずにそこから階下を覗いて、

「ちよつと、誰か」

と、声高に呼んだ。

「御寮人さん注射しやはるで。」

注射器消毒しといてや」

「#5字下げ」二「#「二」は中見出し」

井谷と云うのは、神戸のオリエンタルホテルの近くの、幸子たちが行きつけの美容院の女主人なのであるが、縁談の世話をするのが好きと聞いていたので、幸子はかねてから雪子のことを頼み込んで、写真を渡しておいたところ、先日セットに行つた時に、「ちよつと奥さん、お茶に付き合つて下さいませんか」と手の空いた隙に幸子を誘い出して、ホテルのロビーで始めてこの話をしたのである。実はこちらへ御相談をしないで悪かつたけれども、ぐずぐずして良い縁を逃がしてはと思つたので、お預かりしてあつたお嬢様のお写真を何ともつかず先方へ見せたのが、一箇月半程も前のことになる。それきり暫く音沙汰がなかつたので、

自分は忘れかけていたのであったが、先方ではその間にお宅さんのことを調べた模様で、大阪の御本家のこと、御分家のお宅さんのこと、それから御本人のことについては、女学校へも、習字やお茶の先生の所へも、行って尋ねたらしい。それで御家庭の事情は何も彼も知っていて、いつかの新聞の事件なども、あの記事が誤りだと云うことはわざわざ新聞社まで行って調べて来ているくらいなので、よく諒解^{じょうかい}していたけれども、なお自分からも、そんなことがあるようなお嬢様かどうかまあお会いになつて御覧なさいと云つて、納得が行くように説明はしておいた。先方は謙遜^{けんそん}して、蒔岡^{まきおか}さんと私とでは身分違いでもあり、薄給の身の上で、そう云う結構なお嬢様に来て戴^{いた}けるものとも思えないし、来て戴いても貧乏所帯で苦勞をさせるのがお気の毒のようだけれども、万一縁があつて結婚出来るならこんな有難いことはないから、話すだけは話してみてもほしいと云っている。自分の見たところでは、先方も祖父の代までは或^ある北陸の小藩の家老職をしていたとかで、現に家屋敷の一部が郷里に残つてると云うのであるから、家柄の点ではそう不釣合^{ふつりあひ}でもないのではあるまいか。お宅さんは旧家でありになるし、大阪で「蒔岡」と云えば一時は聞えていらしつたに違いないけれども、こう申しては失礼であるが、いつ迄^{まで}もそう云う昔のことを考えておいでになつては、結局お嬢様が縁遠くおなりになるばかりだから、大概なところで御辛抱なすつたらいかかであろうか。現在では月給も少いけれども、まだ四十一だから昇給の望みもないことはないし、それに日本の会社と違ってわりに時間の余裕があるので、夜学の受持時間の方をもつと殖やして四百円以上の月収にすることは容易だと云っているから、新婚の所帯を持って女中を置いて暮して行くには先^まず差支えあるまい。人物については、自分の二番目の弟が中学時代の同窓で、若い時からよく知っているので、太鼓

判を捺すと云っている。そう云つてもお宅さんの手で一往お調べになるに越したことはないけれども、結婚がおくれた原因は全く器量好みのため外に理由はないと云うのが、矢張ほんとうらしく思える。それは巴里にも行っていたのだし、四十を越してもいることだから、まるきり女を知らない筈はないだろうけれども、自分がこの間会って見た感じでは、それこそ生真面目なサラリーマンで、遊びの味などを知っていそうな様子は微塵もなかった。器量好みなどと云うことは、得てそう云う堅人によくあるものだが、その人も巴里を見て来た反動でか、奥さんは純日本式の美人に限る、洋服なんか似合わなくてもよい、しとやかで、大人しくて、姿がよくて、和服の着こなしが上手で、顔立も勿論だけれども、第一に手足のきれいな人がほしいと云う注文なので、お宅のお嬢様なら打ってつけたと思うのであるが、と云うような話なのであった。

長らく中風症で臥たきりの夫を扶養しつつ美容院を経営して、かたわら一人の弟を医学博士にまでさせ、今年の春には娘を目白に入学させたと云うだけあつて、井谷は普通の婦人よりは何層倍か頭脳の廻転が速く、万事に要領がよい代りに、商売柄どうかと思われるくらい女らしさに欠けていて、言葉を飾るような廻りくどいことをせず、何でも心にあることを剥き出しに云つてのけるのであるが、その云い方がアクドクなく、必要に迫られて真実を語るに過ぎないので、わりに相手に悪感を与えることがないのであつた。幸子も最初、井谷がいつもの急き込むような早口でしゃべるのを聞いていると、随分この人はと思うところもあつたけれども、段々聞いて行くうちに、男勝りの親分肌な気象から好意で云つてくれていることがよく分るし、それに何よりも、理路整然と、打ち込む隙もなく話しかけて来られるので、ぐっと俯伏せに取って抑えられてしまった感じがした。そして、では早速本家の方とも相談をし、又此方

でもその人の身元を調べるだけは調べさせて戴いてと、その時はそう云つて別れたのであつた。

幸子の直ぐ下の妹の雪子が、いつの間にか婚期を逸してもう卅歳にもなつてゐることについては、深い訳がありそうに疑う人もあるのだけれども、実際はこれと云うほどの理由はない。ただ一番大きな原因を云えば、本家の姉の鶴子にしても、幸子にしても、又本人の雪子にしても、晩年の父の豪華な生活、蒔岡と云う旧い家名、要するに御大家であつた昔の格式に囚われていて、その家名にふさわしい婚家先を望む結果、初めのうちは降る程あつた縁談を、どれも物足りないような気がして断り断りしたものだから、次第に世間が愛憎をつかして話を持って行く者もなくなり、その間に家運が一層衰えて行くと云う状態になつた。だから「昔のことを考えるな」と云う井谷の言葉は、ほんとうに為めを思つた親切な忠告なので、蒔岡の家が全盛であつたのはせいぜい大正の末期までのことで、今ではその頃のことを知つてゐる一部の大阪人の記憶に残つてゐるに過ぎない。いや、もつと正直のことを云えば、全盛と見えた大正の末頃には、生活の上にも営業の上にも放縦であつた父の遣り方が漸く祟つて来て、既に破綻が続出しかけていたのであつた。それから間もなく父が死に、営業の整理縮小が行われ、次いで旧幕時代からの由緒を誇る船場の店舗が他人の手に渡るようになったが、幸子や雪子はその後も長く父の存生中のことを忘れかねて、今のビルディングに改築される前までは大体昔の倂をとどめていた土蔵造りのその店の前を通り過ぎ、薄暗い暖簾の奥を懐しげに覗いてみたりしたものであつた。

女の子ばかりで男の子を持たなかつた父は、晩年に隠居して家督を養子辰雄に譲り、次女幸子にも婿を迎えて分家させたが、三女雪子の不仕合せは、もうその時分そろそろ結婚期になりかけていたのに、とうとう父

の手で良縁を捜して貰えなかったこと、義兄辰雄との間に感情の行き違いが生じたこと、などにもあった。いつたい辰雄は銀行家の忤で、自分も養子に来る迄は大阪の或る銀行に勤めていたのであり、養父の家業を受け継いでからも実際の仕事は養父や番頭がしていたようなものであった。そして養父の死後、義妹たちや親戚などの反対を押し切つて、まだ何とか踏ん張れば維持出来たかも知れなかった店の暖簾を、蒔岡家からは家来筋に当る同業の男に譲り、自分は又もとの銀行員になった。それと云うのは、派手好きな養父と違い、堅実一方で臆病でさえある自分の性質が、経営難と闘いつつ不馴れな家業を再興するのに不向きなことを考え、より安全な道を選んだ結果で、当人にすれば養子たる身の責任を重んじたからこそその処置なのであるが、雪子は昔を恋うるあまり、そう云う義兄の行動を心の中で物足りなく思い、亡くなった父もきつと自分と同様に感じて、草葉の蔭から義兄を批難しているであろうと思つていた。と、ちようどその時分、父が死んで間もない頃、義兄がたいそう熱心に彼女に結婚をすすめた口があつた。それは豊橋市の素封家の嗣子で、その地方の銀行の重役をしている男で、義兄の勤める銀行がその銀行の親銀行になつていゝる関係から、義兄はその男の人物や資産状態などをよく知つていゝると云う訳であつた。そして豊橋の三枝家ならば格式から云つても申分はないし、現在の蒔岡家に取つては分に過ぎた相手であるし、本人も至つて好人物であるからと、見合いをするまでに話を進行させたのであつたが、雪子はその人に会つて見て、どうにも行く氣になれなかつたのであつた。と云うのは、別に男振がどうこうと云うのではないが、如何にも田舎紳士と云う感じで、なるほど好人物らしくはあるけれども、知的なところが全くない顔つきをしていた。聞けば中学を出た時に病氣をしたとかで上の学校へは這入らなかつたと云うのであ

るが、恐らく学問の方の頭は良くないのであると思うと、女学校から英文専修科までを優秀な成績で卒業した雪子としては、さきざきその人を尊敬することが出来そうもない懸念けねんがあつた。それに、いくら資産家の跡取で生活の保証はあるにしても、豊橋と云うような地方の小都会で暮すことは淋さびしさに堪えられない気がしたが、それには誰よりも幸子が同情して、そんな可哀かわいそうなことがさせられるものかと云つたりした。義兄にしてみれば、義妹は学問はよく出来たかも知れないけれども、少し因循過ぎるくらい引つ込み思案の、日本趣味の勝った女であるから、刺戟しげきの少い田舎の町で安穩あんゑんに暮して行くのには適しているし、定めし本人にも異存はあるまいと極めてかかったのが、案に相違したのであつたが、内気で、含羞はにかみ屋で、人前では満足に口が利きけない雪子にも、見かけに依よらない所があつて、必ずしも忍従一方の婦人ではないことを、義兄が知つたのはその時が最初であつた。

が、雪子にしても、お腹の中ではつきり「否いや」にきまつていることなら、早くそう云えばよいものを、どうとも取れるような生返事ばかりしていて、いよいよよとなつてから、それも義兄や上の姉には云わないで、幸子に打ち明けたのは、一つには余りにも熱心な義兄の手前、云い出しにくかつたせいもあるうが、そう云う風に言葉数の足りないのが、彼女の悪い癖なのであつた。そのために義兄は内心否いやでないものと感違あやまいをし、先方も見合いをしてからは、急に乗り気になつて是非にと懇望して来ると云う訳で、話は退のつ引きならない所まで進んだのであつたが、一旦「否」の意志表示をしてからの雪子は、そうなるに義兄や上の姉が代る代る口を酸すくして頼むようにして勧めても、最後まで「うん」と云うことは「#」ことは「は」谷崎潤一郎全集第9巻」（中央公論新社2015年6月10日初版発行）では「ことを」「云わないでしまった。今度は泉下の

養父にも喜んで貰えるところで、思つてかかつた縁談であるだけに、義兄の失望は大きかつたが、それより困つたのは、先方に対し、仲に立つて斡旋してくれたい銀行の上役の人に対し、今更挨拶のしようがなくて冷汗の出る思いをしたこと、それも、尤もに聞える理由があるならばだけでも、顔が知的でないなどと下らぬ難癖をつけて、こんな、二度とありそうにもない勿体ない縁を嫌うと云うのは、ただ雪子の我が儘で、邪推をすれば、故意に兄を苦しい立場に陥れてやろうと云う底意があるのではないかとさえ、取れないでもなかつた。

それから此方、義兄は雪子の縁談には懲り懲りした形で、他人が持つて来てくれる話には喜んで耳を傾けるけれども、自分が積極的に取り持つことや、先に立つて良い悪いの意見を述べることは、出来れば避けたいと云う風に見えた。

「#5字下げ」三「#「三」は中見出し」

雪子を縁遠くしたもう一つの原因に、井谷の話の中に出た「新聞の事件」と云うものがあつた。

それは今から五六年前、当時廿歳であつた末の妹の妙子が、同じ船場の旧家である貴金属商の奥畑家の倅と恋に落ちて、家出をした事件があつた。雪子をさしおいて妙子が先に結婚することは、尋常の方法ではむづかしいと見て、若い二人がしめし合はして非常手段に出たもので、動機は真面目であるらしかつたが、孰方の家でもそんなことは許すべくもなかつたので、直きに見つけ出して双方に連れ戻して、そのことはたわいもなく解消したかの如くであつたが、運悪くそれが大阪の或る小新聞に出ってしまった。而も妙子を間違えて、雪子と出、年齢も雪子の年になつ

ていた。当時蒔岡家では、雪子のために取消を申し込んだものか、但し
そうすれば半面に於いて妙子がしたことを裏書きするのと同じ結果を招
く恐れがあり、それも智慧ちえのない話であるからいつそ黙殺してしまつた
ものかと、当主辰雄が散々考えたのであつたが、過ちを犯した者はどう
あろうとも、罪のない者に飛ばつちりを受けさせて置く訳には行かぬと
思つたので、取消を申し込んだところ、新聞に載つたのはその取消では
なく、正誤の記事で、予想した通り改めて妙子の名が出た。辰雄はその
前に雪子の意見も聞いて見るべきであるとは心付いていたのだけれども、
聞いたところで取り分け自分に対しては口の重い雪子が、どうせ明瞭な
答をしてくれそうもないことは分つていたし、義妹たちに相談すれば利
害の相反する雪子と妙子との間が紛糾することもあろうしと考え、妻の
鶴子に話しただけで、自分一人の責任でそう云う手段に出たのであつた
が、正直のところを云えば、妙子を犠牲にしても雪子の冤えんを雪すすぐことに
依よつて雪子によく思われたいと云う底意が、いくら働いていたかも知
れない。それと云うのが、養子の辰雄には、大人しいようでその実いつ
までも打ち解けてくれない雪子と云うものが一番気心の分らない扱いに
くい小姑こじょうめなので、こんな機会に彼女の機嫌きげんを取りたかつたこともあるう。
しかしその時も当てが外れて、雪子も妙子も彼に悪い感じを持った。雪
子に云わせれば、新聞に間違つた記事が出たのは私の不運としてあきら
めるより仕方がない、取消などと云うものはいつも人目に付かない隅すみの
方に小さく載るだけで、何の効果もありはしない、私達としては、取消
にせよ何にせよ一回でも多く新聞に出ることが不愉快なだから、そつ
と黙殺してしまうのが賢かつたのだ、兄さんが私の名誉回復をしてくれ
るのは有難いけれども、そうしたらこいさんはどうなるであろう、こい
さんのしたことは悪いには違いないが、年齒としはも行かない同士の無分別か

ら起つたこととすれば、責められてよいのは監督不行届な両方の家庭で、少くともこいさんについては、兄さんは勿論私にだつて一部の責任がないとは云えない、そう云つては何だけれども、私は自分の潔白は、知る人は知っていてくれると信じているので、あのくらいな記事でそんなにひどく傷つけられる自分であるとは思っていない、それより今度のことが原因で、こいさんが僻み出して不良にでもなつたらどうするか、兄さんのすることは万事理窟詰めで、情味がない、第一これほどのことを、最も利害関係の深い私に一言の相談もせずに行うとは専横過ぎる、と云うのであつたが、妙子は妙子で、兄さんが雪姉ちゃんのために証を立てて上げるのは当り前だけれども、私の名を出さなくても済ませる方法もあつたらうではないか、相手は小新聞なのだから、何とか手を廻せば伏せてしまうことが出来たらうものを、兄さんはそう云う場合にお金を吝しむからいけない、と、これはその時分から云うことがませていた。

辰雄はこの新聞の事件の時、世間に合わす顔がないと云つて辞職願を出した程であつた。尤もその方は「それには及ばぬ」と云うことで無事に済んだが、雪子が受けた災難の方は何としても償いようがなかつた。たまたま幾人かの人は、正誤の記事に気が付いて彼女の冤罪を知つたでもあろうが、彼女は潔白であつたにしても、そう云う妹娘のある事実が知れ渡つたことは、姉娘を、その自負心にも拘らず、いよいよ縁遠くする原因になつた。ただ、雪子自身は内心は兎に角、表面は「それくらいなことでは傷つきはしない」と云う建前であつたので、そんな事件のために妙子と感情が齟齬する結果にはならず、却つて義兄に対して妙子を庇うと云う風であつた。そして、この二人は、上本町九丁目の本家から、阪急蘆屋川の分家、幸子の家の方へ、前からも始終、一人が帰れば一

人が来ると云う風にして、代る代る泊りに来ていたのが、この事件を切掛かけにして段々頻ひん繁ばんになり、二人が一緒にやって来て半月も泊り続けることがあるようになった。それと云うのが、幸子の夫の貞てい之助のすけは、計理士をしていて毎日大阪の事務所へ通い、外に養父から分けて貰もらった多少の資産で補いをつけつつ暮くしているのであったが、厳格一方の本家の兄と違って、商大出に似合わず文学趣味があり、和歌などを作ると云う風であったし、本家の兄のような監督権を持たなかつたし、いろいろの点で雪子たちには、そう恐くない人なのであった。ただ余り雪子達の滞在が長くなると、本家へ気がねして「一遍帰つてもらたら」と幸子に注意することはあったが、幸子は毎度、そのことなら姉ちゃんが諒解しょうかいしてくれるから、心配しやはらんでもよい、今では本家も子供が殖えて家が手狭ていさになったことだし、時々妹達が留守にした方が姉ちゃんも息抜きが出来てであろう、まあ当分は当人達の好きなようにさせておいても別条はないと云い云いして、いつかそう云う状態が普通になっていたのであった。

そんな工合にして数年たつうちに、雪子の身の上には格別の変化も起らなかったが、妙子の境遇に思いがけない発展があつたので、結局に於いてそれが雪子の運命にも或る関かわりを持つに至つた。と云うのは、

妙子は女学校時代から人形を作るのが上手で、暇があるとよく小裂こぎれを切り刻んでいたずらしていたものであったが、だんだん技術が進歩して、百貨店の陳列棚たなへ作品が出るようになった。彼女の作るのは仏蘭西人形風のもの、純日本式の歌舞伎趣味のもの、その他さまざまで、どれにも他人の追隨を許さない独創の才が閃ひらめいていたが、それは一面、映画、演劇、美術、文学等に亘わたる彼女の日頃の嗜たしなみを語るものでもあった。兎とに角彼女の手から生れる可憐かれんな小芸術品は次第に愛好者を呼び集め、去

年は幸子の肝煎きもいりで心齋橋筋の或る画廊を借りて個展を開いた程であった。彼女は最初、本家は子供が大勢で騒々しいので、幸子の家へ来て作っていたが、そうなるもつと完全な仕事部屋がほしくなつて、幸子の所から三十分もかからずに行ける、同じ電車の沿線の夙川しゅくがわの松瀧しょうたけアパートの一室を借りた。本家の兄は妙子が職業婦人めいて来ることには不賛成であつたし、殊ことに部屋借りをするのはどうかと思つただけれども、この時も幸子が口をきいてやつて、過去にちよつとした汚点を持つ妙子は、雪子以上に縁遠い訳であるから、何か一つ仕事を当てがっておく方がよいかも知れない、部屋借りと云つても仕事をしに行くだけで寝泊りをするのではない、幸い友達の未亡人が経営しているアパートがあるから、よく頼み込んでそこを借りることにしたらどうであろう、そこから近い所だから自分も時々様子を見に行くことが出来る、と云うようなことを云つて、やや事後承諾的に運んでしまつたのであつた。

元来が陽気な性質の妙子は、雪子とは反対に警句や冗談などを飛ばすと云つた風であつたのが、事件を引き起した当座は陰鬱いんうつになつてしまい、変に考え込んでばかりいたが、そう云う新しい世界の開けたのが救いになつて、近頃は以前の朗かさを取り返しつつあつたので、その点では幸子の見通しが中あたつた訳であつた。が、本家からは月々の小遣を貰つてい、その外に又作品が相当な値で売れるところから、自然金廻りがよくなつて、時々びつくりするようなハンドバッグを提げていたり、舶来品らしい素敵な靴くつを穿はいていたりした。これには上の姉や幸子が心配して貯金をすすめたことがあつたが、云われる迄までもなく蓄める方も如才なく蓄めていて、ちゃんと郵便貯金の通帳を、上の姉には内証だと云つて幸子にだけ出して見せ、「中姉なかあねちゃんお小遣ないなら貸したげるわ」と云つたのには、さすがの幸子も開いた口が塞ふさがらなかつた。と、或る時幸子は、

「お宅のこいさんが奥畑の啓坊けいぼんと夙川の土手を歩いてはったのを見た」と云って、注意してくれた人があったのではつとした。実はこの間、妙子のポケット「#「ポケット」は「谷崎潤一郎全集第6巻」(中央公論新社2015年6月10日初版発行)では「ポケット」からハンカチと一緒にライターが転げ出したのを見て、妙子が隠れて煙草を吸うことには心づいていたが、廿五六にもなつてそのくらいなことは仕方がなかるうかと思っていた矢先だったので、当人を呼んで聞いてみると、本当だと云う答であつた。そして、だんだん質ただして行くと、あれきり啓ちゃんとは音信不通になつていたのだが、先日人形の個展を開いた時に見に来て、一番の大作を買ってくれたりしたこと、又付き合うようになった、でも勿論清い交際をしているのだし、それもほんのたまにしか会わない、自分も昔と違つて大人になつてゐるから、その点は信用して貰いたいと云うのであつた。しかし幸子は、そうなつて来ると、アパートに部屋を持たせておくことはちよつと不安で、本家に対しても責任があるように感じた。いったい妙子の仕事と云うものが、気分本位のものであり、そこへ持つて来ていっばし当人は芸術家気取でゐるので、製作と云つても毎日詰めて規則的にするのではなく、幾日も続けて休むこともあり、気が向くと徹夜で仕事して翌朝は脹れぼつたい顔をして歸つて来ることもあり、寝泊りはさせない筈はずだつたのが、だんだんそうも行かなくなつてゐた。それに、上本町の本家と、蘆屋の分家と、夙川のアパートとで、そう一々、妙子が何時に彼方あちらを出たから何時には此方こちらへ着く筈だと云う風に連絡を取つていかなかったことなどを考えると、幸子は少し自分がほんやり過ぎたか知らんと云う気がして、或る日妙子の留守を窺うかがつてアパートへ行き、友達の女主人に会つてゐるいろそれとなく聞いてみたりしたが、女主人の云うのには、こいさんも近頃は偉くなつて、製作法を習い

に来る弟子が二三人も出来たけれども、それは奥様やお嬢様たちで、男の人と云っては、箱の職人が時々注文を取りに来たり品物を納めに来たりするくらいに過ぎない、仕事は、やり始めたら凝る方で、午前三時四時になることも珍しくないが、そんな時には、泊る設備もないことだから一服しながら夜の明けるのを待って、一番電車で蘆屋へ帰って行くと言う話で、時間の点なども辻褄つじつまが合っていた。部屋はこの間まで六畳の日本間だったのが、最近広い方へ変ったと云うので、行ってみると、洋間に一段高くなつた四畳半の日本間の附いた部屋で、参考書、雑誌、ミン台、裂地きれじその他の諸材料、未完成の作品等々で一杯になつてい、壁に数々の写真がピンで留めてあるなど、芸術家の工房らしく雑然としてはいるけれども、さすがに若い女の仕事場らしい色彩の花やかさも感じられ、掃除もよく行き届いていて、きちんと整理してあり、灰皿の底にも吸殻すいから一つ溜たまつていないと云う風で、その辺の抽出ひきだし、状挿じょうさしなどを調べてみても、何等訝いぶかしく思われる節もなかつた。

幸子は実は、何か証拠のようなものを発見するのではあるまいかと思つて、それが恐さに出かけて来る時は気が進まなかつたのが、これなら来てみてよかつたと心からほつとして、反動的に前よりもなお妙子を信じてしまったが、そのまま一二箇月過ぎて、もうそのことが忘れられた時分、或る日妙子が夙川へ行っている留守に、奥畑がひよっこり訪ねて来て、「奥様にお目に懸りたい」と云い入れた。船場時代にはお互の家が近い所にあつた関係から、幸子も満更知らない顔ではなかつたので、兎に角面会してみると、突然で失礼だとは思つたけれども折入つて御諒解を願いたいことがありましてと云う前置きの後で、先年自分達の取つた手段は過激であつたとは思うが、決して一時の浮気心から出た行為ではなかつたこと、あの時自分達は引き離されてしまつたが、自分はこいさ

ん） 「こいさん」とは「小娘さん」の義で、大阪の家庭で末の娘を呼ぶのに用いる普通名詞であるが、その時奥畑は妙子のことを「こいさん」と云うばかりか、幸子のことを「姉さん」と呼んだ」との間に、父兄の諒解を得られるまで何年でも待とうと云う固い約束をしたのであること、自分の方の父兄は、最初はこのいさんを不良か何かのように誤解していたが、芸術的才能のある真面目なお嬢さんであることを知り、又自分達の恋愛が健全なものであることをも知って来たので、今日では結婚に反対ではないらしいこと、などを語り、それで、こいさんから伺ったところでは、此方はまだ雪子姉さんの御縁がきまらないそうであるが、それがおきまりになってからなら、私達の結婚も許して戴けると思うと云うことなので、こいさんとも相談の上で僕がお願いに出たのである、自分たちは決して急ぎはしない、適当な時期が来るまで待つが、ただ自分達がそう云う約束をした間柄であることを、此方の姉さんだけは分かっていて戴きたい、そして自分達を信用して戴きたい、尚又、いつの日にか本家の兄さんや姉さん達の方を然るべく執り成して、自分達の希望を遂げさせて下さるなら更に有難い、此方の姉さんは一番理解がおありになり、こいさんの同情者であられると伺っていたので、こんな勝手なお願いをするのだけれども、と云うのであった。幸子は一往伺ってだけおきますと云う風な挨拶をして、承知したともしないとも云わずに帰したが、奥畑が話した程度のことなら、まるきり想像していないでもなかったもので、そんなに意外には感じなかった。正直のところ、一度新聞にまで謳われてしまった間柄である以上、二人を一緒にさせるのが最良の道であることは分っていたし、本家の兄や姉達も結局は同じ考に落ち着くことと思っていたのであるが、ただ雪子の心理に及ぼす影響を慮って、出来ればその問題は先へ延ばして置きたかったのであった。で、

その日、奥畑を送り出したあとで、しよざいない時にはそうするのが癖の、ひとり応接間のピアノに向つてあれかこれかと譜本を引っぱり出しながら弾いているところへ、頃合を測つて夙川から戻つたのであろう、妙子が何気ない顔をして這入つて来たのを見ると、幸子はちよつと手を休めて、

「こいさん」

と云つた。

「今奥畑の啓ぼんが帰つて行かはつた」

「そうか」

「あんだ達のこと、あたしには分つてゐるけれど、今のところ何も云

わんと、任しといてえな」

「ふん」

「今持ち出したら、雪子ちゃんが可哀そうやよつてにな」

「ふん」

「分つてるやる、こいさん」

妙子は間が悪いらしく、強いて無感覚な表情をして「ふん」「ふん」とばかり云つていた。

「#5字下げ」四「#「四」は中見出し」

はじめ幸子は、妙子と奥畑との最近のいきさつを雪子にも誰にも話さずにいたが、或る日又二人が散歩して夙川から香櫨園へ行く途中阪神国道を横切ろうとすると、通りかかった阪国バスから雪子が降りて来て運悪く出遇つてしまったと云うことを、雪子は黙っていたけれども、そのことがあつて半月も過ぎた時分に妙子から聞いた。で、そうなつてから云

わずにいて妙子が変に誤解されるようなことがあっても思つたので、この間奥畑の訪問を受けて以来の事^{ことわけ}訳を語り、雪子ちゃんの縁がきまつてからでよいので、急ぐことではないけれども、いずれあの二人は一緒にさせなければならぬであろう、その時になつたら本家の諒^{しょうかい}解を得るために雪子ちゃんにも一と骨折つて貰^{もら}わなければ、と、云うように話して雪子の顔に現れる反応を窺^{うかが}つたが、雪子は別段のこともなく物静かに聞いてしまつてから、順序が違つたと云うだけの理由で延ばすのなら、そんな気がねをせず、先に二人を一緒にしたらよいと思う、私は後になつたところで打撃を受けもせず、希望も捨てはしない、自分は自分で幸福な日が廻つて来るような予感があるから、と、それが皮肉でも負け惜しみでもなく取れるように云つた。

しかし当人はどう思つてゐるにしても、姉妹の順で行かなければならぬことだし、妙子の方はもう極まつてゐるようなものだとすると、なおさら雪子の縁談を急ぐ必要があつた。が、ざつと以上のような事情が彼女の婚期を後^{おく}らせた原因になつた外に、もう一つ雪子を不仕合せにしたのは、彼女が未^{ひつじ}年の生れであることであつた。一般に丙午^{ひのえうま}をこそ嫌^{きら}うけれども未年の生れを嫌う迷信は、関東あたりにはないことなので、東京の人達は奇異に感じるであろうが、関西では、未年の女は運が悪い、縁遠いなどといひ、殊^{こと}に町人の女房には忌^いんだ方がよいとされているらしく、「未年の女は門^{かど}に立つな」と云う諺^{ことわざ}まであつて、町人の多い大阪では昔から嫌う風があるので、ほんに雪子ちゃんの縁遠いのもそのせいかも知れないなどと、本家の姉は云い云いした。それやこれやで、だんだん兄や姉たちもそうむずかしい条件を出しては無理だと云うことが分つて来、此方は初婚なのだから先方も同様でなければと云つていたのが、二度目の人でも子供さえなければと云い出し、次いで子供も二人までな

らと云い出し、年も二番目の義兄貞之助より一つや二つ上であつても外見が老けてさえいなければ、と云うところまで折れて来るようになった。雪子は義兄達や姉達の意見が一致した時なら、何処へでも云われるままに縁づくと言つてい、それらの条件にも不服を唱えはしなかつたけれども、ただ、子供がある場合にはなるだけその子供が可愛い顔だちの女の児であつてほしい、そうすれば自分が本当に可愛がる事が出来るよな気がするから、と云い、四十何歳と云う年の人を夫に持つのだとすれば、もうその人の立身の限度も大凡そ見えていて、さきざき収入が殖える当ても少いことだし、此方が未亡人になる可能性も多いことだから、大した財産は要らないにしても、老後の生活を保証するだけの用意のあることが望ましいと云つていたが、この後の注文は本家や分家の者達も至極尤もなこととして、条件の一つに加えていた。

井谷の話はそう云うところへ持ち込まれた訳なので、大体に於いて此方の注文と余りかけ離れてはいなかつた。財産がないと云うことだけが条件に外れているけれども、その代り四十一と云うので、貞之助より一つ二つ若く、従つてまだ将来がないと云う年ではない。姉の夫より年上でもとは云つたようなものの、勿論そうでなくて済めばその方が体裁がよく、それに越したことはないのである。そして、何より彼より一番よいことは相手が初婚であると言ふ一事で、これは、或は望めないことではないのかと諦めかけていただけに、最も此方の食指が動く点であり、この先そう云う口はめつたに見付かりそうもなくて思えた。要するに、外に少しぐらい不満足なところがあつても、初婚の一事はそれらの総べてを補つて余りあるものであつた。それから、その人が俸給生活者であるとは云うものの、仏蘭西仕込みで彼の地の美術文学にも多少通じているらしいことは、恐らく雪子に氣に入るのであろうと幸子には思えた。と云う

のは、知らない人は誰も雪子を純日本趣味のお嬢様とばかり取りがちだけれども、それは服装や体つきや言語動作から受ける表面の感じで、あれで実際は必ずしもそうでなく、現に今も仏蘭西語の稽古けいこをしているし、音楽などは日本物より西洋物の方により理解があると云う風なのである。幸子は内々M B 化学工業会社に手蔓てづるを求めて、その、姓は瀬越と云う人の評判などを問い合せて見、外へも手を廻して調べて見たが、どの方面で聞いても人格について悪く云う人は一人もないので、まあこの辺が良縁かも知れない、いずれ本家とも相談をして、と思つていると、今から一週間程前、突然井谷が蘆屋の家へタキシ―を乗りつけて、先日の話はお考え下すつたでしょうか、と云う催促と共に先方の写真を持って来た。例の井谷の畳みかけるような話ぶりなので、此方はこれから本家と相談をするところで、とは、いかにも悠長しゅうちやうらしくて云い出せず、大変結構な御縁だと思つて只今ただいま先方様のことを本家の方で調べているところですから、後あと一週間もたちましたら御挨拶に出られる積りです、と、ついでに云つてしまつと、こう云う話は早いに限りますから、その気がおありになるのでしたら、出来るだけお急ぎになつた方がよくはないでしようか、瀬越さんの方は毎日電話で「まだかまだか」と矢の催促で、兎とに角僕かくの写真もお目に懸けて、ついでに様子を伺つて来て下さいと云われましたので、ちよつとお立寄りしたのです、では一週間後にきつと御返事を、と、五分ばかりの間にこれだけのことを手短かにしゃべつて、待たして置いたタキシ―に飛び乗つて、直ぐ又歸つて行つてしまつた。幸子は万事かみがた上方式に気が長い方なので、仮にも女の一生の大事をそう事務的に運ぼうと云うのは乱暴なと思ひもしたけれども、井谷に腎しりを叩たたかれた形になつて、行動の遅い彼女にしては珍しく、明るる日上本町へ出かけて行つて姉にあらましの話をし、返事を急せかされている事情などを

打ち明けて云つてみたが、姉は又幸子に輪をかけた気の長さなので、そう云うことにはひとしお慎重で、悪くない話とは思うけれども一往夫にも相談してみて、よければ興信所に頼んで調べて貰い、その上でその人の郷里へも人を遣つて、などと、なかなか暇が懸りそうなことを云うのであつた。で、本家がああ云うからにはとても一週間やそこらでは埒が明くまい、早くても一と月は懸ると見たので、何とかしてその間を引張つて置く積りでいると、ちょうど約束の一週間が切れた昨日、又タキシーが家の前で停つたので、はつと思うと案の定井谷が這入つて来た。此方が慌てて、昨日又本家の方を急かしてみましたところ、大体異存がないらしいのですけれども、まだ調べの行き届かない点があるから、もう四五日待つて戴きたいように云つていますので、と、言訳しかけるのを皆まで聞かずに、大体御異存がないのでしたら、細かい調べは後にして、兎に角本人さん同士会つて御覧になつたら如何でしょうか、見合いと云うような形式張つたことでなく、私が両方を晩の御飯にお招きすると云うことにしますから、御本家の方達はおいで下さらないでも、此方の御夫婦がお附添い下されば結構です、先方は非常にそれを望んでおられるのですが、と、退つ引きならぬように云つた。井谷にしてみれば、この姉妹たちは少し思い上りすぎている、人が熱心に奔走してやっているのに、いつ迄悠長なことを云つていてどうする気だろう、そんな風だから婚期に後れてしまうのではないか、ちと眼が覚めるようにしてやらなければ、と云う腹があるので、なおさら押つ被せるように云うのであつたが、幸子にも、うすうすその気持が分らなくはないので、ではいつ、と云うと、急なお話のようですけれども明日の日曜にして戴けると瀬越さんも私も大変都合がよいのですが、と云う。明日は先約がありました、と云うと、では明後日と、直ぐ畳みかけて来るので、それなら大概明後

日と云うことにして置いて、しかとしたところは明日の午頃電話で御返事申しますからと、そう云って帰って貰った昨日の今日のことなのである。

「なあ、こいさん、」

と、幸子は、引っかけてみた衣裳が気に入らないで、長襦袢の上をぱつと脱ぎすてて別な畳紙を解きかけていたが、ひとしきり止んでいたピアノの音が再び階下から聞えて来たのに心付くと、又思い出したように云った。

「実はそのことで、難儀してるねん」

「そのことで、何のこと」

「今、出かける前に、井谷さんに何とか電話で云うとかならん」

「何で」

「あの人、昨日又やって来やはって、今日にも見合いさしてほしい云やはるねんが」

「あの人、いつもそんなやで」

「正式の見合いと違うて、一緒に御飯たべるだけやさかい、そんなに堅苦しゅう考えんと、是非承知してほしい云やはって、明日は都合が悪い云うたら、そんなら明後日は如何です云やはるよつてに、どうにもいや云うこと云われへんねん」

「本家はどない云うてるのん」

「姉ちゃんが電話に出て来て、行くのんやつたらあんた等が附いて行きなさい、私等が附いて行ったら後で引っ込みがつかんことになるさかいに云うねん。井谷さんもそれでええとは云うてはるねんけど」

「雪姉ちゃんは」

「さあ、それやがな」

「いやや云うのんか」

「いやとは云うてえへんけど、……ま、昨日来て今日明日のうちに見合いしようて、そない軽々しゅう扱われとうない云うのんが、ほんとうのとこやないやるか。何せはつきり云うてくれへんさかい分らへんねんけど、もうちよつとその人のこと調べてからでもええやないか云うて、何ぼすすめても行こう云うこと云うてくれへんねん」

「そんなら、井谷さんにどない云うのん」

「どない云おう。」

何とかちゃんとした理由云わなんだら、何処どこまでも追究されるにきまつたあるし、……今度のことはどうなるにしても、あの人怒らしてもて、この先世話して貰えんようになったら難儀やし、……なあ、こいさん、今日明日でのうても、四五日うちに行つてくれるように、一遍こいさんから云うてみてえな」

「云うてみることはみるけれど、雪姉きあんちゃんそない云い出したら、あかんやろ思うわ」

「いや、そうやないて。」

今度のんはあんまり急なこと云われたの

んが気に入らんので、お腹の中は満更いややないらしいねん。味善あんじよう云うたら承知するやると、あたしは見てる」

襖ふすまが開いて、雪子が廊下から這入つて来たので、ひよつと聞かれたかも知れないと思ひながら、幸子はそれきり口を噤つぶんだ。

「#5字下げ」五「#「五」は中見出し」

「中姉なかあちゃん、その帯締めて行くのん」

と、姉のうしろで妙子が帯を結んでやっているのを見ると、雪子は云った。

「その帯、あれ、いつやったか、この前ピアノの会の時にも締めて行ったやろ」

「ふん、締めて行った」

「あの時隣に腰掛けてたら、中姉ちゃんが息するとその袋帯がお腹のところできゅう、きゅう、云うて鳴るねんが」

「そやったか知らん」

「それが、微かな音やねんけど、きゅう、きゅう、云うて、息する度に耳について難儀したことがあるねんわ、そんで、その帯、音楽会にはあかん思うたわ」

「そんなら、どれにしよう。」

そう云うと又箆の開きをあけて、幾つかの畳紙を引き出してはそこから辺へ一杯に並べて解き始めたが、

「これにしなさい」

と、妙子が観世水の模様を選び出した。

「それ、似合うやろか」

「これでええ、これでええ。もうこれにしとき」

雪子と妙子とは先に着附を終わっていて、幸子だけが後れているので、妙子は子供を賺すように云いながら、又その帯を持って姉のうしろへ廻ったが、漸く着附が出来たところで、幸子はもう一度鏡の前に坐ったかと思つと、

「あかん」

と、頓狂な声を出した。

「この帯もあかん」

「何でやねん」

「何でて、よう聞いてて御覽。」

ほれ、これかてきゅう、きゅう云

うてるがな」

そう云って幸子は、わざと呼吸をして帯のお腹なかに当たるところを鳴らしてみせた。

「ほんに、云うてるわ」

「そんなら、あの、露芝つゆしばのんは」

「どうやるか、ちよつとあの帯搜して見て、こいさん」

三人のうちで一人洋装をしている妙子は、身軽あちらこちらに彼方此方と、そこらに散らばった畳紙の中味を調べてみて、それを見附けると又姉のうしろへ廻った。幸子は結ばれたお太鼓の上を片手でおさえて、立ったまま二三度息をしてみても、

「今度はええらしい」

と、口に咬くわえていた帯締を取って中へ通したが、そうしてきちんと締めてしまうと、又その帯もキュウキュウ云い出した。

「何でやる、これもやわ」

「ほんになあ、うふふふふ」

幸子のお腹のあたりが鳴る度に三人が引っくり覆かえって笑った。

「うふふふふ、袋帯を止めやにせなあかん、袋帯云うもんがあかんねんわ」

と、雪子が云った。

「いや、袋帯のせいやあれへん、地質のせいやわ」

「そうかて、近頃の袋帯は皆その地質のもんばかりやないか。その地質で、それが袋になつてるよつてに尚なおのことキュウキュウ云うねんが」

「分つた、中姉ちゃん、分つたわ」

と、妙子が又別な帯を引つ張り出した。

「これして御覧。これやつたら音せえへんやる思うわ」

「それかて袋帯やないか」

「ま、うちの云う通りに見てみなさい、どう云う訳で鳴るか云うことが分ったよつてに」

「もう一時過ぎやわ。早うせなんだら済んでしまふ。今日みたいな会は正味演奏する時間ほんちよつとしかあれへんで」

「そうかて、雪子ちゃん、自分が帯のこと云い出したんやないか」

「そんでも折角聴きに行くのんに、あんな音が耳についたらどうにもならへんもん」

「ああ忙しい。解いたり締めたり何遍もせんならん。汗掻いてしもたわ」

「阿呆らしい、うちの方がしんどいがな」

と、妙子がうしろで膝をついて、ぎゅうつと締め上げながら云った。

「注射は此方でなさいますか」

と、お春が盆の上に、消毒した注射器、ベタキシンの箱、アルコールの罌、脱脂綿入れ、絆創膏、等々を載せて這入つて来た。

「雪子ちゃん、頼むわ、注射や注射や」

そう云つて幸子は、

「あ、それからなあ、」

と、出て行くお春の背中に浴びせた。

「自動車云うといてんか、もう十分したら来るように」

雪子は毎度のことなので、馴れた手つきでベタキシンのアンプルを罌で切つて、液を注射器に吸い上げると、まだ鏡の前に立ってお太鼓に背負い上げを入れさせている幸子の左の腕をとらえて、肩の辺までまくり上げた。そしてアルコールを染ました脱脂綿で二の腕をゴシゴシ擦つてから、器用に注射の針を入れた。

「あ、痛い」

「今日はちよつと痛いかも知れん、時間ないよつてにそないゆっくりしてられへん」

一瞬間、ビタミンBの強い匂においが部屋じゅうに満ちた。雪子が絆創膏を貼はった上からびたびた叩たたいて肉を揉もんでやっていると、

「此方も済んだで」

と、妙子が云った。

「この帯やったら、帯締どれにしよう」

「それでええやんかいな、早う、早う、」

「そない急せからしゅう云わんとして。急かされたら尚のことかあツとしてしても何も彼かも分らんようになるがな」

「そんでどうや、中姉ちゃん、息して御覽」

「ふん、ほんに、」

妙子に云われて、幸子は頻しきりに息をしてみながら、

「ほんに、これやったらどないもあらへん。何でやねん、こいさ

ん」

「帯が新しいよつてにキュウキュウ云うねんが。この帯やったら、古うなつて、地がくたびれてるよつてに音せえへんねん」

「ほんになあ、そのせいやってんなあ」

「少し頭を働かしなさいや」

「御寮人ごりょうじんさんに電話でございます、井谷さんから、」

と、お春が廊下を駈かけて来て云った。

「あ、えらいこツちゃ、電話かけるのん忘れてしもてん」

「ほれ、もう自動車来たらしいわ」

「どうしよう、どうしよう」

と、幸子は鼻を鳴らしたが、雪子はまるで他人事ひとごとのように澄まし込んで

いた。

「なあ、雪子ちゃん、どない云うところ」

「どないなと云うといて」

「そうかて、あの人、味善あんじょう云わなんたら承知しやはらへんねん」「#」
「しやはらへんねん」は「谷崎潤一郎全集第10巻」（中央公論新社2015年
の月10日初版発行）では「しやはれへんねん」「」

「そこのとこ、ええように頼むわ」

「そんなら、兎に角、明日のとこだけ見合せてもろとくわな」

「ふん」

「ええやろ、それで」

「ふん」

立っている幸子には、坐つて下を向いている雪子の表情を、どうにも読
み取りようがなかった。

「#5字下げ」六「#「六」は中見出し」

「悦ちゃん、そんなら行つて来まつせ」

雪子は出しなに洋間を覗のぞいて、小女こおんなのお花を相手にままごとの道具を並
べている悦子に云つた。

「ええか、あんじょう留守番頼みまつせ」

「お土産分つてるなあ、姉ちゃん」

「分つてる。こないだ見といた御飯の炊たける玩具おもちゃやろ」

悦子は本家の伯母のことだけを「おばちゃん」と呼び、二人の若い叔母
のことは「姉ちゃん」「こいちゃん」と呼ぶのであつた。

「きつと夕方までに帰るなあ姉ちゃん」

「ふん、きつと帰る」

「きつとやなあ」

「きつとや、お母ちゃんといちゃんは神戸でお父さんが待つてはるさかい、晩の御飯たべに行くけれど、姉ちゃんは帰つて来て悦ちゃんと一緒に内でたべる。何ぞ宿題あるのんやろ」

「綴方つづりかたがあるねん」

「そんなら遊ぶのんええ加減にして、書いときなさいや、帰つてから見たげるよつてに」

「姉ちゃん、こいちゃん、行つてらっしゃい」

そう云つて玄関まで送つて来た悦子は、スリッパアのまま土間へ降りて、敷石の上を跳びながら門の際きわまで二人の叔母の跡を追つて出た。

「帰るなあ、姉ちゃん、」
「#「言+墟のつくり」、第4水準2-88-74」

ついたらいかんよ」

「何遍一つこと云うてるのん、分つてるがな」

「帰らなんだら悦子怒るよ、ええか姉ちゃん」

「ああうるさい、分つてる、分つてる」

雪子はしかし、自分が悦子からそう云う風に慕われているのが嬉しいのであつた。どう云う訳か、この児は母親が外出すると云つてもこんなにまで跡を追わないのに、雪子が出かける時はいつも執拗しつこく付き纏まとつて何とか彼とか条件を出さずにはいない。雪子は自分が、兎角とかく上本町の本家の方にいるのを嫌きらつて蘆屋あしやの方にばかり来ているのは、本家の兄と折合が悪いこと、姉のうちでも二番目の姉の方が馬が合うこと、等々が主な原因であるように、世間は勿論もちろん自分でも何となくそう思い込んでいたけれども、実は悦子に対する愛情が、前の二つにも勝る原因ではないのだらうかと、近頃心づくようになった。そしてそう心づいてからは、ひと

しお愛情がこまやかになるのを感じた。そう云えばいつか本家の姉から、雪子ちゃんは幸子ちゃんの子ばかり可愛がって内の子供をさっぱり可愛がってくれないと嫌味を云われたことがあって、返答に困ったのであるが、正直のところ、雪子はちょうど悦子ぐらいの年頃の、悦子のような型に属する女の児が好きなのであって、本家の子供達と云うのは、なるほど大勢いることはいけるけれども、女の児は今年二つになる赤ん坊が一人だけで、あとは男の児ばかりであるから、彼女の関心を惹く程度は、とても悦子とは比べものにならないのであった。彼女は早く母親に死なれ、父親にも十年程前に死なれてしまった今、本家と分家との間を往ったり来たりして定った住居もないような身の上であるから、明日が日何処へ縁づこうとも格別心残りはないようなものの、でももし結婚するとなったら、誰よりも一番親しくし、頼みにもしていた幸子と逢えなくなると云うこと、いや、幸子にはまだ逢えもしようが、悦子と逢えなくなってしまうこと、逢えても最早や昔日の悦子ではなくなっているであろうこと、自分の及ぼした感化なり、注ぎつくした愛情なりを、次第に悦子が忘れ去って別な悦子になっているであろうこと、を思うと、母親としていつまでもこの少女からの愛慕を専有していられる幸子が羨しいような、口惜しい気持がするのであった。彼女が結婚の条件として、二度目の人の許へ縁づくのなら可愛い女の児のある所へ行きたいと云ったのは、そんな理由からなのであったが、たといそう云う条件に当て嵌まった所へ行き、悦子以上に可愛らしい女の児の母となることが出来たとしても、とても悦子を愛するようにはその児を愛しられそうもなく思えるので、それを考えると、婚期に後れしていると云うことも、端々見るほど自分では淋しく感じていかなかった。どうかすれば、強いて身をおとして気のすすまない人の所へ嫁ぐよりは、このままこの家に置い

て貰^{もら}えて、母親の幸子がする役を自分がさせて貰えるのであったら、それで孤独が救われて行きそうに思いさえした。

ありていに云うと、雪子をそう云う風に悦子に結び着けたのには、いくら幸子の仕向け方もあつたかも知れない。たとえば蘆屋の家にも、雪子と妙子とが共同で使う部屋を一つ当てがってあつたが、妙子がそこを始終仕事場に利用するようになった機会に、幸子のはからいで雪子を悦子と同居させることに定^{さだ}めた。悦子の部屋と云うのは二階の六畳の日本間で、畳の上に背の低い小児用の木製の寝台が置いてあり、今まで夜は女中が一人その寝台の下に寝床を敷いて悦子に付き添って寝ていたのであるが、それからは女中の代りに、雪子が折り畳み式になった寝台用の藁^{わら}布団の上にパンヤの敷布団を二枚重ね、悦子の寝台とほぼ同じ高さに寝床を敷かせて寝るようにした。そんなことが始まりで、病気の時の介抱、学課の復習、ピアノの練習、弁当のお数やお三時の心づかい、等々の役目がだんだん幸子から雪子の方へ移って行つた。それは一つには、雪子の方が幸子よりもいろいろさういうことにかけて適任であつたからとも云える。悦子は見たところ血色も肉づきも健康さうでありながら、母親に似た体質で何処か抵抗力の弱いところがあるらしく、淋^{リン}巴^パ腺^{せん}を脹^はらすとか扁桃^{へんとう}腺^{せん}を患^{わづら}うとかして、よく高熱を出すことがあつたが、そんな時に二日も三日も徹夜で看護^{かんご}して氷嚢^{ひょうのう}や湿布^{しつぷ}を取り換える、と云うような仕事に、誰よりも堪えられるのは、雪子なのであつた。いったい三人の姉妹のうちでは、雪子が一番体つきがきゃしゃで、腕などは悦子とあまり違わないくらいの太さしかなく、いかにも胸の病など「#「病など」は「谷崎潤一郎全集第19巻」(中央公論新社2015年6月10日初版発行)では「病などが」ありさうな恰^{かっこう}好^{こう}に見えるので、そんなことも彼女を今迄^{まで}縁遠くしていた原因の中に数えられるのであるが、それでいて

消極的な抵抗力は最も強く、家じゅうの者が順々に流感に感染するような時でも彼女だけは罹かからずにしまうと云う風で、今迄ついぞ病氣らしい病氣をしたことがなかった。その点になると一番丈夫そうに見える幸子が、実は悦子と同様に見かけ倒しで、一番意気地がなく、少し無理な看病が続けば結局自分が倒れてしまつて、余計端の者に厄介をかけた。それと云うのが、幸子は先代の蒔岡家が全盛を極めた時代に育ち、亡なくなつた父の寵愛ちやうあいを一身に鍾あつめて成人したので、七つになる児の母親である今日でも、何処かだだっ児じみた所があつて、精神的にも体質的にも恹こらえ性がなく、ややともすれば二人の妹からあべこべに窘たしなめられると云う風なのであるが、そんな調子であるから、病氣の看護に限らず、総すべて子供をしつけることには甚はなだ不向きで、よく悦子を相手に本気で喧嘩けんかすることがあつた。で、世間では、幸子が雪子を家庭教師のように扱つていて、手放したがないものだから、そのために一層縁談が纏まとまりにくいのだ、良い話があつても幸子が傍そばから壊こわしてしまうのだ、などと云う者もあり、そんな噂うわさが廻り廻つて本家の方へ聞えたりしたが、本家の姉はそこまで幸子を誤解するようなことはなかつたものの、雪子ちゃんがいれば重宝じゆうほうなものだから、それで此方へ帰らしてくれないのだ、と云うくらいな蔭口かげぐちはきいた。貞之助もそれを気にして、雪子ちゃんが此方に泊つているのはよいとしても、自分達親子三人の關係の中へ割り込んで来られるのは面白くないから、悦子との間をもう少し遠ざけたらどうであるうか、悦子がお前を疎うとんじて雪子ちゃんを慕うようになったら困る、と云つたことがあつたが、幸子に云わせると、それは貞之助の思い過しで、悦子はああ見えて子供相應に如才ないところがあり、雪子に甘えてはいるけれども、本心は矢張あたしを一番好いてもいるし、何かの場合私あたしに縋すがり着かなければ駄目だめだと云うことも、結局姉ちゃんはお嫁に行くべき

人だと云うことも知っている、あたしも雪子ちゃんのお蔭で子供の面倒を見る手間が省けて、助かっているには違いないけれども、そんなことは雪子ちゃんが嫁に行く迄の、当座の間のことだ、それより私は、あんなに雪子ちゃんは子供の世話をすることが好きなのだから、今のところ悦子と云うものを当てがって置いて、いくらかでも婚期に後れた不仕合せを忘れさせようと思っっているのだ、こいさんには人形の製作と云う仕事もあり、それに伴う収入もあるのに、（そして密かに云い交している人もあるらしいのに）雪子ちゃんには何もそう云うものはないし、極端に云えば身の置き所もないような境涯なのだから、あたしとしてはあの人が可哀そうでならない、それで悦子に雪子ちゃんの孤独を慰める玩具の役をさせてあるのだ、と云うのであった。

雪子は幸子のそこまでの考を酌み取っていたかどうか知れないが、実際悦子が病気などの時には、母親でも看護婦でもとてもこうは行くまいと思えるほど献身的に介抱に努めた。そして悦子がいるために誰か一人留守をしなければならぬ場合、なるべく自分がその任に当って、幸子夫婦や妙子を出してやるようにした。だから今日の日曜なども、いつもならば彼女は居残るところなのであるが、生憎今日の会と云うのは、阪急御影の桑山邸にレオ・シロタ氏を聴く小さな集りがあつて、それに三人が招待されていると云う訳で、雪子は外の会ならば喜んで棄権するのだけれども、ピアノと聞くと行かすにはいられないのであった。で、幸子と妙子とは会が終つてから、有馬方面へハイキングに出かけた貞之助と落ち合つて、神戸で晩飯をたべる約束になつていたのであるが、雪子はその方だけを棄権して先に帰ることにしたのであった。

「#5字下げ」七「#7」は中見出し」

「ちよつと、中姉ちゃんまだやるか。」

二人はさつきから門のところ待っているのに、幸子がなかなか出て来
そうもないので、

「もう二時になるがな」

と、妙子は運転手が扉を開けて立っている方へ寄って行った。

「えらい長い電話やなあ」

「まだよう切らんのんかいな」

「切ろう思うても切らしてくれはれへんのんで、気が気やないねん」

雪子は又しても他人事のように可笑しがりながら、

「悦ちゃん、お母ちゃんに云うといで。電話ええ加減にして早よ

いらつしやいて」

「乗つてよか、雪姉ちゃん」

と、妙子は扉に手をかけながら云ったが、そう云う礼儀は正しく守るこ
とにしている雪子が、

「待つてよう」

と云ったきり応じないので、自分も仕方なく車の前に止った。そして悦
子が奥へ駈け込んで行ったのを見ると、

「井谷さんの話のこと、聞いたで」

と、運転手の方へ聞えないように云った。

「そうか」

「写真も見せてもらたで」

「そうか」

「雪姉ちゃん、どう思うてるのん」

「写真見ただけで分るかいな」

「そやよつてに、会つてみたらどうやのん」

「……………」

「折角云うて来てくれはつたのんに、会うのんいやや云うたら中姉ちゃん
が難儀するがな」

「そうかて、そない急せかんならん理由あるやるか」

「ま、きつとそんなこツちやないやるか云うててんけど、……………」

そこへどたどたと足音がして、

「あ、ハンカチ忘れたわ、誰か持つて来て。ハンカチハンカチ」

と、はみ出した長襦袢ながじゆばんの袖そでをそろえながら、幸子が門口へ飛んで出た。

「お待ち遠さん」

「長いなあ、ほんまに」

「そない云うたかて、何と言訳したらええのんやら、……………今やつと切つ
たとこやがな」

「まあ、ええ、その話後で聞こ」

「早よ乗りいな」

と、雪子の尾について妙子が云った。

幸子の家から蘆屋川の停留所までは七八丁と云うところなので、今日の
ように急ぐ時は自動車を走らせることもあり、又散歩がてらぶらぶら歩
いて行くこともあった。そして、この三人の姉妹が、たまたま天気的好
い日などに、土地の人が水道路すいどうみちと呼んでいる、阪急の線路に並行した山
側の路を、余所行きよその衣裳いしやうを着飾いしつて連れ立つつて歩いて行く姿は、さす
がに人の目を惹ひかずにはいなかったので、あのあたりの町家の人々は、
皆よくこの三人の顔を見覚えていて噂うわさし合ったものであったが、それで
も三人のほんとうの歳を知っている者は少かつたであろう。幸子には悦
子と云うものがあるので、そんなに隠かくせはしない筈はずだけれども、その幸

子さえどうしても二十七八以上には見えず、まして嫁入前の雪子はせいぜい取っついても廿三四、妙子になると十七八の少女に間違えられたりした。だから雪子などは、本来ならばもう「お嬢さん」だの「娘ちゃん」だのと呼ぶのには可笑しい年頃なのだけれども、誰もそう呼んでいて奇妙に思う者はなかったし、又三人ながら派手な色合や模様の衣裳がよく似合うたちなのであった。それは衣裳が派手であるから若く見えると云うのではなくて、顔つきや体つきが余り若々しいために派手なものを着なければ似合わないと云うのが本当であった。貞之助は、去年この姉妹に悦子を連れて錦帯橋へ花見に行った時、三人を橋の上に列べて写真を撮ったことがあつて、その時詠んだ彼の歌に、

美しき姉妹三人居
ならばて写真とらすなり錦帯橋の上、と云うのがあつたが、全く、この姉妹はただ徒に似ていると云うのとは違つて、それぞれ異なつた特長を持ち、互に良い対照をなしながら、一方では紛う方なき共通点のあるところが、見る人の目にいかにもよい姉妹だと云う感を与えた。先ず身の丈からして、一番背の高いのが幸子、それから雪子、妙子と、順序よく少しずつ低くなつているのが、並んで路を歩く時など、それだけで一つの見物なのであるが、衣裳、持ち物、人柄、から云うと、一番日本趣味なのが雪子、一番西洋趣味なのが妙子で、幸子はちょうどその中間を占めていた。顔立なども一番円顔で目鼻立がはっきりしてい、体もそれに釣り合つて堅太りの、かつちりした肉づきをしているのが妙子で、雪子はまたその反対に一番細面の、なよなよとした瘦形であつたが、その両方の長所を取つて一つにしたようなのが幸子であつた。服装も、妙子は大概洋服を着、雪子はいつても和服を着たが、幸子は夏の間は主に洋服、その他は和服と云う風であつた。そして似ていると云う点から云えば、幸子と妙子とは父親似なので、大体同じ型の、ぱつと明るい容貌の持ち

主で、雪子だけが一人違っていたが、そう云う雪子も、見たところ淋しい顔立でいながら、不思議に着物などは花やかな友禪縮緬ちりめんの、御殿女中式のものが似合つて、東京風の渋い縞物しまものなどはまるきり似合わないたちであつた。

いつも音楽会と云えば着飾つて行くのに、分けても今日は個人の邸宅に招待されて行くのであるから、精一杯めかしていたことは云うまでもないが、折柄の快晴の秋の日に、その三人が揃つて自動車からこぼれ出て阪急のフォームを駆け上るところを、居合す人々は皆振り返つて眼を敬そはだてた。日曜の午後のことなので、神戸行の電車の中はガランとしていたが、姉妹の順に三人が並んで席に就いた時、雪子は自分の真向うに腰かけている中学生が、含羞はにかみながら俯向うつむいた途端に、見る見る顔を真まっ赧かにして燃えるように上氣して行くのに心づいた。

「#5字下げ」ハ「#「ハ」は中見出し」

悦子はままごとにも飽きてしまつと、お花に云いつけて二階の部屋から帳面を持って来させて、洋間で宿題の綴方つづりかたを書いていた。

いつたいこの家は大部分が日本間で、洋間と云うのは、食堂と応接間と二た間つづきになつた部屋があるだけであつたが、家族は自分達が団樂まどいをするのにも、来客に接するのにも洋間を使い、一日の大部分をそこで過すようにしていた。それに応接間の方には、ピアノやラジオ蓄音器があり、冬は暖炉だんろに薪まきを燃やすようにしてあつたので、寒い時分になると一層皆が其方そちらにばかり集つてしまい、自然そこが一番賑にぎかであるところから、悦子も、階下に来客が立て込む時とか、病気で臥ねる時とかの外は、夜でなければめつたに二階の自分の部屋へは上つて行かないで、洋間で

暮した。二階の彼女の部屋と云うものも、日本間に西洋家具の一揃そろいが備えてあつて、寢室と勉強部屋を兼ねるようにしてあつただけれども、悦子は勉強するのにも、ままごと遊びをするのにも、応接間であることを好み、いつも学校用品やままごとの道具をそこら一杯散らかしているので、不意に來客があつたりすると、よく大騒ぎをすることがあつた。夕方、表のベルが鳴ると、悦子は鉛筆を放り出して迎えに出たが、約束のお土産の包を提げて応接間へ這入はいつて來た雪子のあとから、自分も飛んで這入りながら、

「見たらいかんよ」

と、慌あわてて帳面をテーブルの上に伏せた。そして、

「お土産、見せて」

と、直すぐその包を引つたくつて、中の玩具おもちゃを長椅子の上にならべた。

「有難う、姉ちゃん」

「このことやる」

「ふん、これやわ、有難う」

「もう綴方書けたのんか」

「いかん、いかん、」

悦子は帳面を取り上げると、両手でひしと胸に抱きしめるようにしながら向うの方へ飛んで行つた。

「これ、ちよつと訳があるねん」

「何やのん」

「うふふふふ、これなあ、姉ちゃんのこと書いてあるねん」

「書いてあつたかてええ。見せなさい」

「後で、後で見せる。今はいかんねん」

悦子はその綴方は「ウサギノミミ」と云う題で、姉ちゃんのことがちよつ

と出て来るのだと云った。そして、今見られるときまりが悪いから、自分が寝たあとでゆっくり見て、間違っているところがあつたら直しておいてほしい、自分は明日の朝早く起きて、学校へ行く前に清書するからと云うのであつた。

雪子は幸子たちがどうせ映画館か何かへ廻つて、帰りがおそくなることが分つていたので、夕飯を済ますと悦子と一緒に風呂に漬かつて、八時半頃に寝室へ上つた。悦子は幼い児のわりに余り寝つきがよくない方で、寝台に這入つてから二三十分の間、何かしきりに興奮してしゃべり続ける癖があるので、彼女を無事に寝かしつけると云うことが一と仕事になつていたのであるが、雪子はいつても、こうして悦子を寝かしつけておしゃべりの相手になりながら自分も眠る。そしてそのまま寝通してしまふこともあり、一と寝入りしてから、悦子を起さないようにそっと自分だけ起きて、寝間着の上に羽織を引っかけて降りて来て、ひとしきり幸子たちと茶飲み話をすることもある。どうかすればそれに貞之助も加わつて、チーズに白葡萄酒しろぶどうしゅが出たりして、めいめいが一杯ずつぐらいは相手をしたりもする。が、ときどき肩を凝らす雪子は、今夜もひどく凝つて来て寝られないので、まだ幸子たちが帰るのには間があると思つたけれども、ちようどその間にあの綴方を見て置いてやらなければと、好い塩梅あんばいに眠つたらしい悦子の寝息をうかがいながら起きて、枕まくらもとの電灯のスタンドの横に置いてあるさっきの帳面を開けて見た。

「#ここから8字下げ」

ウサギノミミ

「#ここから1字下げ」

私ハウサギヲカツテキマス。コノウサギハアル人ガ「オチヤウチヤンニ

サシ上ゲマス」トイッテ、モツテキテクレタウサギデス。

私ノ家ニハ犬ヤネコガヱマスカラ、ウサギハベツニシテ、ゲンカンニオ
イテアリマス。私ハマイ朝学校へ行ク時ニ、キツトソノウサギヲダイテ、
ナデテヤリマス。

コノ前ノ木エウ日ノコトデシタ。朝学校へ行ク時ニゲンカンへ出テミマ
シタラ、ウサギノミミガ、一ツダケピント立ツテヱテ、一ツハヨコニタ
オレテヱマシタ。私ハ「オヤ、オカシイナ、ソツチノミミモ立テナサイ」
トイヒマシタケレドモ、ウサギハシランカオシテヱマス。私ハ「ソナ
ラ私ガ立テテ上ゲヨウ」トイッテ、手デ立テテヤリマシタガ、手ヲハナ
スト、スグマタパタリトオレテシマヒマシタ。私ハネエチャンニ、「
ネエチャン、アノウサギノミミヲ立テテ下サイ」トイヒマシタノデ、ネ
エチャンハ足デウサギノミミヲツマンデ、立テテオヤリニナリマシタ。
シカシネエチャンガ足ヲオハナシニナルト、ソツチノミミハマタパタリ
トオレテシマヒマシタ。ネエチャンハ「オカシナミミデスネ」トオツ
シヤツテ、オワラヒニナリマシタ。

「#ここで字下げ終わり」

雪子は慌てて、「ネエチャンハ足デウサギノミミヲ……」とある「足
デ」の二字を鉛筆で消した。

悦子は学校でも綴方はよく出来る方なので、この文章なども巧く書^{うま}けて
いた。雪子は自分も字引を見ながら、「オカシナ」を「ヲカシナ」に、
「タオレ」を「タフレ」に、「シランカオシテヱマス」を「シランカホ
シテヱマス」#「シランカホシテヱマス」は「谷崎潤一郎全集第^{二〇}巻」
(中央公論新社2015年の月^{二〇}日初版発行)では「シランカホヲシテヱマ
ス」に直しただけで、外には何処も文章として間違ったところはな

いように思ったが、当惑したのはこの「足デ」の処置であった。彼女は「ネエチヤン八足デ」から以下「タオレテシマヒマシタ」までを次のように訂正した。

「#ここから1字下げ」

……ネエチヤンモウサギノミミヲツマンデ、立テテオヤリニナリマシタガ、ネエチヤンガソノミミヲオハナシニナルト、マタパタリトタフレテシマヒマシタ。……

「#ここで字下げ終わり」

「足デ」の代りに「手デ」とするのが一番簡単であったけれども、実際あの時は足でしたのに違いないので、子供に「#「言+墟のつくり」、第^う4水準2-88-74」を書かせてはならないと考えた結果、いくらか曖昧^{あいまい}に取れるように、こう書き直したのであったが、これが自分の知らないうちに学校へ持って行かれて、先生に読まれてもしていたらと思うと、彼女は心の奥の方でヒヤリとした。そして、それにしても飛んだところを悦子に書かれてしまったのが、何だかひとり可笑しくもなつて来るのであった。

この「足デ」の由来を物語るところなのである。

蘆屋の家の隣家、と云うよりは背中合せの庭つづきになつている家に、半年ほど前からシュトルツと云う独逸人^{ドイツ}の一家が移つて来て住んでいた。両家の庭の境界には目の粗い金網の垣^{かき}が繞^{めぐ}らしてあるだけだったので、悦子は直きにシュトルツ氏の子供たちと顔見知りになり、最初のうちは金網を隔てて、動物が互の臭^{におい}を嗅^かぎ合うように鼻を寄せつけて睨^{にら}み合っていたが、間もなく双方から金網を越えて出入りし始めた。独逸人の子は上がペーターアと云う男の子、次がローゼマリーと云う女の子、下がフリッツと云う男の子で、一番兄のペーターアが見たところ十か十一、ロー

ゼマリーが悦子とちょうど同じぐらいの年恰好かつこうをしていたけれども、西洋の子供は大柄であるから、実際の歳はもう一つ二つ下であるらしくかった。悦子はその兄妹たち、分けてもローゼマリーと仲好しになって、毎日学校から帰って来ると、庭の芝生へ誘い出して遊んだ。ローゼマリーは悦子のことを「エツコ、エツコ」と呼んでいたが、誰か注意する者があつたと見えて、間もなく「エツコさん、エツコさん」と呼ぶようになり、悦子はローゼマリーのことを、親や兄弟たちが呼ぶ「ルミー」と云う愛称を使って、「ルミーさん、ルミーさん」と呼んでいた。

ところで、シュトルツ氏の家にはジャアマンポインタア種の犬と、欧羅ヨーロッパ巴種ツバの全身真っ黒な猫とがいたが、その外に、裏庭の方に箱を作ってアングラ兔うさぎを飼っていた。悦子は犬や猫は自分の家にも飼っているので珍しくはなかつたけれども、兔は珍しいので、よくローゼマリーと一緒に餌えさをやったり、耳を持って抱き上げたりしていたが、やがて自分もほしくなつて、兔を飼つてくれるように母にせがんだ。幸子は動物を飼うのはよいが、扱い馴なれないものを飼つて死なしてしまうと可哀かわいそうであるし、ジョニーと鈴でも好い加減手がかかるのに、そこへ又兔が来ては餌をやるだけでも厄介やっかいであるし、第一、ジョニーと鈴に食い殺されないように困こまつておくと云つても、この家にはそう云う適当な場所がないしするので、躊躇ちゅうちゆしていると、出入りの煙突掃除の男がこれをお嬢ちゃんに上げてくれと云つて、何処どこからか兔を一匹持つて来た。尤もアングラ兔でないただの兎であつたが、真っ白な、きれいな兎ではあつた。悦子は母たちと相談して、結局犬や猫から隔離するには玄関の土間が一番安全だと云うことになつて、そこに置いて飼うことにしたが、兎はただ赤い眼を見開いているだけで、何を話しかけてもまるきり手筈がないので、犬や猫とは大分工合が違うなあと云つて、大人たちは皆可笑おかしがつた。

そしてどうしても犬や猫のように人情が添わず、人間とは全く関係のない、何かピクピクした奇妙な存在であると云う感じしか湧かなかつた。悦子が綴方に書いたのはこの兎のことなのであつた。雪子は毎朝、悦子を起して朝飯の世話をしやり、鞆かばんの中を調べた上で学校へ送り出してやつてから、もう一度寢床へ這入つて温まるのであるが、その日は晩秋の寒さが沁しみる朝だったので、寢間着の上に羽二重のナイトガウンを羽織り、鞆こはぜも掛けずに足袋たびを穿はいたまま玄関まで送つて出ると、悦子がしきりに兎の一方の耳を持つて立てようとしていた。そして、いくら立てても其方そちらの耳が立たないので、「姉ちゃん、やつてみてえな」と云つた。雪子は悦子を遅刻させないために、早く手伝つて立ててやろうと思つたけれども、そのぶよぶよした物に手を触れるのが何となく無気味だったので、足袋を穿はいている足を上げて「#「足へん+母お」、U+27FFぢ、63-14」の股またに耳の先を挟はさんで摘つまみ上げた。が、足を放すと、直ぐ又パタリと兎の横顔の上へその耳が垂れて来るのであつた。

「姉ちゃん、何で此処ここいかんのん」

悦子は明るく朝、綴方が直されているのを見ると云つた。

「いややわ、悦ちゃんは。足でした云うこと書かんかてええがな」

「そんなでも、足でしたやないの」

「そら、手で触いうたら気味が悪いよつてに、」

「ふん」

と云つたが、臍ふに落ちないらしい顔つきで、

「そんなら、その訳書いたらええやないの」

「そうかてそんなけつたいな恰好したこと、書けますかいな。先生が読まはつたら、えらい行儀の悪い姉ちゃんや思やはるがな」

「ふん」

悦子はそれでもまだよく呑み込めないらしかった。

「#5字下げ」九「#「九」は中見出し」

「明日御都合がお悪いのでしたら、十六日は大変日が吉いのだそうです
が、十六日にきめて戴く訳には参りませんか」 幸子は先

日、出しなに電話に掴まった時にそう云われて、しよふことなしに承知
させられてしまったのであるが、「ではまあ行つて見てもよい」と云う
言葉を、どうにかこうにか雪子の口から引き出す迄にはそれから二日か
かったことであつた。それも、井谷が双方をただ何となく招待すると云
うかねての約束に従つて、努めて見合いのような感じを起させないよう
にと云う条件付きで、当日時間は午後六時、場所はオリエンタルホテル、
出席者は、主人側は井谷と井谷の二番目の弟の、大阪の鉄屋国分商店に
勤めている村上房次郎夫妻、 この房次郎が先方の瀬越なる人の旧
友であるところから今度の話が持ち上つた訳なので、これは是非とも当
夜の会合に欠けてはならない顔であつた。 瀬越側は、当人一人と

云うのも淋しいし、と云つてわざわざ国元から近親者を呼び寄せるべき
場合ではないので、幸い瀬越の同郷の先輩で、房次郎の勤め先国分商店
の常務をしている五十嵐と云う中老の紳士がいたのを、房次郎から頼ん
で介添役に出て貰うことにし、此方側は貞之助夫妻に雪子の三人で、主
客八人と云うことになつた。

その前の日、幸子は当日の頭髪を捨えるために雪子と二人で井谷の美容
院へ出かけたが、自分はセットだけのつもりなので、雪子を先にやらせ
て、番の来るのを待っていると、井谷がちよつと仕事の際に這入つて来
て、

「あの、」

と、小声で云いながら彼女の顔の方へ腰をかがめた。

「あの、実は奥さんをお願いがございますの」

井谷はそう云って、耳元へ口を寄せて、

「こんなこと、申し上げなくても無論お分りと存じますけれど、明日は何卒どうか奥さんは思いきり地味にお作りになって戴きたいんですの」

「ええ、それは分ってます」

と、幸子が云うのに押かぶつ被せて、

「でもちよつとぐらい地味にお作りになったんではいけませんのよ。ほんとうに、思いきり地味にして下さらなけりゃ。お嬢さんもお綺きれ

麗いでいらつしゃいますけれど、何しろああ云う細面の淋しい顔だちですから、奥さんとお並びになると一二割方御損ですわ。奥さんの方は又非常にぱつとした派手なお顔だちで、それでなくても人目につき易やすくつていらつしゃるから、どうか明日だけは、十も十五も老ふけてお見えになるようにして、精々お嬢さんを引き立ててお上げになって下さい。でないと、奥さんが附いておいでになつたばかりに纏まとまるものも纏まとまらないでしまふなんてことが、ないとは限りませんからね」

幸子はこう云う注意を受けるのは今度が始めてではなかつた。今迄にも雪子の見合いに立ち会つたことは数回あるが、「あの姉さんの方は陽気で近代的だけれども、妹さんは少し内気で陰性に見える」とか、「あの姉さんの若々しい明るい顔があたり一杯にひろがつて見えて、妹さんの顔の印象が消されてしまう」とか、よくそう云われたことがあり、中には「本家の姉さんだけ立ち会つて下さつて御分家の姉さんは遠慮して戴きたい」などと云い入れる者さえあつた。幸子はそれを云われる度に、そんなことを云う人は雪子ちゃんの顔のよさが分らないのだ、なるほど

私の顔のように陽性で賑にぎやかなのが、近代的と云うものかも知れないけれども、こう云う顔は近頃の世間にはザラにあるので、珍しくも何ともない、自分の妹のことを褒ほめるのはおかしいけれども、ほんとうの昔の箱入娘、荒い風にも当らないで育つたと云う感じの、弱々しいが楚そ々とした美しさを持った顔と云えば、先ずうちの雪子ちゃんなどの顔ではあるまいか、あの美しさが分つてくれて、是非ともああ云う人がほしいと云うのでなければ私の妹は上げられない、と、雪子のために大いに弁じたものであつたが、でも本心は、さすがに優越感を抑え難いところもあつて、「あたしが一緒やつたら雪子ちゃんの邪魔することになるねんで」と、夫の貞之助の前でだけは幾らか誇らしげに云つたりした。貞之助も亦また、「そんなら僕だけ附いて行つたげる。お前は遠慮しとき」と云つたり、「いかん、まだそれでもいかん。もつともつと地味に作らなんだら、又妹のお株を取る云われるがな」と、化粧や着附のやり直しをさせたりしながら、矢張内心はそう云う花やかな妻を持ったことに喜びを感じている様子が、幸子の眼にははつきりと見えた。それで、幸子は、雪子の見合いに立ち会つのを差控えたことも一二度あつたくらいであるが、大概の場合、本家の姉の代理としてどうしても出席しなければならぬようにさせられたし、雪子がまた、中姉なかあねちゃんが附いて来てくれなければ嫌いやだと云うことが多かつたので、そんな時には、随分地味な捲えをして行くように努めはしたものの、日頃の衣裳いしやう持ち物が派手なものばかりであるから、そう云つても凡おほそ限度があつて、「あれでもまだいけない」と後になつてから云われることがしばしばあつた。

「……………ええ、ええ、いつも皆さんにそない云われますのんで、よう分つてます。仰おほつしやるまでものう、明日はほんまに地味にして行こう思うてましてん。……………」

待合室には幸子が一人いただけで外には誰も聞いている者はなかったけれども、すぐ隣の室の間仕切に垂れているカーテンが絞ってあって、雪子はその部屋の椅子にかけつつ頭からドライヤーを被せられている姿が、鏡に反射して二人の方へまともに見えていた。井谷のつもりでは、ドライヤーを被っているから当人に聞える筈はないと思っっているのらしいけれども、二人がしゃべっている様子は雪子の方にもよく見えていて、何を話しているのか知らんと、上眼づかいに、じつと此方に瞳を据えていられるらしいので、幸子は唇の動き工合からでも推量されはしないであろうかとハラハラした。

当日雪子は姉妹たちに手伝って貰って三時頃から拵えにかかったが、貞之助も事務所の方を早じまいにして帰って来て、化粧部屋に詰めると云う張り切り方であつた。貞之助は着物の柄とか、着附とか、髪かたちなどに趣味を持っていて、女たちのそう云う光景を眺めることが好きなのであるが、一つにはこの連中が時間の観念を持たないことに毎度ながら懲りているので、午後六時と云う約束に遅れないように監督するためでもあつた。

悦子は学校から帰ると鞆を応接間へ投げ出して置いて、上つて来て、「今日は姉ちゃんお嬢さんに会うのんやてなあ」

と、勢込んで這入つて来た。幸子ははつとして、鏡の中の雪子の顔色が直ぐに変わったのを見て取りながら、さあらぬ体で、

「そんなこと、誰に聞いたん」

「今朝お春どんに聞いたんよ。　　そうやる、姉ちゃん」

「違うがな」

と、幸子が云つた。

「今日はお母ちゃんと姉ちゃんと、井谷さんに呼ばれてオリエンタルホ

テル御馳走ごちそうになるねんが」

「そうかて、お父さんも行くのんやないか」

「お父さんかて呼ばれてはるねん」

「悦ちゃん、下へ行つてらっしゃい」

と、鏡を視つめたままの姿勢で雪子が云つた。

「下へ行つて、お春どんにちよつと来るように云うて頂戴ちやうだい。悦ちゃん
は上つて来んかてよろしい。」

いつもは彼方あっちへ行きなさいと云つてもなかなか云うことを聴かないのであるが、雪子の語調に何かただならぬけはいを察して、

「ふん」

と云うと、悦子は出て行つた。そして程なく、

「何ぞ御用で、」

と、お春が恐る恐る襖ふすまを開けて闕際しきいぎわに手をついたが、悦子に何か聞かされたものと見えて、これも顔色を変えていた。その間に貞之助も妙子も、形勢険悪と見て早いこと姿を消してしまつた。

「お春どん、あんたお嬢ちゃんに、何ぞ今日のこと云うたんか」

幸子は今日の見合いのことを女中達に話した覚えはないが、特に彼女達に知られないように気を付けていなかった越度おちどはあるので、こうなつて見ると、雪子の手前、自分がお春を糺たださねばならない責任を感じた。

「なあお春どん、……………」

「……………」

お春は下を向いたきり、「悪うございました」と云うことを恐縮した体つきで示した。

「あんた、お嬢ちゃんにいつ云うたん」

「今朝でございます。……………」

「何と申うて云うたん」

「……………」

お春と云うのはまだやつと十八になる娘であつたが、十五の時から奉公に来、今では上女中かみじよちゆうを勤めているので、殆ど家族の一員のように親しまれていて、そのせいと云う訳でもないけれども、この女だけ初めからの呼び癖で、特別に「どん」附けにされてきた。（悦子は「おはアどん」と云う愛称で呼び、時には「おはア」と呼び捨てにした）そして毎日、悦子が学校へ往復するのに、交通事故の多い阪神国道を越えなければならぬので、必ず誰かが送り迎えをすることにきめてあつたのが、大概お春の役になつていた。で、だんだん問い詰めて行くと、今朝学校へ送つて行く路みちで悦子に話したらしいのであるが、平素はひどく愛想のよい女であるのに、叱しかられると俄然がぜん気の毒しおなくらい萎しおれてしまふのが、余所目よそめには却かえつて可笑おかしみを誘つた。

「そら、あたしかて、この間からあんた等らのいてるところで電話かけたりしたのんは、注意が足らなんだかも知れん。けどあの電話聞いてたら、なおのこと、今日は何もそない改かまつたことやない、ほん内証の集りや云うこと、あんたにも分つてる筈はずや。たとい又何であるにしたかて話してええことと悪いこととあるやないか。そんな、まだどうなるやら分りもせんこと子供に話す云うことあるかいな。あんた、いつから此処ここの家うちにいてるのん。昨日や今日奉公に来たんやあれへんのに、それぐらいのこと分らんのかいな」

「このことばかりやあれへん」と、今度は雪子が云つた。

「あんた一体いつも口数くすうが多うて、云わんでもええことおしゃべりするのん、悪い癖くせやわ。……………」

二人に代る代る云われている間、聞えているのかいないのか分らないようにじーっとして、俯向いたまま身動きもしないでいたお春は、「もうええ彼方へ行き」と云われてからもまだ暫く死んだようになっていたのが、「もう行きなさい」と二三度云われると、漸く聞き取れない程の微かな声で詫び言を云って立って行つたが、

「いつも云われてる癖に、何と云うおしゃべりやる」

と、幸子はまだ機嫌の直らない雪子の顔色を窺い窺い云つた。

「やっぱり私が不注意やつてんなあ。電話かけたりする時に何とかあの人等に分らんような云い方もあつてんけど、まさか子供に教せたりするとは思てえへんよつてに、……」

「電話もそうやけど、この間からお春どんの聞いているとこで見合いや何や云うて相談してたのん、気になつてたんやわ」

「そんなことあつたか知らん」

「何遍もあつたわ。話してるところへ這入つて来ると、その時は誰も止めるけれど、出て行ってまだドアの外にいるのんに、大きな声で話しやはるよつてに、あれ聞えてたに違いない思うててん」

そう云えば、先日から数回、いつも悦子が寝てしまつてから、夜の十時過ぎ頃に、貞之助、幸子、雪子、時には妙子も加わつて、応接間で今日の見合いのことについて相談したことがあり、そこへお春が時々飲み物などを運ぶのに、食堂を通つて這入つて来たが、その食堂と応接間の境界は三枚の引き戸になつていて、戸と戸の間が指が入れられる程透いているところから、食堂にしていると応接間の話声が可なりよく聞えるのであつた。まして夜更けの静かな時は尚更であるから、余程小声で話さなければいけないのに、誰もその辺にあまり注意を払わなかつたのは事実である。但し雪子だけは気が付いてたと云うなら、そうかも知れない

が、今になつてそれを云い出すくらいなら、あの時その場で注意してくれたらよかつたものを、

雪子ちゃんは地声が小さいのだから、あの時にしても殊更ことさら小声で話していたようには感じられなかつたし、黙つていたんでは誰にも分りようはありはしない。全く、お春のようなおしゃべりも困るが、この人のようにいつも言葉数の足りないのも困つてしまふ。

と、幸子は思わずにはいられなかつたが、それでも雪子が、「大きな声で話しやはる」「#「しやはる」に傍点」と、敬語で云つているところを見ると、彼女の批難は専ら貞之助に向けられているのらしく、そしてあの時黙つていたのも貞之助に対する遠慮だと取れば、領けないこともないのであつた、實際貞之助の声は変によく徹る甲高い声なので、ああ云う場合一番人に聞かれ易いのであるから。

「雪子ちゃんそれに氣イ付いてたのんやつたら、あの時云うてくれたらよかつたのんに、」

「まあ、これからあの人等らの前でこう云う話せんようにしてほしいわ。あたしかて見合あいするのんは嫌いややないねん。……そのつどあの人等に、又今度もあかなんだのかいな思われるのんが辛つらいさかい……」

急に雪子の声が鼻にかかつて、涙が一滴鏡の面に影を曳ひきながら落ちた。「そない云うけど、今迄かて先方から断られたのんは一つもあれへんねんで。なあ、雪子ちゃん知つてるやる、いつも見合あいの後で先方は是非に云うてくれはるねんけど、此方こちが氣に入らんのんで、壊こわれてたんやないか」

「けど、あの人等らはそない思うてくれへんもん。今度もあかなんだ云うたら、あの人等らきつと、又断られた思うやろうし、思わんまでもそんな噂うわ云さい触ふらすにきまつたあるさかい……そやさかい……」

「もうええ、ええ。その話止やめといて。私等らが悪かつたよつてに、

これからきつとそないするわ。顔が壊れてしまふやないか」
幸子は寄って行って顔を直してやろうと思つたが、今直ぐでは一層涙を誘い出しそんな懸念があるので差控えた。

「#5字下げ」十「#十」は中見出し」

離れの書齋に逃げ込んでいた貞之助は、四時が過ぎてもまだ女達の支度が済まないらしいので、そろそろ時間を気にしていたが、ふと、前栽の八つ手の葉の乾いた上にパサリと物の落ちる音がしたので、机に凭つたなり手を伸ばして眼の前の障子を開けて見ると、ついさっきまで晴れていた空がしぐれて来て、かすかな雨の脚が軒先にすいすいと疎らな線を引き始めていた。

「おい、雨やで」

と、貞之助は母屋へ駆け込んで、階段の途中から怒鳴りながら化粧部屋へ這入った。

「ほんに、降って来たわ。」

と、幸子も窓の外を覗きながら、

「時雨やよつてに、直き止むわ、きつと。」

青いところが見えてまっ

しやないか」

が、そう云ううちに見る見る窓の外の瓦屋根が一面に濡れて、ざあツと云う本降りらしい音に変わって来た。

「自動車云うてないのんなら、今直ぐ云うとかないかんで。五時十五分頃に間違はなく云うて。僕、雨やったら洋服にするわ。紺背広で

ええやるな」

いつも俄雨があると、蘆屋じゅうの自動車が引つ張り凧になるので、貞

之助の注意で直ぐに電話をして置いたのであるが、三人の身支度が出来上つて、五時十五分が二十分になつても、車は来てくれないし、雨はいよいよ激しくなる。あるだけのガレージを呼び出して見るけれども、今日は日が吉いので結婚が何十組もあるのと、生憎雨が降り出したので、皆出払つておりますから帰りましたらお廻し致しますと云う挨拶である。今日は神戸まで車で直行するとして、五時三十分に出さえすればきつちり六時には間に合うのであるが、その三十分も過ぎてしまったので、貞之助は気が気でなく、井谷に催促されないうちに何とか断つて置かなければと、オリエンタルへ電話をかけると、もう此方は皆さんお揃いでいらっしやいますと云う。とこうするうち六時五分前になつて漸く車が来てくれたが、折柄土砂降りに降り出した中を運転手がさしかける番傘に送られて順々に一人ずつ走って行きながら、したたか襟元に冷たいしぶきを受けた幸子は、車内に納まつてほつとすると同時に、そう云えば雪子の見合いと云うと、この前の時も、その前の時も、雨が降つたことを思い出していた。

「いやア、三十分遅刻してしまいました。」

貞之助は、外套預所のところまで迎えに出ていた井谷を見ると、挨拶よりもまず詫び言を並べた。

「今日は日が吉いので、結婚が多いところへ持つて来て、突然の雨で、車がなかなか来てくれなかつたもんですから、……」

「ほんとうに、私も此処へ参ります途中で、お嫁さんに乗せた自動車を何台も見かけましたわ」

そう云つて井谷は、幸子と雪子とがコートを預けている隙に、

「あの、ちよつと、」

と、貞之助に眼で合図をして蔭へ呼びながら、

「只今^{ただいま}彼方^{あちら}で瀬越さん達にお引き合せ致しますが、……あの、その前にちよつとお伺い致しますが、もう蒔岡さんの方ではすっかりお調べがお済みになつていらつしやいますのでしようか」

「はあ、それが実は何なのです、瀬越さん御本人についての調べは済んでいまして、もう申分のない方だと云うて大変喜んでいるのですが、今お国元の方のことを本家で調べていますので。……尤^{もつと}もそれも、あらかた分つておりまして、大体差支えないように云うているのですが、ただ或^ある方面に頼んだ報告が一つだけ来ていないから、もう一週間も待つて戴^{いた}いたらと申しているような訳なのです」

「ああ左様で、……」

「いろいろお骨折にあずかりながら、遅れておりまして申訳ありません。何しろ本家の連中は昔風で悠長^{うちやうぢやう}だものですから。……しかし僕にはあなたの御親切なお心持がよく分つていますので、今度のお話は大賛成なのです。今時あまり旧弊なことを云うていますとますます婚期を逸してしまうばかりだから、御当人さえ立派な方なら、あとの調べは好^ええ加減なところで宜^{よろ}しいやないかと、僕は極力勧めているのですが、まあ今夜の様子で、当人同士異存がないようなら、今度は多分^ま纏まりそうに思われますな」

貞之助は予^{あらかじ}め幸子と口を合せて置いたので、巧^{うま}い工合に言訳をしたが、それでも後の半分は正直な自分の気持を述べたのであつた。

時間が遅れたので、ロビーでの紹介が簡単に済むと、直ぐ八人が一緒に昇降機に乗つて二階の小宴会場に上つた。食卓の両端に井谷と五十嵐、片側に瀬越、房次郎夫人、房次郎、片側に瀬越と向い合つて雪子、幸子、貞之助、昨日幸子が美容院で井谷から相談を受けた時の席順は、片側は瀬越の左右に房次郎夫婦、片側は雪子の左右に貞之助夫妻となつ

ていたが、それでは改まるからと、幸子の提議で斯様に直して貰ったのである。と云う風に列んだ。

「今日は私は、図らずも飛んだ御相伴に与りますような訳で、」

と、五十嵐がもう好い時分と見ると、スープを掬いながら皮切りをした。

「本来私は瀬越君と同郷ではございますが、御覧の如く年齢の点では確かに私の方が遙か先輩でございます、別段学校が一緒と云う訳でもございません。強いて御縁があると申せば、お互の生家が同じ町の近い所にあつたぐらいなことでしょうかな。ですから今日斯様な席へ列しますことは、光栄の至りではございますけれども、甚だ出過ぎておりますようで恐縮に存じますのですが、実を申しますと、此処へ私を無理に引つ張り出しましたのは、外ならぬ村上君なのでございまして、どうも村上君は、何ですよ、……お姉さんの井谷さんも中々男勝りの雄弁なお方でいらっしゃるが、御令弟の方もそれに劣らずお口上手でありまして、今日のような極めて有意義なる宴会に出席を乞われて応諾をせるとは何事か、それでは折角の会合にケチがつく、こう云う時には是非老人が一枚加わる必要があるのだから、君の禿頭の手前に対しても遁げ口上は許さないと、強引に持ちかけられましたな」

「あははははは、しかし常務さん」

と、房次郎が云った。

「そう仰っしゃる御自身も、御出席になつてみて決して悪いお心持はなさらないでしょう」

「いやこの席上で『常務さん』はいけません。今夜は商売のことは忘れてゆつくりと御馳走になりたいもんですな」

幸子は娘の時分に、船場の蒔岡の店にもこう云う型に属する剽軽な禿頭の番頭がいたことを思い出した。大概の大商店が株式組織になつた今日

では、「番頭さん」が「常務さん」に昇格して羽織前掛の代りに背広を着、船場言葉の代りに標準語を操るようになったけれども、その肌合（はだあい）なりは、矢張会社の重役と云うよりお店（たな）の奉公人であつて、昔はよくこう云う風な、腰の低い、口の軽い、主人の機嫌（きげん）氣（き）を（き）づ（ま）取る（と）ることや人を笑わせることの上手な番頭や手代が、何処の店にも一人や二人はいたものであるが、井谷が今夜この人物を加えたのも、座を白けさせないやうにと云う心づかいでもあつたことが察（さ）し（ら）れた。

五十嵐と房次郎との遣（や）り取りをニヤニヤしながら聞いている瀬越は、貞之助や幸子達が大体写真で想像していたような人柄で、ただ写真よりは実物の方が若く、漸く三十七八位にしか見えなかつた。目鼻立は端正であるが、執方（とちほう）かと云えば愛嬌（あいぎょう）に乏しい、朴訥（ぼくとつ）な感じの、妙子が批評した通り「平凡な」顔の持ち主で、そう云えば体の恰好（かっこう）、身長、肉附、洋服やネクタイの好み等々に至る迄（まですべ）総て平凡な、巴里（パリ）仕込みと云うところなどは微塵（みじん）もない代りには、嫌味（いやみ）のない、堅実な会社員型であつた。

貞之助は、先ずこれならば第一印象は及第であると思ひながら、「瀬越さんは、巴里には何年ぐらいおいでになりました」

「まる二年おりましたけれども、何しろ旧（ふる）いことなので、
「と仰（お）つしやいますと、いつ時分」

「もう十五六年も前、学校を出て間もなく参りましたのです」

「では御卒業になると直ぐ、本店詰めにおなりになつた訳なんですな」
「いいえ、そうではございません。今の会社に這入りましたのは帰朝してから後のことなので、仏蘭西へ参りましたのは、ただ漫然と、

実は何です、その時分父親「#「父親」は「谷崎潤一郎全集第26巻」（中央公論新社2015年6月10日初版発行）では「親父」が亡（な）くなりまして、遺産と云う程ではございませんが、少々ばかり自分の自由になるも

のがありましたので、それを持って出かけて行きましたのですが、まあ、強いて目的と云えば、もつと仏蘭西語が上手になりたいと云うことと、彼方で何か仕事が見付かれれば就職してもいいと云うようなことを、ほんやり考えておつたのですけれど、結局どちらの目的も達しないで、全くの漫遊で終つてしまつたのです」

「瀬越君は變つていているんですよ」

と、房次郎が傍そばから註釈を入れた。

「大概な人が巴里へ行くと、帰るのが嫌になると申しますけれども、瀬越君はすっかり巴里と云う所に幻滅を感じて、猛烈なるホームシックに罹かかつて歸つて来たんですから」

「へーえ、それはどう云う訳で」

「どう云う訳か自分にもよく説明が付かないんですが、要するに、最初の期待が大き過ぎたせいだろうと思つんです」

「巴里に行つて、却かえつて日本のよさが分つて歸つて来る。と云う

のも決して悪いことではございませんようですな。それで瀬越君は純日本式のお嬢様が好きになつたと云う訳ですか」

と、五十嵐が半畳を入れながら途端はにかに含羞うつつむんで俯向うつむいてしまつた雪子の横顔へ、食卓の此方こちらの隅すみから敏速な視線を投げた。

「しかし、帰朝なすつても今の会社に勤めておられたら、仏蘭西語は上達なすつたでしょうな」

と、貞之助が云つた。

「それがそうも参らないんです。会社は仏蘭西の会社ですけれども、日本人が大部分で、仏蘭西人は重役級に二三人いるぐらいなものなんですから」

「すると、あまり仏蘭西語の会話をなさる機会はおありにならないんで

すか」

「まあMMの船が這入った時なんかに出かけて行ってしゃべるくらいなものでしょうか。商業用の手紙だけは始終書かされますけれども」

「雪子お嬢さんは、今でもずっと仏蘭西語のお稽古けいこをなすっていらっしやいますの」

と、井谷が聞いた。

「はあ、……姉が習っているものでございますから、そのお附合に、……」

「先生は誰方どなたでいらっしやいますの、日本人の方？ 仏蘭西人の方？」

「仏蘭西人で……」

と、雪子が半分云いかけたあとを幸子が引き取って、

「……日本人の奥さんになつていらっしゃる方ですの」

と、付け加えた。そうでなくても人中ひとなかへ出ると一層物が云えなくなる雪子は、こう云う席では「でございます」の東京弁で話すのがギョチなくて、自然言葉の終りの方が曖昧あいまいになるのであるが、そこへ行くと幸子の方は、矢張いくらか云いにくそうに言葉尻じりを胡麻化ごまかしはするものの、それでも大阪流のアクセントが余り耳に附かないような技巧を使って、どんなことでも割合に不自然でなく器用にしゃべった。

「その奥さんは日本語が話せるんですか」

と、瀬越がまともに雪子の顔を見ながら云った。

「はあ、初めは話せなかったのでございますけれど、だんだん話せるようになりまして、この頃ではもうえらい上手に……」

「それが却って為めにならないのでございます」

と、幸子が又あとを引き取って、

「稽古の間は決して日本語を使わないと云う約束したのでござい

ますけれど、矢張そう行かなくて、つい日本語が出てしましまして、……

「僕は稽古を隣の部屋で聞いていることがあるんですが、三人共殆ど日本語でばかりしゃべってるんですよ」

「あら、そんなことあれへんわ」

と、幸子は思わず大阪弁を出して夫の方へ向き直った。

「仏蘭西語かて使うてますねんけど、あんさんとこまで聞えしませんねん」

「そうらしいですよ」「#「らしいですよ」は「谷崎潤一郎全集第6巻」(中央公論新社2015年9月10日初版発行)では「らしいんですよ」。

たまには仏蘭西語も使うてるらしいんですが、その時はいつも虫の息みたいな小さな声できまり悪そうに云うもんですから、隣の部屋まで聞えて来る筈はずがないんです。あれではいくらやっただって上達しない訳ですが、どうせ奥さんやお嬢さんの語学の稽古なんて、何処でもあんなものなんでしょうな」

「まあ、えらい云われ方。けど、語学の稽古だけやあれしませんね。料理の仕方やら、お菓子の焼き方やら、毛糸の編み方やら、日本語使うてる時かていろいろ教おせて貰うてますねん。あんさんこの間あの烏賊かの料理たいそう気に入って、もつと外にも教せて貰え云うてはったやおませんか」

夫婦の云い合いが余興になつて皆笑い出したが、

「その、烏賊のお料理と申しますと？」

と云う房次郎夫人の質問から、烏賊をトマトで煮て少量たんにくの大蒜で風味を添しえる仏蘭西料理の説明が暫しばくつづいた。

幸子は瀬越が注がれればいくらでも酒杯を傾けるらしい様子に、あの飲みっ振りではなかなか行けるに違いないとさつきから見ている。房次郎は全くの下戸であるらしく、五十嵐も耳の付け根まで赤くなって、「いえ、もう私は」とボーイが廻って来る度に手を振っているのであるが、瀬越と貞之助とは好い取組で、まだ一向に顔にも態度にも出ていなかった。尤も井谷の話にも、瀬越さんは毎晩はおやりにならないそうですけれどもお酒はお嫌いではない方で、機会があれば相当にお飲みになるとのことです、と聞かされていたが、幸子はそれも強ち悪いこととは思っていなかったのであった。と云うのは、幸子達の姉妹は母が早く亡くなった関係上、晩年の父の食膳に侍りながら毎夜相手をさせられたものなので、本家の姉の鶴子を初め、皆少しづつは行ける口であるところから、そして、養子の辰雄も、貞之助も、孰れもいっばしの晩酌党であるところから、全然飲まない人と云うものも何となく物足りないような気がしていた。酒の上の悪いのは論外として、矢張いくらかは嗜んでくれる夫の方がよい。雪子はそんな注文を出しはしなかったけれども、幸子は自分の気持から推して、雪子も大方お腹の中ではそうであろうと察していた。それに、雪子のように兎角胸にあることを発散させないで、じーッと内攻させているたちの人は、時々酒の相手でもさせて貰わなければいよいよ気分が滅入り込むであろうし、夫の方でもこう云う人を妻に持ったのでは、そんなことでもなかったら鬱陶しくて遣り切れないであろうとも思えて、旁「#二の字点、1-2-22」、下戸の夫を持った場合の雪子と云うものを想像すると、とても淋しい、気の毒な感じがしていたのであった。で、今夜も幸子は、雪子を余り黙り込ませないように

と思つて、

「雪子ちゃん、それ少し飲んだら、………」

と囁きながら、彼女の前に注いである白葡萄酒しろぶどうしゅの杯を眼で指し示して、
自分もそれを少しずつ飲んで見せたり、

「ちよつと、お隣へ少し葡萄酒を注いで上げて………」

と、ボーイに耳打ちをしたりしていた。雪子自身も、内々瀬越の飲みつ
振りを見て意を強くもし、自分ももつと朗かになりたいと云う気もあつ
て、目立たぬように折々口をつけていたが、雨に濡れた足袋たびの端がいま
だにしつとりと湿しめっているのが気持が悪く、酔が頭の方へばかり上つて、
うまい工合に陶然となつて来ないのであつた。

と、さつきから見て見ない振をしていた瀬越が、

「雪子さんは、白葡萄酒がお好きなんですか」

雪子は笑いに紛らして俯向うつむいてしまつたが、

「はあ、コップに一杯か二杯ぐらい。………」

と、幸子が云つて、

「瀬越さんは大分お強そうでいらつしやいますが、どのくらいお上りに
なれますの」

「さあ、飲めば七八合は飲めるかも知れませんが」

「酔うと何か隠し芸が出ますかな」

と、五十嵐が云つた。

「ところが一向に無趣味なんですよ。まあいつもよりは幾らか口数が多
くなるくらいなもんでしようかな」

「では時岡さんのお嬢さんは」

「お嬢さんはピアノをなさるんですの」

と、井谷が答えた。

「蒔岡さんのお宅では、皆さん音楽は西洋趣味でいらっしやいましてね」

「いいえ、そうばかりでも……………」

と、幸子が云った。

「……………子供の時分にお琴を習わせられましたので、又この頃^{さら}浚^{さら}つてみたくなっておりますの。それと云うのが、近頃下の妹が山村の舞を稽古^{けいこ}し始めましたので、お琴や地唄に親しむ機会が多いものでございますから」

「まあ、こいさんが舞をなさいますの」

「はあ、ハイカラなようでもだんだん子供の時の趣味が復活して来るものと見えまして。御承知のようにあの妹は器用なたちだものです

から、なかなか上手に舞うのですの、小さい時分に習ったことがあるせいかも知れませんが」

「私^{わたくし}、専門のことはよく分りませんが、山村の舞と云うものは、あれは実に結構なものですな。何でも彼んでも東京の真似^{まね}をしますのはよくないことでございますよ、ああ云う郷土芸術は大いに盛にしなければ、……………」

「ああそうそう、こう見えてもうちの常務さん じゃあない五十嵐

さんですか、」

と、房次郎が頭を掻きながら、
「五十嵐さんは歌沢がお上手なんですよ、もう何年来稽古^{けいこ}しておられますね」

「ですが、ああ云うものをお習いになると、」

と、貞之助が云った。
「五十嵐さんのように上手になれば別ですが、最初のうちは無闇^{むやみ}に誰かに聴かしくなつて、つい足がお茶屋の方へ向きはしません

か

「へえ、へえ、確かにそれはございますな、家庭的でないと言うことが日本音曲の欠点でございました。尤もわたくしは別でして、決して御婦人に惚ほれられようなどと云う野心を持って習ない出したのではありません。もうその点は至いたって堅人かたじんでございますのでな。なあ村上君」

「ええ、商売が鉄屋ですからな」

「あははははは、いや、わたくし、それで思い出しましたが、一度御婦人方に伺たずねてみようと思つておりましたのは、あの、皆さんが持つておいでになるコムパクトと云うものですな、あの中に這入はいっております粉は、ただのお白粉しろいでございますでしょうか」

「はあ、ただのお白粉なんですけれど、と、井谷が受けて、」

「それがどうか致しまして」

「実は何ですよ、一週間程前のことですが、或る日わたくしが阪急電車に乗りますと、風上の方の隣の席に盛装を凝らした御婦人が掛けておられましてな、ハンドバッグからコムパクトを出して、こう鼻のあたまをパタパタ叩たたき始めたと思つたら、途端にわたくし、続けざまに二つ三つ嚏くしゃみが出ましたんですが、そんなことツてございますもんでしょ

か
「あははははは、それはその時、五十嵐さんの鼻がどうかしていらしたんじゃないでしょうか。コムパクトのせいかどうか分かりませんわ」

「とまあ、わたくしも一度ならそう思うところでございますが、前にもそう云う経験がございました、その時が二度目なんですして」

「ああ、それほんとうでございます」と、幸子が云った。

「わたし、電車の中でコムパクトを開けて、隣の人に噓されたことが二三度ございます。わたしの経験を申しますと、上等の匂においのするお白粉しろいほどそう云うことが起りますの」

「ははあ、して見るとやっぱりそうなんですな。 いや、この間の

御婦人は違つてましたが、その前の時は、事に依よると奥さんじゃございませんでしたかな」

「ほんに、そうだったかも知れません。どうもあの時はえらい失礼を」

「わたくし、そんなこと始めて伺いますけど、」

と、房次郎夫人が云つた。

「それでは一遍、なるべく上等のお白粉を入れて試してみることに致しますわ」

「冗談じゃあない、そんなことを流行はやらしちゃ困りますよ。今後御婦人は、電車の中で風下の席に人がいる場合、決してコムパクトを使わないことに願いたいもんですな。蒔岡さんの奥さんは只今御挨拶あいさつをなすつたからいいが、この間の婦人なんぞ、わたくしに二つも三つも噓をさして置きながら知らん顔をしているんだから怪しからんですよ」

「あの、わたしの下の妹は、電車の中で男の人の洋服の襟えりから馬の毛がピンと飛び出しているのを見ますと、ついあれを抜きたくなる云いますの」

「あははははは」

「あははははは」

「子供の時分に、綿入の綿が吹き出していると、いくらでも引つ張り出したくなつた覚えがございますものね」

と、井谷が云つた。

「人間にはそう云う妙な本能があるんだと見えますな。酔うと誰でも余よ

所の家の門のベルを押したくなくなったり、停車場のプラットフォームでこのベルに触るべからず』と書いてあると、却かえって押してみたくなるので、なるべくその傍へ行かないように用心致しましたり、な」

「ああ、ほんとうに今夜はよく笑いましたこと」

と、井谷は溜息ためいきを吐きながら云ったが、食後の果物が運ばれてからもまだしゃべり足りないらしく、

「蒔岡さんの奥さん」

と、呼びかけながら、

「話は違いますが、奥さんはこう云うことをお感じになったことがありませんか？　近頃の若い奥さん、いえ、奥さん

だつてまだお若くつていらつしゃいますけれども、奥さんなんかより又もう一時代後の、つい二三年前に結婚なすつたと云うくらいの、二十台の奥さん方、そう云う方々は、何と申しますか、経済のことも、育児のことも、実に科学的で、頭の好い方が多いので、私わたくしなんかづく時代じだいの相違と云うことを感じさせられてしまいますの」

「はあ、ほんとうに仰おほつしやる通りですわ。わたし等の時分とは女学校の教育の仕方しほうもえらい変つて来てるらしいので、今の若い奥さんを見ますと、わたしなぞでも、時代が違ちがうなあ思おもいますわ」

「わたくしの姪めいで、娘時代に郷里から出て参りまして、わたくしの監督を受けながら神戸の女学校を卒業しました者がございますの。それが近頃結婚しまして、阪神の香櫨園こうろえんに所帯を持ちましたんですが、主人は大阪の或る会社に勤めていまして、月給が九十円、外にボーナスが幾らとか申しておりましたが、それと、家賃の三十円だけを毎月郷里から補助して貰もらっておりますので、まあそんなものを全部併せて月収平均百五十円の生活なのでございますね。それでわたくし、月々の遣やり繰りをど

んな風にやっているかと案じていたのでございますが、行って見ますと、月末に主人が九十円の月給を持って帰ります。そうすると直ぐそれを、瓦斯代、電気代、被服費、小遣、などと記した幾種類もの封筒が出来ておりまして、それへそれぞれ区分して最初に収めてしまいました、それで以て次の月の生計を立てると云う風なんです。そんなで随分切り詰めた暮しをしている筈なんですが、わたくし、夕飯の御馳走に呼ばれましたら、思いの外気の利いたお料理を出します。そして室内の裝飾なんぞも、そう見すばらしくなく、なかなか上手に考えてしてあります。けれど勿論一方では大いにチャツカリしております、この間一緒に大阪へ参りました時、電車の切符を買ってくれと云って蝦蟇口を渡しましたら、ちゃんと回数券を買って、残りは自分が貰って置くのでございます。これにはわたくし、ほとほと感心してしまいました、自分なんぞが監督したり心配したりするなんて烏滸がましいことだと、此方が耻かしくなつてしまいました」

「全く、この頃の若い人よりか却つてお母さん達の方が無駄遣いをされますわ」

と、幸子が云つた。

「うちの近所にも若い奥様がおられます、二つになる女の児がおります、なるのですが、この間用事で門口まで伺いましたら、まあお上り遊ばせ、まあまあ云われますので、上つて見ますと、女中もいないのに実によくその辺が片附いていまして、それから、そうそう、そういう奥様は家の中でもきつと洋服で、椅子にかけておられる方が多いように思いますけれど、そうではございませんか知ら？ 兎に角その方はいつも洋服なのですが、その日は部屋の中に乳母車を置いて、それへ赤ちゃんを、這い出さないように巧いこと入れておられます、わたしが

あやしてしまいましたら、済みませんけれどちよつとお願い致します、只今ただいまお茶を入れて参りますから云われて、わたしに赤ちゃんを見さして置いて、立って行ってしまわれますの。そして暫しばらくくしましたら、紅茶を入れて、ついでに、赤ちゃんに上げる牛乳の中へパンをどろどろに溶かしたものを、沸かして持って来られました、どうも有難うございました、さあどうぞお茶を一つ、云いながら、椅子に掛けたと思ったら、途端にこう、腕時計を見て、あ、これからシヨパンが始まりますわ、奥さんもお聴きになりませんか？ 云われて、ラジオのスイッチを開けて、一方では音楽を聴きながら、一方ではその間も手を休めずに、牛乳を匙さじで掬すくつては赤ちゃんに飲ましておられますの。そんな工合に、始終時間を無駄にせんように段取りをつけて、お客様の相手と、ラジオ音楽の享樂と、赤ちゃんの食事と、三つを一遍に済ますなんて、実に頭のよく働く機敏な遣り方だと思ひまして、………」

「赤ちゃんの育て方なんかも、現代式はすっかり違つておりますのね」
「その奥様も云うておられましたわ、母がときどき孫に会いたいと云つて訪ねて参るのは宜よろしいのですが、折角抱かないような習慣をつけてありますのに、年寄が来ると無闇に抱くものでございますから、そのあと暫く、抱いてやらないと泣くようになりまして、又もとの習慣をつける迄に骨が折れて困ります云われて、」
「そう云えばこの頃の赤ちゃんは昔のように泣かなくなりましたわ。往來を連れて歩いている時に躓つまずいて転んだりしても、自分で立って歩けるくらいなお見さんでしたら、決して傍へ寄つて行って抱き起してやりたくないんですつてね。そのままお母さんがどんどん知らん顔をして歩いて行くと、子供は却つて泣かないで、独ひとりで起き上つて追っかけて来るそうでございますね。………」

宴が終つて階下のロビーへ降りて行つてから、井谷は貞之助夫婦に、もしお差支えなかつたら十五分か二十分ほど、お嬢さんと二人きりで話してみたいと云われるのですが如何でしょうか、と、瀬越の希望を申し入れた。そして、雪子も異存がないと云うことだったので、それから暫時二人が別席に引き取っている間、残りの者は又雑談を交していた。

「さつき、瀬越さんどんな話しやはつたん」

と、幸子は帰りの自動車の中で云つた。

「何やいろいろ聞かはつたけど、……………」

と、雪子は口籠りながら、

「……………別にどう云うて、纏まつた話しやはれへなんだ。……………」

「まあ、メンタルテストやつてんな」

「……………」

おもては雨が細かになつて、春雨のようなしとしとした物静かな降り方をしていた。雪子は先刻の白葡萄酒が今になつて循つて来たらしくて、両頬にぼうツと火照りを感じながら、もう阪神国道を走っている車の窓から、微醺を帯びたチラチラする眼で、濡れた舗装道路に映る無数のヘツドライトの交錯をうつとりと見ていた。

「#5字下げ」十二「#十二」は中見出し」

明くる日の夕方、貞之助は家に帰つて来ると、

「今日井谷さんが事務所へ見えただ」

と、幸子の顔を見るなり云つた。

「何で又事務所へ行かはつたんやろ」

「お宅へお伺いせんなんのですけど、今日用事があつて大阪まで参り

ましたので、そのついでに、奥さんよりは御主人の方がお話が早い存じまして、突然で失礼でございますが此方へお伺いさして戴いたきました云うねん」

「そんで、どんな話？」

「大体ええ話やねんけど、ま、彼方へ来なさい」

と、貞之助は幸子を書齋へ連れて行って語った。

井谷が云うには、昨夜貞之助たち三人が帰ってから、外の者達は二三分なおあとに残って話し合った。そして要するに、瀬越は大変乗り気なのであるが、ただ、お嬢様のお人柄やお器量については全く申分ないけれども、お目に懸った感じではいかにもお弱そうに見えるのが気になる。ついでには、御病身と云うようなことはないであろうか。そう云えば弟の房次郎も、いつぞや女学校へ行ってお嬢様の在学時代の成績表を見せて貰もらった時、少し欠席日数が多いように思ったと云うのであるが、女学生時代にたびたび病気をなすったのではないであろうか。と、そう

云う質問であつた。貞之助は、女学生時代のことは自分は知らないで、欠席日数云々うんぬんについては家内や当人に質ただしてからでなければ何とも申し上げられないが、少くとも自分が知ってから以後、雪子はいそ病氣らしい病気をしたことがない。成る程、きゃしゃで、骨細で、瘦やせているのは事実であるから、決して強壯な体質とは云えないであろうけれども、兎とに角かくめつたに風邪一つ引かないと云う点では、四人の姉妹のうち一番であり、肉体的労苦に堪える点でも、本家の姉を除いたら、雪子が一番であることは自分が保証する。しかしあの弱々しい風姿を見ては胸の病でもありはしないかと疑つた人が今迄までにもあつたくらいで、御尤もつともな御懸念けねんと思うから、早速帰つて家内や当人に相談をし、本家にも諒解りようかいを求めて、御安心のために医者健康診断をして貰い、出来ればレントゲ

ン写真を撮ってお目にかけるように勧めてみましょう。と、そう云うと、いやそんなに迄して戴かないでも、その御説明を伺えば十分ですからと云うことであつたが、いやいや、こう云うことははっきりさせて置く方が宜しい、自分にしても保証するとは云つたものの、まだ改まって医者いすれの意見を聞いたことはないのだし、ちよūdよい機会であるから、孰方いすれにしてもそうした方が自分達も安心であるし、本家も同様であると信ずる、あなた方にしたつて、胸に何の曇りもないところを写真で一目瞭然じよんぜんと示された方が、どんなにかお氣持がよいでしょうからと、そう貞之助は云つて置いた。それで、万一この縁談が纏まとまらなかつたとしても、今後又そんな疑いを受けた時の用意に、この際レントゲンを撮つて置くことは無駄むだでないと思うし、本家もよもや異存はなからうから、明日にも阪大へ連れて行つたらどうであろうか、と云うのであつた。

「女学校時代に何でそんなに欠席したんやろ、その時分には病身やつたのんかいな」

「違いまんねん。その時分の女学校云うたら今みたいにやかましいことあれへなんだよつてに、お父さんがいつもズル休みさしては芝居へ連れて行かはつてん。わたしかて始終連れてつて貰うたよつてに、欠席日数調べたら雪子ちゃんより多いやろ思うわ」

「そんなら、レントゲンのこと、雪子ちゃん承知するやろな」

「けど、阪大でのうてもええことないやろか。櫛田先生くしだのところにきておまつせ」

「ああ、そう、それから今一つ、このシミが」

と、貞之助は自分の左の眼の縁をおさえて見せた。

「問題になつてん。井谷は、自分はちよつとも氣イ付かなんだけれど、男の人達云うもんは案外細かなところを見るもんで、昨日あれから、お

嬢さんの左の眼の縁にほんの微かなシミがあるような氣イする云い出した人があつて、僕もそう思ったとか、いやそうやない、光線の加減でそない見えたんやとか、説がいろいろに分れましてんけど、ほんとうにそんなシミがおありでしょうか、云うて聞かれてん」

「昨夜はあれが少し見えたのんで、折が悪いなあ思つててんけど、そんならとうとう問題になつてんなあ」

「そうえらい氣にしているようでもあれへなんだけどな」

雪子の左の眼の縁、

委しく云えば、上眼瞼の、眉毛の下の

ところに、ときどき微かな翳りのようなものが現れたり引つ込んだりするようになったのは、つい最近のことなので、貞之助などもそれに氣が付いたのは三月か半年ぐらい前のことでしかない。貞之助はその時幸子に、いつから雪子ちゃんの顔にあんなものが出始めたのだと、そつと尋ねたのであるが、幸子が氣が付いたのもこの頃で、前にはあんなものはありませんでした。この頃でも、始終ある訳ではなくて、平素はそう思つて注意して見ても殆ど分らないくらい薄くなつていたり、完全に消えてしまつていたりして、ふつと、一週間ばかりの期間、濃く現れることがあるのであつた。幸子はやがて、その濃く現れる期間は月の病の前後であるらしいことに心づいた。そして、彼女は何よりも、雪子自身がそれをどう感じているか、自分の顔のことであるから誰よりも先にその現象を発見しているに違いないとして、それが何か知ら心理的影響を与えていなければよいが、と云うことを恐れた。一体雪子は、今迄は婚期に後れているからと云つて、そう悲観しても僻んでもいかなかったのは事実で、それと云うのも、内々自分の容貌に自信を持っていたかららしいのであるが、そこにそう云う思わぬ欠点が生じたと知ったら、どんな氣持がするであろうか。幸子はひそかにそう云う懸念を抱きながら、うっかり当

人に聞いてみることも出来ないので、折々それとなく雪子の顔色を探りつつ日を送っていたが、表面雪子の素振には何の変化も現れず、殆どそのことに気が付かないのか、問題にしていけないかの如くに見えた。と、或る時妙子が、「中姉ちゃんこれ読んだか」と云って、二三箇月前の或る婦人雑誌を持って来たことがあった。幸子が見ると、その古雑誌の身上相談の欄のところ、二十九歳になる未婚の一婦人が雪子と同じ症状に悩んでいることを訴えているのである。その婦人も最近それに気が付いたので、矢張一箇月のうちにそれが薄くなる時、消えてしまう時、濃くなる時があり、大体来潮時の前後に於いて最も顕著になると云っているのであるが、その答の方を読むと、貴方の如き症状は適齡期を過ぎた未婚の婦人には屢「#二の字点、1-2-22」ある生理的現象で、そう心配なさることはない、大概の場合、結婚されれば直きに直るものだけけれども、そうでなくても、女性ホルモンの注射を少し続けられても治癒することが多い、と書いてあるのであった。幸子はそう云う知識を授かつて先ずほつとしたのであるが、実を云うと幸子自身にも、嘗てそれに似た経験があつた。彼女の場合は結婚の後、今から数年前であつたが、唇の周りへ、ちょうど子供が餡で口の端をよごしたような風に、黴いシミが出たことがあつて、医者に診て貰うと、彼女のその時のアスピリンの中毒だとのことで、放つて置いても自然に直ると云うので、その儘にして置いたら、一年ばかりたつうちに消えてしまつて、それきり再発したことはなかつた。そんなことを思い合せると、姉妹共にいくらかそう云うシミの出る体質なのかも知れないが、幸子は自分の過去にその経験があり、而も雪子の眼瞼のそれよりは自分の口の端に出たものの方がずっと濃かつたのに、それさえ間もなく直つた実例があるものだから、もとともそうも心配していなかつたところへ、その雑誌の記事を読んだので

すっかり安心した訳であつた。が、妙子がこの古雑誌を引つ張り出して来た目的は、何とかしてこの記事を雪姉ちゃんに読ませたい、雪姉ちゃんは見たところ変つた様子もないようだけれども、お腹の中ではひとりひとくよくよ案じているかも知れないから、ここにこの通り書いてある、何も心配するには及ばないのだと云うことを、知らしてやりたい、そして、結婚すれば直るにしても、出来ればその前に直してしまつた方がよいから、進んで治療を受けるように、
そう云つても雪姉ちゃんのことだから中々気軽には動くまいが、折を見て説き付けたい、と云うのであつた。

幸子は雪子のシミのことを、今まで誰とも話し合つたことはなかつたので、妙子と話したのもその時が始めてであつた。彼女は妙子が行つたことについて、矢張自分と同じようにひそかに胸を痛めていたことを知つたのであるが、妙子の場合は、雪子のためを思う親身の情愛の外に、雪子が早く縁づいてくれなければ自分と奥畑との結婚が延びると云う打算も手伝つていゝことが、幸子には察しが付いた。そしてそんならその雑誌を誰が雪子に見せるべきかと云うことを二人で相談した結果、これは妙子の方がよい、幸子だと却かえつて大層らしくもなり、当然貞之助までがその議に与あづかつていゝように邪推される恐れもあるから、妙子が何気ない風をして軽く切り出したら、と云うことになつた。で、その後又雪子の顔にシミが濃く現れていた或る日、彼女がひとり化粧部屋で鏡に向つていゝ時に、偶然妙子がそこに居合せたようにして、

「雪姉ちゃん、その眼の縁のもん心配せんかてええねんで」

と、小声で云つてみた。雪子はただ鼻で、

「ふん」

と云つただけであつたが、妙子は努めて彼女と視線を合せないように下

を向いたままで、

「そのこと、婦人雑誌に出てたのん、雪姉ちゃん読んだやるか。まだやつたら見せたげよか」

「読んだかも知れん」

「ふうん、読んだのん。　それ、結婚したら直るもんやし、注射でも直るもんやねんて」

「ふん」

「知ってるのん、雪姉ちゃん」

「ふん」

妙子には、雪子があまりその問題に触れられたくないもので、冷淡に受け流しているのかとも取れたけれども、矢張その「ふん」は肯定の「ふん」であつて、ただいつの間にかそんな雑誌を読んでいたことを知られたのが極まり悪さに、空惚そらとぼけているのらしかつた。

恐々こわこわ雪子に当つてみた妙子は、それですつかり気が楽になつたので、「あれ読んだんなら、何で注射せえへんの」とすすめたけれども、雪子はそう気が進まないらしく、その忠告に対しても「ふんふん」と鼻であしらうだけであつた。それは一つには、彼女の性分として、誰かが手を取つて無理に引つ張り出しでもしなければ、顔馴染かおなじみのない皮膚科の医者所へなど診て貰いに行くのは嫌いやなのであろう、が、一つには端はたの者が蔭かげで気を揉もんでいるほど、当人はそのシミを神経に病んでいないのであつた。そう云えば、妙子がそんな忠告をした後の或る日、悦子が始めて気が付いたらしくて不思議そうに雪子の顔を見詰めながら、「あれ、姉ちゃん、眼の周りどないしたん」と、大きな声で聞いたことがあつた。生憎あいにくその場には幸子の外に女中達まで居合せたのが、俄にわかにしーんと黙り込んでしまったが、その時も雪子は案外平気で、何か口の中でもぐもぐと胡麻化ごまか

した返事をしただけで、顔色一つ変えるではなかった。幸子たちが一番ヒヤヒヤするのは、そう云う風にそれがはつきり出ている時に、雪子と連れ立って街を歩いたり、百貨店などへ行ったりすることであった。姉妹たちにして見れば、雪子は今が結婚前の大切な売り物で、見合いでなくとも着飾って外へ出かければ何処どこで誰に見られるか分らないのであるから、その前後の一週間ぐらいはなるべく引き籠こもっていてくれるか、でなければ、出かけるなら出かけるで、化粧でそれを目立たせないように工夫してくれたらよいのに、当人はそう云う点に一向無頓着むとんじやくなのであった。幸子や妙子の見るところでは、雪子の顔は本来厚化粧の似合う顔だけれども、その鬨かげりが現れている期間は、お白粉しろいを濃くすると、斜めに光線を透かした時に、却かえって真つ白な地肌じはだの下に鉛色の部分がくつきり沈ちんでん澱して見えるので、寧むしろその期間はお白粉を薄くして、頬紅ほおべにを濃く着けた方がよいように思えた。ところが雪子は平素から頬紅を着けるのが嫌きらいなので、（彼女が肺病などありはしないかと疑われたのも、一つはそう云う青白い化粧のせいなのであるが、妙子は又反対に、お白粉を着けないでも頬紅だけは必ず着けた）相変らず厚化粧をして外出する。と、そんな折に運悪く知っている人に遇あったりした。或る時妙子は、一緒に電車に乗って見るとその日は殊ことに目立っているので、そつと紅を取り出して、

「これ着けなさい」

と、渡してやったことがあったが、端からそのくらいに仕向けても、当人はあまり感じないらしかった。

「#5字下げ」十三「#十三」は中見出し」

「そんなら、あんたどない云やはった」

「ありのままのこと、正直に云うといた。

いつもあんなに出てい

るのやないし、何も心配なものやないことは、こうこう云う雑誌にも書いてあったし、外の雑誌でも読んだことがある云うて。それで僕考えたのは、どうせレントゲン撮るついでやさかい、矢張阪大へ行つて、皮膚科の人に診^みてもらて、果して雑誌に書いてある通り直るもんかどうか確かめること、もう問題になつたのんやったら、それだけのことはせんならん思つたよつてに、それも僕からそうするように勧めてみま^す云うてん」

月のうちの大部分を分家の方へ来て暮している雪子であるから、本家の兄夫婦が気が付かないのは当然だとすると、今迄^{まで}それを知りながら放つて置いたのは自分の手ぬかりであつたように貞之助は感じたが、何を云うにも最近に始まつたことなので、これ迄の見合いには一度も問題になつたことがなかつたのであるし、それに、貞之助としては、幸子の時に案じる程のこともなく直つた事実を見ているために軽く考えていたせいもあつた。幸子にしても、雪子の顔にそれが週期的に現れる時期は、前から日を数えて予測することが出来るのであるから、見合いの日取をそう云う期間にきめなくともよかつた訳であるが、井谷にせつかれたことが一つと、それから、そこに聊^{いさ}か油断があつたと云うのは、あの日あたりなら幾らか消えずに残つていたとしても、人目につく程のことはあるまい、と、たかを括^くつていたのであつた。

幸子は今朝、夫が事務所へ出て行つたあとで、雪子にそつと昨日の感想を尋ねて見て、大体義兄達や姉達の指図に任せると云う意向を聴き取つたところだったので、折角好い方に向いて来た話を、下手に切り出してこじれさせてはと案じながら、その夜悦子が寝てしまつてから、貞之助

にも遠慮して貰^{もら}って、レントゲンの件と、皮膚科の件とを持ち出して見ると、思いの外あっさり承知して、中姉ちゃんが附いて来てくれるなら診て貰いに行ってもよい、と云うことになった。が、そう云ううちに、一日々々と眼の縁の翳^{かげ}りが薄くなつて、消えかかつて来たので、同じ診て貰うなら次の廻^{めぐ}りまで待って、もつとはつきり現れている時の方が、と、幸子は思ったのであるが、井谷の計略が図^あに中^{あた}つて、今度は貞之助が一日も早くと急^せき立てるので、明くる日、見合いの報告と身許^{みもと}調べの催促とを兼ねて上本町の本家へ行き、雪子を阪大へ連れて行くことを一往姉に答えて置いてから、その又明くる日、ちよつと雪子ちゃんと三越まで、と、わざと女中達にそう云って出かけた。

診察の結果は内科の方も皮膚科の方も予想通りで、レントゲン写真は、その日、待っているうちにネガフィルムが現像され、胸部に一点の曇りもないことが明かになったが、数日を経て、血液沈降速度十三、その他の反応も陰性と云う報告が届いた。皮膚科では、診察後幸子が蔭へ呼ばれて、あのお嬢さんは早く結婚させて上げることですな、と、いきなり云われた。注射で直ると云うことを聞きましたのでございますが、と云うと、ええ、注射でも直るには直りますが、あの程度なら分りやしないじゃありませんか、それより早く結婚させて上げるんですな、それが一番あれを直す良い方法ですよ、と云った風なことで終ってしまったと云う訳で、結局雑誌で読んだことが本当らしいのであった。

「そしたら、お前、これ井谷さん所^{とこ}へ持って行ってくれるか」 貞之助はそう云ったが、持つて行ってもよいけれども、先方が、御主人の方が話が早いと云ってあなたを目指して来たのだから、これもあなたから届けてほしい、別に除^のけ者にされたことで気を悪くしているのではないが、実のところ、私はあんな風にセカセカされたのでは話がしにくい、

と幸子が云うので、ナニ、それなら訳はない、此方も事務的に運ぶことにしよう、貞之助は明くる日事務所から電話であらまし話して置いて、写真と報告書とを速達書留で井谷へ送った。と、その明くる日の午後四時頃、今から一時間ばかりしたらお伺い致しますと云う電話があつて、きつちり五時に井谷が又事務所へ現れた。そして、昨日は早速に有難うございました、あれは直ぐ私から瀬越さんの方へお届け申しましたが、ああ云う明細な報告書と、殊にレントゲン写真まであはして態「#2の字点、1-2-22」お撮り下さいましたので、大変恐縮しておられました、もうすっかり安心されましたのは勿論、えらい失礼な勝手なことを申し上げたことに対して、重々お詫びを申してくれと仰つしやっておられるのでございますが、……と、云うような挨拶の後で、まことに申しかねるけれども、瀬越さんが今一度、お嬢さんと二人きりで、この間よりは少しゆつくり、まあ一時間ぐらい話し合つてみたいと云つておられるのですが、御承諾願えないでしょうか、と云うのであつた。井谷はそれに付け加えて、瀬越さんはあのお年ですけれども、結婚の経験があまりにならないものですから、初心のお方らしいところがあつて、この間は何か上つてしまつてどんなことをしゃべつたのやら覚えていない、それにお嬢さんもああ云う内気なお方で、……いえ、その内気は結構なのですけれども、あの時は何分初対面で、遠慮しておいでになつたようだから、もう一度お目に懸つて、お互にもつと打ち解けて口を利いてみたい、と云うような訳なのでございまして、……と、そう云つてから、それで御承諾願えるのであつたら、ホテルや料理屋も目につき易いから、むさくろしい所ではあるけれども、阪急岡本の私の住居の方へでも来て戴いて、お会いになつたら如何であろうか、先方はこの次の日曜日あたりを望んでおられるのですが、と云う話なのである。

「なあ、どうやるか、雪子ちゃん承知してくれるやるか」

「雪子ちゃんより、本家がどう云うか知らん。まだはつきり極まった訳でもないのんに、余り深入りせん方がええ、云えへんやるか」

「先方の腹は、顔のシミがどんな程度か、もう一遍見たいのやないか知らん」

「ほんに、そうやわきつと」

「それやったら、会うた方がええやないか。今やったらちよつとも分らんようになってるよつてに、いつもはこんな風や云うこと、見といて貰わな損やないか」

「そうやわ。それ断つたら、何や見られるのん嫌いやがつてるみたいやわ」
夫婦の間にそんな風な会話があつてから、翌日幸子は、家の電話では又後が面倒なと思つて、近所の公衆電話へ行つて本家の姉を呼び出したものだった。と、案の定、何でそんなに何遍も会わんならんねん、と云うようなことなので、五通話も費して訳を話すと、それはそうかも知れなけれども、どうなるとも分らないうちから、二人きりで会うようなことを許してよいかどうか私には分らないから、今夜兄さんと相談して明日返事をしよう云う。で、幸子は翌朝、向うから懸つて来ないうちに、又公衆電話へ走つて行つて、どうやら義兄が　時間、場所、監督等、いろいろ条件つきではあるが、　許可したことを確かめてから、雪子の方を当つてみると、これは分りが早くて直ぐ承知した。その日も幸子が、手土産に切り花を一束提げて井谷の家まで付き添つて行き、最初に紅茶の接待に与あずかつて四人で暫しばらく雑談をしてから、瀬越と雪子は二階へ案内され、幸子は階下で井谷と話しながら待つていたが、一時間ばかりと云う約束が三十分超過した頃に、二人は降りて来た。帰りは瀬越が一と足後に残ることになり、姉妹が先に暇いとまを告げたが、今日

は日曜で悦子が家にいることを慮おもんばかつて、幸子はそのまま神戸へ出、オリエンタルホテルのロビーへ行ってもう一度お茶を飲みながら、会見の模様を雪子に聞くと、

「今日はほんまによう話はなしやはったわ」

と、そう云う雪子も、その日はわりにいるいろと気軽にしゃべった。先ず、瀬越から四人の姉妹の間柄について質問があったこと。なぜ雪子や妙子が本家よりも分家の方で多く暮しているかと云うことや、妙子のいつかの新聞の事件のことや、その後それがどうなっているか等々のことについても、相当突っ込んで尋ねられたので、差支えない限りは答えなければども、本家の兄が悪く取られるようなことは一言も云わなかったこと。瀬越は、僕にばかり質問させないで、あなたの方からも聞いて下さいと云うことであつたが、雪子が遠慮しているので、進んで自分のことを語り出したこと。自分は所謂いわゆる「近代的な」感じの人より「古典的な」感じの人を求めていたために今日まで結婚が晩おくれたのであるが、あなたのような方に来て戴ければ勿もつ体ないと思つている、と云つて、「身分違い」と云う言葉を二度も三度も繰り返したこと。それから、自分は婦人関係について過去に何の引つ懸りもないけれども、一つお耳に入れて置きたいことがあると云つて、意外な事を洩もらしたのは、
巴里パリ時代に百貨店の売り児をしていた或る仏蘭西フランスの婦人と云い交したことがあつたと云うこと。そして、委くわしい話はしなかつたけれども、結局その婦人に欺あだせかれたらしいので、彼がホームシックに罹かつたのも、純日本趣味に憧あこがれるようになったのも、その反動であると云うこと。瀬越はこの話を知っているのは旧友の房次郎君だけで、それ以外に話すのは今日が始めてであるとい、但ただしその婦人とは清い交際で終つたのであるから、その点は信用して戴きたいと云つたこと。幸子が雪子から聞

き得たのは大体そんな事柄であつたが、そこまで雪子に打ち明けて懸っている瀬越の心持は、問う迄もなく分つてゐることであつた。

井谷からは、直ぐ追っかけて翌日貞之助に電話があり、昨日十分な機会を与えて下さつたので、瀬越さんはもう何も云うところはない、お顔のシミのことも仰つしやる通り問題にする程のものでないことが昨日でよく分つた、この上は自分があのお嬢さんの夫として及第するかどうか、御返事の来るのを待つばかりである、と云う先方の言葉を伝えると同時に、まだ御本家の方のお調べは済まないのでしょうか、と云う催促であつた。井谷にして見れば、最初にこの話があつてから既に一箇月以上にもなるのだし、先日蘆屋を訪ねた時にも、その数日後オリエンタルホテルの見合いの時にも、「あと一週間ぐらいお待ち願えれば」と云う挨拶を聞かされているのであるから、好い加減痺れを切らすのも尤もなのであるが、事實は幸子が始めて本家へこの事件で相談に行ったのがやつと十日か半月程前のことなので、それでなくてもこう云う調査には大事を取りたがる本家が、そう早速に返事をする筈はないのであつた。要するに幸子が井谷に攻め立てられてつい出まかせに「あと一週間」と云つてしまひ、貞之助が又仕方なくそれに口を合せたのが悪かつたので、正直のところ、本家では瀬越の戸籍謄本を取り寄せるべく原籍地の役場へ云つてやつたのが、漸く兩三日前に届いたなどと云つている始末で、興信所の報告も、国元の方を調べるのだとすると相当暇が懸るであろうし、まだその後で、いよいよ極めると云うことになれば、もう一度念のために然るべき人を国元へ遣るなどと云つてゐるのである。貞之助夫婦は今更困つて、もう四五日もう四五日と云つて引つ張つてゐるより外はなかつたが、井谷はその間にも蘆屋へ一度と大阪の事務所へ一度催促に見え、こう云う話は早いに越したことはございませんよ、兎角邪魔が遣入り易

いものですからねとか、いいとなったら今年のうちにでも式をお挙げるに
なることですねとか、云うようなことまで云って帰った。そして、よく
よく待ちかねたと見えて、まだ会ったこともない本家の姉を直接電話口
へ呼び出して催促をしたとやらで、驚かされた姉が直ぐその後から幸子
に電話で知らせて来た。幸子は自分より又一層気の長い、物を尋ねられ
ると五分も立ってから返答をするような本家の姉の、面喰った顔が眼に
見えるようで可笑しかったが、井谷は姉に向っても、好い話は邪魔が這
入り易いからと云う文句を使って、いつもの早口で大いに説き付けたら
しいのであった。

「#5字下げ」十四「#「十四」は中見出し」

そうこうするうち、月が变つて十二月に這入ってからの或る日、本家の
御寮人様から電話と云うので、幸子が出ると、先達ての縁談のことにつ
いて、大そう調べがおそくなつたけれども、漸く大体のことが分つたか
ら、今日此方から出向いて行く、と、そう云って電話を切りかけてから、
姉は又ちよつと言葉を継いで、ええ話とは違うさかいに、喜ばんとおい
てほしい、と云うのであった。幸子はそう断られる迄もなく、姉の声を
聞いた最初の瞬間から、ああ又今度もいけないのだなと感じていたが、
電話を切つて応接間へ戻つて来ると、ひとりでに溜息が出て、安楽椅子
へどつと腰を落してしまった。今迄にも幾度こう云うことがあつたか知
れず、土壇場まで来て断るのが殆ど馴れつこのようになっていたので、
その都度幸子はそんなにも力を落したことはなかつたのであるが、今度
はなぜか、格別残念がる程の縁ではないと云う風に思つても、心の
奥の方で相当に落胆していることが意識せられた。それと云うのが、今

迄は自分も本家と同じ意見で、破談に賛成する方の側であつたのに、今度は大丈夫纏まるような気がしていたせいなのである。何分今度は井谷と云う進行係がいたためもあつて、妙に自分達の身の入れ方が違つていた。貞之助なども、今迄は大概埒外らちがいに立つていて、お役目に引つ張り出される程度であつたのに、今度はひどく力瘤ちからこぶを入れて幹旋あつせんをしたし、それに、雪子も今迄とは違つたところがあつた。ああ云う性急な見合いの申し出にも応じ、二人きりで話したいと云う注文が再度あつたのを承諾し、レントゲンの撮影や皮膚科の診察の件などをも、嫌いやな顔をせず、に聴き入れたと云うようなこと、これは従来しゆらいの雪子には見られない態度と云つてよいのであるが、矢張りいからか結婚を焦あせる気持が、密ひそかに胸中に兆きざしている結果の、心境の変化でもあろうか、それには縁に現れた暗影なども、表面何とも感じていないように見えつつ、実は多分に影響しているのではあるまいか。まあそれやこれや、いろいろの理由から、今度ばかりは是非成立させたくも、亦またするようにも考えていた次第であつた。

それで、幸子は、姉に会つて委くわしい話を聞く迄は、そう云つても何とかなるように思い、全然望みを捨て切つてはいなかつたのであるが、話を聞いてみると成る程それでは仕方がないと思わざるを得なかつた。幸子と違つて大勢の子持ちである姉は、上の子供達が中学校や小学校から歸つて来る迄の、午後の一二時間を利用して、ちようど雪子もその日の二時からお茶の稽古けいこに出かけることを知つて来たので、一時間半ほど応接間で話しているうちに悦子の歸つて来た姿を見ると、ではどう云う風にして断るか、そのの所はあんた等らに任せるから貞之助さんとよく相談をしてくれて、と云つて暇いとまを告げたが、姉の語るところに依よると、瀬越のお母さんと云う人は、十数年前に連れ合いに先立たれてから、ずつ

と昔の家屋敷に引き籠こもったきり病氣と云うことで世間に顔出しをしない、悴せがれの瀬越もめつたに帰省することはなく、身の周りの世話は、そのお母さんの実の妹で、矢張未亡人になつていて任に當つてゐる。病氣は表向きは中風と云つてゐるけれども、出入りの商人などに聞いてみると、どうもそうでないらしい節ふしがあり、事實は一種の精神病で、悴の顔を見ても悴ということが分らないと云つた風な性質のものらしい。このことは興信所の報告にもぼんやり匂におわしてあつたけれども、腑ふに落ちかねる点があつたので、此方から態「#二の字点、1-2-22」人を遣やつて間違いないところを調べ上げたのである。と、姉はそう云つて、折角親切なお人達が何かと心配して話を持って来て下さるのを、本家の私等が毎度壊してしまうように取られるのは心苦しいけれども、決して私等はそんなつもりはない、今日となつては何も家柄だの資産だのに深くこだわる気はないので、実は今度の話などは至極恰好かっこうな縁と思つた訳であつた、私等にしても何とか纏めたいと云う考があつたればこそ、人を田舎まで遣つて調べたのであるが、外の事と違つて精神病の血統があるのであきらめるより仕様がなではないか、雪子ちゃんの縁談と云うと、いつも何か彼か動きの取れない故障が起つてどうしても断るような羽目になるのが不思議でならない、矢張雪子ちゃんと云う人はそれだけ縁が薄い人なので、未年ひつじなどと云うことも迷信とばかり云つてしまえないような気がする、と云うのであつた。

幸子は、姉と入れ違ひに戻つた雪子が懐ふところに茶袱紗ちやくさを入れたまま洋間に這入つて来たのを見ると、ちようと悦子がシュトルツ氏の庭へ遊びに行つてゐる折なのを幸い、

「さつき姉ちゃんが来やはつたけどな、たつた今帰りはつてんと、そう云つてちよつと間まを置いてみたが、雪子が例の、

「ふん」

と云ったきりなので、仕方なしに後を続けた。

「あの話、あかなんでんわ」

「そうか」

「あのお母さん云う人なあ、………中風病みや云う話やってんけど、精神病らしいねんわ」

「そうか」

「それやったら、問題になれへんよつてにな、………」

「ふん」

遠くで悦子の「ルミーさん、いらっしやい」と云う声が聞えて、二人の少女が芝生の上を此方へ駈けて来るのを見ながら、幸子は調子を落して云った。

「ま、委しいことは後で云うけど、それだけ耳に入れとくわな」

「お帰り、姉ちゃん」

と、悦子がテラスを駈け上つて、洋間の入口の硝子戸の外に立ち止ると、後から来たローゼマリーもその横に肩を揃えて立った。クリーム色の毛織のソックスを穿いた可愛らしい脚が四本列んだ。

「悦ちゃん、今日は中でお遊び、風が寒いよつてに。」

と、雪子は立つて行って、硝子戸を中から開けてやって、

「さあ、ルミーさんも這入つて頂戴」

と、いつもと変りのない声で云った。

雪子の方はそんなことで済んでしまったが、貞之助の方はそう簡単には納まらなかった。夕刻帰宅した彼は、妻の口から本家の姉が不承知を云いに来たと聞かされると、又今度も断りなのかと、一往不服らしい顔つきをした。貞之助は、今度は井谷に目指されて自分が一番交渉の矢面に

立たされた関係から、この話にはだんだん乗り気になつていて、もしも亦本家が時勢後れな格式論や体面論を持ち出すようなら、自分が出かけて行つて、何とか考え直すように義兄や義姉に勧めてみよう、それには、瀬越が初婚であると云うこと、見たところも実際の年齢も比較的若く、雪子と並べてもまあまあ不自然な感じが少いと云うこと、外の点では將來もつとよい縁談があるにしてからが、この二つは惜しんでも余りある点だと云うことを、力説するつもりでいたので、幸子から事情をとつくりと聴き取つても、まだ暫くは断念し切れぬものがあつた。が、どう思つてみても、これは本家が承知する筈のないことだし、仮に義兄から、それならお前が責任を持つか、そう云う血統のある人と結婚させて、その夫にも、行く末生れるであろう子供にも、絶対に間違いがないと云う保証が出来るかと反問されるとしたら、貞之助にしても不安にならざるを得ない。そう云えば、去年の春であつたか、矢張四十何歳とかで初婚と云う、今度のに似た話があつて、而も相当の素封家と云うので、その時は皆が乗り気になつて、結納の日まで取り極めたところ、ふつと或る筋から、相手の男に深刻な関係を結んでいる婦人が附いていて、世間体を胡麻化すために妻を迎えようとしていることが分り、慌てて取り消したことがあつたが、雪子へ向けて持ち込まれる縁談には、突き詰めて行くと、そう云う変に暗黒なものに打つかることが多いのであつた。で、そのために一層本家の兄達が用心深くもなつたのであるが、それも畢竟此方が余りむずかしいことを云つて、不釣合によい相手を求めようとするところから、却つて妙な誘惑にかかるようなことにもなるので、考えてみれば、四十を過ぎての初婚の資産家など云う口は、大概一癖あるものと思つて然るべきなのであつた。

瀬越の場合も、血統の上にそう云う弱点があつたので今迄結婚しなかつ

たのかも知れないけれども、しかし此方を欺す考があつたのでないことは明かで、恐らく先方にしてみれば、こんなに長い間かかって郷里の方を調べていると云う以上、母のことは分つた筈であると思ひ、当然それを承知の上で話に乗つて来ているものと解したのである。「身分違ひ」とか「自分には勿体ない」とか云う謙遜の言葉も、その感激の心持を籠めていたのである。今度瀬越氏が大変よい所から嫁を貰うことになつたと云う噂が、もうMB会社の同僚の間にも伝わつていて、瀬越自身もそれを否定せず、あの生真面目な人物が近頃は仕事が手につかないでそわそわしている、と云う風な評判も此方の耳に這入つて来ているので、貞之助はそんなことを聞くにつけても瀬越が気の毒で、一廉の紳士に何の必要もなく耻を掻かしたように思えて仕方がなかつた。要するにもつと早く調べて早く断つてしまつていたら、何でもなく済んだものを、先ず幸子の所で停頓し、本家の手へ移つてからも決して迅速には運ばれていなかった。そして一層悪いことは、その間をつなぐために、この程じゆうから相手に向つては殆ど調べが終つていよう云い、なるべく希望を抱かせるような、八九分通り出来る話のような挨拶ばかりしていたことで、これは自分達としても出まかせを云つた訳ではなく、纏めるつもりでいたからこそそう云つたのであるけれども、結果から見れば先方に対して非常に罪ないたずらをしたも同然で、この点については貞之助自身、幸子や本家を責めるよりも先ず自分の軽率を責めなければならなかつた。

貞之助は自分も本家の義兄と同様に養子の身分なので、今迄義妹の縁談などには努めて深く立ち入らないようにしていたのに、たまたま今度渦の中に巻き込まれた事件が、破談になるのは避け難いとしても、自分の不手際もあつて関係者に気まずい思いを残すことになり、そうしてそれ

が、引いては義妹の運命をも今後一層不幸にさせはしないであろうかと考えると、口に出して云うべきことではないけれども、取り分け雪子に済まない感じがした。いったい今度のことに限らず、男の方から断るのはいが、女の方から断ると云うのは、いくら辞柄を婉曲えんきよくにしてみたところで、男に耻を与えることになるのだとすると、もう蒔岡家は今迄にも随分多くの人たちから恨まれているものと思わなければならぬ。それが又、いつも本家の姉や幸子たちの世間知らずな悠長さゆちよさから、散々相手を引つ張つておいてギリギリの所へ来て断ると云う遣り方なのでは尚なお更さらであるが、貞之助の恐れるのは、そう云うことが積り積ると、蒔岡家が恨まれるだけでなく、そう云う人達の思いからでも、雪子が仕合せになれなくはないか、と云うことであつた。で、さしあたり今度の断り役は、幸子が逃げるであろうことは明かなので、貞之助が、いくらかでも自分の失錯を償う意味から、貧乏圖くじを引き請うけて井谷に会い、何とか諒りよう解かいを求めるより仕方がないが、でもどんな風に云つたらよいものか。今となつてはもう瀬越にはどう思われても已やむを得ないとして、井谷にだけは、これから後のこともあるので、悪い感情を持たれたくない。考えてみると今度のことでは井谷も随分時間や労力を費している訳で、この間じゅう蘆屋の宅や大阪の事務所へ足を運んだ回数だけでも少くはない。美容院の経営には大勢弟子を使っているものの、なかなか繁昌はんしょうしているらしいのに、その間を抜けてああ云う風に小まめに奔走すると云うのは、確かに噂のように世話好きなのであるうけれども、一通りの親切きんせきや俠氣きやくきでは出来ないことで、細かいことを云えば円タクその他の足賃にしても相当遣っているであろう。貞之助は先夜オリエンタルの会の時に、名義は井谷の招待と云うことだけれども、実際の費用は瀬越側と自分達とで分担すべきものと思つて、帰りがけにそのことを申し出たのであつたが、

井谷は、いえ、これは私がお招きしたのですからと云って、何としても
応じなかった。しかしどうせこの縁が纏まる迄にはまだ何か彼が橋渡し
として骨を折って貰うであろうし、いずれ引つくるめて礼をする機会が
あろうと考えて、あの時はそのままにして置いたのであったが、今となっ
てはそれも放って置く訳には行かなかった。

「ほんになあ、お金では受け取ってくれはれへんやろうし、手土産でも
持って行かはるより仕様ないけど、
と、幸子は云った。

「今云うてもちよつと思いつかんさかいに、こうしやはつたらどうやね
ん。
あんたは兎とに角かくに、何も持たんと話だけして来なさい。お礼は
又、後で姉ちゃんと相談して、あたしが何ぞあの人に向きそうなもん持っ
て行きますがな」

「お前はええ役にばかり廻りよる」

と、貞之助は不服らしかったが、

「そんなら、まあそないしようか」

と、結局そうすることに極まった。

「#5字下げ」十五「#「十五」は中見出し」

井谷は十二月になつてからはぱったり催促して来なくなつたが、事によ
ると形勢の非なることを大凡おおよそ悟つたのかも知れないので、それなら却かえ
て都合がよい訳でもあつた。貞之助は、他聞を憚はばかることもあるから美容
院でなく、岡本のお宅の方へお伺いしたいと思ひますがと、在宅の時間
を確かめておいて、夕刻、いつもよりは遅めに事務所を出て、その足で
岡本へ廻つた。

通された部屋にはもう灯がともっていたが、それが濃い緑色の、深い暈の附いたスタンドなので、室内の上半部が薄暗くなっており、その翳の中に、安楽椅子に腰かけている井谷の顔があつて、表情が此方にはつきり見分けられないのが、職業柄にもなく文学青年的な純良さを持つ貞之助には切り出しよかつた。

「今日は甚だ申しにくいことを申し上げに参つたような訳でして、……実はその後彼方さんのお国元の方を調べてみましたのですが、外のことは宜しいのですけれども、何分お母さんの御病気が御病気だものですか、……」

「はあ？」

と、井谷は小首をかしげたが、

「あの、中風を患つておいでのように伺つていましたけれども、人を遣りまして調べましたところでは、精神病でいらつしやるらしいんですが」と、貞之助が云うと、

「ああそうですか」

と、俄に調子の外れた慌てた声で云つて、続けざまに「そうですか」を連発しながら頷いて見せた。

貞之助は、井谷が果して精神病の件を知っていたかどうか「#」かどうか「」は「谷崎潤一郎全集第19巻」（中央公論新社2015年6月10日初版発行）では「のかどうか」と云う疑いを抱いていたのであつたが、この間から無闇と話を急いだ様子や、たった今の狼狽したような態度を見ると、矢張知っていたのであろうかと思わざるを得なかつた。

「誤解をなすつて下すつては困るのですが、こう云うことを申し上げたからと云つて、決して批難がましいことを申しているのではないのです。本来ならば、何か当り触りのない口実を設けてお断りするのが常識なの

かも知れないと思うて、考えましたのですけれども、先達せんだつてからの一方ならぬあなたの御尽力に對しまして、御納得の行くような理由を挙げてお断りせんことには、僕等として気が済まんように存じましたものですか、………」

「はあ、はあ、そのお心持はよく分りますわ。誤解どころか、私こそ十分調べてもみませんで、軽率なことを致しまして、申訳もございません」

「いえ、いえ、そう仰おっしゃられては痛み入ります。ただ、僕等としましては、蒔岡家では何か格式と云うようなものに囚とらわれて、恰好かっこうな縁談があつても皆断つてしまつと云う風に、世間から思われておりますらしいのが辛いのでして、………決してそんな意味ではない、今度のことは寔まことに已やむを得ない事情なのだと言ふことを、世間は兎とに角かくと致しまして、せめてあなたにまで御諒解りょうかいを願つて置きたい、と申しますのも、何卒どうかこのことでお腹立ちにならず、今後ともお世話を願いたいと思うておりますからなのですが、これは勿論もちろんあなたのお耳へ入れておきますだけなのでして、先方さんへは、何とでも宜しいように仰おっしゃつてお断りになつて戴いたきたいのです」

「御丁寧な御挨拶あいさつで恐縮いたしますわ。実はわたくし、何と思つていらつしやいますか存じませんが、精神病と云うようなことは只今ただいま始めて伺いますので、全く知らなかつたのでございますの。でもほんとうにお調べになつてようございましたわ。いいえ、そりやもうそう云う訳でございましたら、仰おっしゃるのが御尤もつともでございます。先方さんへは寔まことにお気の毒ですけれども、何とか私から巧い工合に申しますから、その点は御心配なく、………」

貞之助は相手の如才ない言葉にほつとして、用談を終えると忽そつそつ々に辞したが、井谷は玄関へ送つて出ながらも、気を悪くしているところではな

い、自分こそ済まないと思つていと繰り返して云つた。そして、きつとこの埋め合せに良い話を持って行くから待つていて戴きたい、なあに、そんなにお案じなさらないでも、あのお嬢さんなら必ずお引き請けしますから、何卒奥様にもそう仰っしゃつて下さるようにと、頻りに云うのが、日頃の井谷の氣象として、満更口先ばかりのようにも受け取れないので、この様子では事実そんなに感情を害してもいけないのかと思えた。その数日後、幸子は大阪の三越へ進物にする呉服物を調べに行き、それを持って岡本へ廻つたが、井谷がまだ戻つていなかったのので、品物だけ置いて、伝言をして帰つて来た。と、翌日井谷から幸子へ宛てて慰慰な礼状が来、何のお役にも立たなかつたばかりか、自分の不行き届きから却つていろいろと無駄なお手数を掛けた結果に終つたのに、こう云う御心配にあづかつて相済まなく思つていと云う文句のあとに、必ずこのお埋め合せは致しますからと云う言葉が、そこにも繰り返して添えてあつたが、それから十日ばかり過ぎて、今年も残り僅かになつた或る日の夕刻、例の如く蘆屋の家の前に慌しくタキシ―を停めて、ちよつと門口まで御挨拶に伺いましたと、井谷が玄関から声をかけた。幸子は折あしく風邪を引いて臥ていたけれども、貞之助が戻つて来ていたので、ここで失礼致しますと云うのを強いて応接間に請じ入れて暫く話したが、その後瀬越さんはどうしていらつしやるでしょうか、御当人は寔によい方だのにああ云うことで残念です、……ほんとうにお氣の毒なお方で、……などと云つたようなことから、しかしあの方は、お母さんのそう云う御病氣のことを此方が既に知つているものと思つておられたのでしようね、と、貞之助が云うと、そう云えば、最初瀬越さんは妙に遠慮していらつして、気乗りがしない御様子でしたのが、後になる程だんだん熱心になられたのです、矢張最初はお母さんのことがあるので、控え目にしてい

しつたのかも知れませぬ、と、井谷も云った。そうだとすれば此方の調べが手間取ったためにそう云う感違いをさせたわけで、僕達の方が重々悪いのです、と貞之助は云ってから、何卒これにお懲りにならず是非又お世話をして戴きたく、と、この間も云った台辞を云うと、井谷は急に声をひそめて、「子供が大勢あるのさえお構いなければ、今も一つ話がないことはないんですがねえ」と、ちよつと気を引いてみるように云った。さては井谷はそれを云いたい腹もあつて来たのだったかと心づいて、なおよく聞いてみると、その人と云うのは大和の下市で某銀行の支店長をしてい、子供が五人あるのだけれども、一番上が男の子で、目下大阪の某学校に行っており、二番目のが女の子で、これは年頃になっているから近々何処かへ縁づくとする、家にいるのは三人に過ぎない、生活の方は、その地方での一流の資産家であるから何の心配もない、と云うようなことなのであつたが、五人の子持ちで、下市と聞いただけで、話にも何にもならないと思つて、貞之助は途中から興味のない顔つきをした。井谷もそれを看て取つて、とてもこんなのはお嫌でしようからと、直ぐ引つ込めてしまつたが、それにしても、何のつもりで此方が承知する筈のない悪条件の話を持ち出したのか、矢張井谷は内心不快を感じていて、こんなところがちよつと相当な御縁なのですよと、暗に諷したのであるかも知れなかつた。

井谷を送り出してから、貞之助が二階の部屋へ上つて行くと、幸子は臥たまま浴用タオルで顔を覆うて吸入をかけていたが、

「井谷さん又縁談を持って来やはつたんやて？」

と、かけ終わるとタオルで目鼻を拭いながら云った。

「ふん、……誰に聞いたん？」

「今悦子が知らせに来てんわ」

「へえ、何とまあ、……………」

さつき貞之助が井谷と話しているところへ、すうつと悦子が這入って来て、椅子に腰かけて聞き耳を立て始めたので、お前は彼方へ行っていない、子供がこんな話を聞くものではないと云って、貞之助は彼女を追い遣ったのであったが、きつと食堂へ退いて盗み聞きしていたのである。

「やっぱり女の児はこう云う話に好奇心持つねんな」

「子供が五人あるのんでつしやる」

「何と、それも云うたんか」

「はあはあ、長男が大阪の学校へ行つてはつて、長女がもう直き嫁に行かはる年頃で、……………」

「ええ？」

「大和の下市の人で、何やら銀行の支店長してはつて、……………」

「こりや驚いた、油断も隙もならへんわい」

「ほんに、これからよっぽど氣イ付けなんだから、えらいことになりました、今日は雪子ちゃんが留守やよつてによかったけど」

毎年、年末から正月の三箇日へかけては雪子も妙子も本家へ帰ることにしてあったので、雪子は妙子より一と足先に、昨日帰って行ったのであったが、彼女がいたら全くどんなことになったか知れないと思つて、夫婦は胸を撫でおろした。

幸子はいつも冬の間に気管支加答児を患う癖があり、悪くすれば肺炎になりますと医者に嚇かされて一箇月近くも臥るのが例になっているので、些細な風邪にもひどく用心するのであるが、好い塩梅に今度は咽喉で食い止めたらしくて、漸く平熱に復しつつあった。で、いよいよ押し詰まった廿五日に、まだ一日二日は部屋に籠っているつもりで、寢床の上です

わりながら新年の雑誌を読んでいると、これから本家へ帰るのだと云つて、妙子が左様ならを云いに来たので、

「何でやねん、こいさん、まだお正月には一週間もあるのんに」

と、幸子は軽く訝いぶかしむように云つた。

「去年はこいさん、大晦日おおみそかに帰って行つたやないか」

「そうやったか知らん。……」

妙子はこのところ、来年早々第三回目の人形の個展を開くためにずつと製作に熱中していて、もう一箇月も前から毎日の大部分を夙川しゅくがわのアパートで暮していたが、その間に又、舞の稽古けいこも捨てられないと云つて、一週に一度ずつ大阪の山村の稽古場に通っていたので、幸子は暫くこの妹とおちおち顔を合わせたことがないような気がしていた。彼女は本家が妹たちを大阪へ呼び寄せたがっていることを知っているので、決して手元へ引き留めるつもりはないのだけれども、雪子以上に本家へ行くことを嫌きらう妙子が、例年になく早く帰ると云い出したのを、何がなし不思議に思つたのであつたが、そう云つてもそれは、奥畑との間に何か約束でもしているのではないかと云つた風な人の悪い疑念ではなしに、ただこの早熟な末の妹が、一年々々とほんとうの大人になりつつあり、誰よりも一番頼りにしていた自分の側をさえ離れて行きつつあるような、一種の淡い物足らなさを覚えたままでのことなのであつた。

「うち、やっと仕事が済んだよつてに、大阪へ帰つて、当分毎日舞の稽古に通おう思うてるねん」

と、妙子は弁解とも付かずに云つた。

「今、何習うてるのん」

「お正月やよつてに、『万歳』教おせてもろてるねん。中姉なかあねちゃん、地イ弾けるやろ」

「ふん、大概覚えてるやる思うわ」

と、幸子は直ぐに口三味線で唄い出した。

「徳若に御万歳と、御代も栄えまします、ツンテントン、愛敬ありける

新玉の、……………」

妙子はそれに乗りながら、立ち上って、身振をし始めたが、

「待つて待つて、中姉ちゃん」

と、自分の部屋へ走って行って、手早く洋服を着物に着換えて、舞扇を持って戻って来た。

「…………… チツツンチツツン、ツン、チンリン、チンリンやしよめ、やしよ

め、京の町の優女、…………… 大鯛小鯛、鱈の大魚、鮑、栄螺、蛤子々々、

蛤々、蛤召ツさいなど、売つたる者は優女。そこを打ち過ぎ傍の柵見た

れば、金襴緞子、緋紗綾緋縮緬、とんとんちりめん、とんちりめん、……………」

「

この「やしよめ、やしよめ」と云う文句や、トントンチリリン、トンチ

リリンの三味線の手に合わせて唄う「とんとんちりめん、とんちりめん」

と云う文句などが面白くて、子供の時分に幸子たちはこれを口癖のよう

に唄ったので、この地唄だけは未だに忘れないのであるが、今もそうし

て唄っていると、二十年前の船場の家の記憶が鮮かに甦つて来、なつか

しい父母の面影が髣髴として来るのであった。妙子はその時分も舞を習

わせられていて、正月にはよく母や姉の三味線で、この「万歳」を舞つ

たものなので、「正月三日、寅の一天」「#ルビの「いつてん」は「谷崎

潤一郎全集第二巻」(中央公論新社2015年の10月初版発行)では「い

てん」「に、ツンテン、まします若夷、……………」と、可愛い右の人差指

を真っ直ぐに立てて天を指した頑是ない姿なども、つい昨日のこのよ

うにはっきりと眼に残っているのに、自分の前で今舞扇をかざしている

この妹がその人なのか、（　　）そして、この妹も上の妹も、まだ二人ながら「娘ちゃん」でいる有様を、両親達は草葉の蔭からどのように眺めておいでか）と思うと、幸子は妙にたまらなくなつて涙が一杯浮かんで来たが、

「こいさん、お正月はいつ帰つて来る」

と、強いてその涙を隠そうともしないで云つた。

「四日には帰るわ」

「そんならお正月に舞うて貰うさかいに、よう覚えて来なさいや。あたしも三味線稽古しとくよつてにな」

蘆屋に家を持ってからは、大阪にいた時のようには年始の客も来ず、まして二人の妹たちまで留守になるので、近年は正月と云うと、ひっそりとした、間の抜けたような日を送ることになっているのが、夫婦の者にはたまにしんみりしてよかつたけれども、悦子はひどく淋しがつて、「姉ちゃん」や「こいちゃん」の帰つて来るのを待ちあぐんだ。幸子は元日の午過ぎから三味線を持ち出して、爪弾きで「万歳」のおさらいをして、三箇日の間ずっと続けたが、しまいには悦子も聞き覚えて、「緋紗綾緋縮緬、……」のところへ来ると、

「とんとんちりめん、とんちりめん」

と、一緒になつて唄つた。

「#5字下げ」十六「#十六」は中見出し」

妙子の個展は今度は神戸の鯉川筋の画廊を借りて三日間開催され、阪神間に顔のひろい幸子の蔭の運動もあつて、第一日で大部分の作品が売約済になると云う成績を挙げた。幸子は三日目の夕方、会場の取り片付け

を手伝い旁 「#二の字点、1-2-22」雪子や悦子たちを連れて来たが、残務を終えておもてへ出ると、

「悦ちゃん、今夜はこいさんに奢^{おご}って貰^{もら}お。こいさんお金持やよつてに」

「そやそや」

と雪子も噉^{けしか}けるような口調で、

「何^{どこ}処^こがええ、悦ちゃん、洋食か、支那料理か」

「そうかて、まだお金受け取つてえへんねん。」

と、妙子は空惚^{そらとぼ}けようとしても空惚^{そらとぼ}けきれないで、ニヤニヤしながら云つた。

「構^かめへんわ、こいさん、お金やつたら立て換えとくが」

幸子は妙子の懐^{ふとら}に、諸雑費を差引いても少からぬ売り上げが這^{はい}入る勘定であることを知っているので、何とかして奢^{おご}らせようとかかるのであつたが、井谷の話ではないけれども、幸子と違つて現代式にチャツカリしている妙子は、こう云う場合にちよつとぐらい煽^{おた}てられてもそうやすやすと財布の紐^{ひも}を緩めない方であつた。

「そんなら、東雅楼にしてんか、彼^{あそこ}処^こが一番安いよつてに」

「ケチやなあ、こいさんは。オリエンタルのグリル奮^{ふん}発^{はつ}しんかいな」

東雅楼と云うのは南^{ナン}京^{キン}町^{まち}にある、表の店で牛豚肉の切売もしている広^{カント}東料理の一膳^{ぜん}めし屋なのであつたが、四人が奥へ這入つて行くと、

「今晚は」

と、登録器の所に立つて勘定を払つていた若い西洋人の女が云つた。

「ああ、カタリナさん、ええとここで会つた。紹介しよう、」

と妙子は云つて、

「この人やわ、こないだ話^{はな}した露^ロ西^シ亜^アの人。これ、わたしの姉さ

ん。これ、次の姉さん。」

「ああ、そう、わたしカタリナ・キリレンコ。わたし、今日展覧会見に行きました。妙子さんの人形皆売れましたね。オメデトございます」

「あの西洋人誰？ こいちゃん」

と、その女が出て行ってしまおうと悦子が云った。

「あの人、こいさんのお弟子やねんて」

と、幸子が云って、

「ほんに、あの人やったら電車の中でよう見る顔やわ」

「ちよつと可愛い顔してるやろ」

「あの西洋人、支那料理好きやのん」

「あの人上海シャンハイで育つたのんで、支那料理のことえらい通やねんわ。支那料理やったら普通の西洋人の行かんような汚い家ほどおいしい云うて、神戸では此処ここが一番や云うねん」

「露西亞人か、あの人？ 何や露西亞人らしい感じせえへんけど」

と雪子が云った。

「ふん、上海で英吉利イギリスの学校へ行つてて、英吉利の病院の看護婦になつて、それから一度英吉利人と結婚したことがあるのやて。あれでも子供があるねんで」

「へえ、幾つやろ」

「さあ、幾つやろ。うちより上やるか下やるか」

妙子の話だと、この白系露人キリレンコの一家は夙川ソクガハの松瀧マツタケアパートの近所の、上下で四間ぐらいしかない小さな文化住宅に、老母と、兄と、このカタリナと、三人暮しをしていて、カタリナだけは前から道で行き遇あうと目礼するくらいな仲になっていたのが、或る日突然妙子を仕事部屋に訪ねて来て、自分も人形 殊ことに日本風の人形の製作方を習いた

いから、弟子にしてくれと申し入れた。妙子がそれを承諾すると、すぐその場から妙子のことを「先生さん」と呼び出したので、妙子は面喰つて「妙子さん」と呼ぶことに改めて貰った。と云うのが今から一と月程前のことで、それから妙子は急に彼女と親しくなり、近頃ではアパートへの行き復りに、時々彼女の住居へも立ち寄るようになっていた。

「わたし、あなたの姉さん達いつも電車で会うのんで、よう知っています、あの人達、大変綺麗、わたし好きです、是非紹介して下さい云うて、この間から頼まれててんわ」

「何で生活してるのん」

「兄さんは毛織物か何その貿易商や云うこつちやけど、家の様子見たら、あんまり楽やないらしいねん。カタリナだけは、その英吉利人の旦那さんと別れた時にお金貰いました、わたし、それで暮しています、兄さんの世話になつてるのと違います云うて、身なりも小綺麗にしてるけど」

悦子の好きな蝦の巻揚げ、鳩の卵のスープ、幸子の好きな鷲の皮を焼いたのを味噌や葱と一緒に餅の皮に包んで食べる料理、等々を盛った錫の食器を囲みながら、ひとしきりキラレンコ一家の噂がはずんだ。カタリ

ナの子供と云うのは、写真で見ると今年四五歳ぐらいになる女の子だけれども、父親の方へ取られてしまつて、今は英国に帰っているのと云うこと。カタリナが日本風俗の人形を製作したいと云うのは、単なる趣味なのか、それとも他日その技を以て生活の一助にでもする腹なのか、よく分らないが、外人にしては手先が器用だし、頭も働いて、日本着物の柄や色合のことなどについても理解が早いこと。彼女が上海で育つたと云うのは、革命の時に一家が散り散りになり、彼女は祖母に連れられて上海に逃げたからなのであるが、兄は母に連れられて日本に来、日

本の中学校にも在学したことがあるとかで、漢字の知識も多少は持っていること。そんな訳で、娘は英吉利カブレしているが、兄と母とは非常なる日本崇拜で、家へ行つて見ると、階下の一室に両陛下の御真影を掲げまつり、他の一室にニコライ二世と皇后の額を掲げていること。兄のキリレンコが日本語が巧いのは当然として、カタリナも日本へ来てから短時日のわりには相当にこなすが、一番分りにくくて滑稽なのは老母の日本語で、これには妙子も少からず悩まされること。

「そのお婆ちゃんばあの日本語云うたらなあ、この間もうちに『あなたキノドクでござえます』云うねんけど、発音がけつたいで早口やさかい、『あなたクニドクでござえます』と聞えるねんわ。そんで、うち、『わたし大阪です』云うてしもてん」

妙子は人の癖を取るのが上手で、誰の真似まねでも直ぐすにして見せて皆を笑わせることが得意なのであるが、その「キリレンコのお婆ちゃん」の身振や口真似が余り可笑おかしいので、幸子たちはまだ会ったこともない西洋のお婆さんを想像して腹を抱えた。

「けど、そのお婆ちゃん、帝政時代の露西亞の法学士で、偉いお婆ちゃんらしいねんわ。『わたし日本語下手ござえます、仏蘭西語フランス独逸語ドイツ話します』云うてはるわ」

「昔はお金持やつてんやろな。幾つぐらいやのん、そのお婆ちゃん」
「さあ、もう六十幾つやるか。けどまだちよつとも耄碌もろろくしてはれへん。とても元気やわ」

それから二三日過ぎて、妙子は又その「お婆ちゃん」の逸話を持って帰つて来て、姉たちを面白がらせた。妙子はその日、神戸の元町へ買い物に出た帰りにユーハイムでお茶を飲んでいると、そこへ「お婆ちゃん」がカタリナを連れて這入つて来た。そして、これから新開地の聚楽館くわいじくの屋

上にあるスケート場へ行くのだと云って、あなたもお暇なら是非いらつしやいと頻りに誘った。妙子はスケートは経験がなかったが、私達が教えて上げます、直きに覚えられますと云うし、そう云う運動競技には自信があるので、兎も角も一緒に行ってみた。と、一時間ばかり稽古するうちに、大体コツを呑み込むことが出来、「あなた大変上手ごぜえます、わたし、あなた始めて信じませんごぜえます」と、ひどく褒めて貰ったが、それより妙子がびっくりしたのは、何とその「お婆ちゃん」がスケート場に立つや否や、颯爽として壮者を凌ぐ勢で滑り始めた。さすがに昔取った杵柄で、腰がしゃんと極まって、少しの危なげもないばかりでなく、時々、あつと思うような離れ技を演ずる。これには場内の日本人たちが皆呆氣に取られた。と云うのであった。

その後妙子は又或る時、

「今日カタリナのところで晩の御飯よばれて来てんわ」

と云って夜おそく帰って来た。そして、露西亞人と云うものはとても健啖なのに驚いた、最初に前菜が出て、それから温かい料理が幾皿か出たが、肉でも野菜でも分量がえらく沢山で、ふんだんに盛つてある、パンでもいろいろな形をしたパンが幾種類も出るの、妙子は前菜を食べただけで好い加減お腹が一杯になったが、もう結構です、もう食べられませんが、あと食べても、あなたなぜ食べません、これ如何です、これ如何ですと云っていくらでも勧めながら、キリレンコ達は盛に食う。その間には日本酒やビールやウオツカをぐいぐい飲む。兄のキリレンコがそうなのは不思議はないが、カタリナも、そして「お婆ちゃん」も、悴や娘に負けないくらい飲み且食う。そうこうするうち九時になったので帰ろうとしたら、まだ帰ってはいけませんと云って、トランプを出して来たので、一時間ばかり相手をしていたら、十時過ぎになって又もう一遍お夜食が

出たのには、見ただけでゲンナリしてしまつたが、あの人達はそのお夜食を又しても食べて酒を飲む。その飲み方も、ウイスキー用の小さなコップに一杯注いで、ぐいと一と息に、飲むと云うよりは口の中へ放り込む。日本酒は勿論、ウオツカのような強い酒でも、そう云う風にぐい飲みをしない旨くないと云うのだから、実に呆れた胃袋である。料理はそれほどおいしいものはなかつたけれども、変つたものでは、支那料理のワントンや伊太利料理のラビオリなどに似た、餛飩粉を捏ねたようなものが浮いているスープが出た。と、妙子はそんな話をして、

「今度はあなたの兄さんや姉さん達御招待します、是非連れて来て下さい云うて、頼まれてるねん。一遍だけよばれてめえへんか」

などと云つた。

その時分、カタリナは妙子にモデルになつて貰つて、結綿に結つた振袖の娘の羽子板を持つた立ち姿を製作すべく熱中していたが、妙子が夙川へ出向かない時は蘆屋の家へ押しかけて来て指導を受けたりしていたので、自然家族たちともだんだん懇意になつて行つた。貞之助もいつか顔見知りになつて、あの柄があつたらハリウッドへでも行つてみたらよいのに、などと云つたが、そうヤンキー風ながさつ「#「がさつ」に傍点」さがなく、日本の婦人などとも巧く交際してゆけるしとやかさと優しさとを、何処かに持つていた。と、紀元節の日の午後、高座の滝まで八イキングに行くところですが、門口まで一緒に来ましたからと云つて、兄のキリレンコがニツカア姿で妹のあとから這入つて来、上へは上らずに、庭へ廻つて、テラスの椅子に腰をかけた。そして貞之助に初対面の挨拶をして、カクテルを二三杯よばれて、三十分程話して行つたが、

「こないなつたら、その『ごぜえます』のお婆ちゃんにも会つてみたい

な」

と、貞之助が冗談を云うと、

「ほんになあ」

と、幸子もそれに賛成しながら、

「それでもいつもこいさんに真似して見せてもろてるさかい、会わん先から何や会うてるみたいやわ」

と、そう云って可笑しがったりした。

「#5字下げ」十七「#十七」は中見出し」

そんなことから、最初は真面目まじめでよばれに行く気はなかったのだけれども、妙子の話でだんだん好奇心が募って来たのと、先方から再三招待があつて断りにくくなつたのとで、とうとうキリレンコの家へ出かけて行ったのは、春とは云つてもお水取の最中の冴さえ返つた日のことであつた。

先方では家族が揃そろつて来てくれるようにと云っていたが、帰りがおそくなることが分つていたので、悦子は止やめさせ、雪子も悦子のお附合いに留守番をすることになつて、貞之助夫婦と妙子の三人だけで出かけた。

阪急の夙川しゅくがわの駅で下りて、山手の方へ、ガードをくぐつて真まっ直すぐに五六丁も行くと、別荘街の家並が尽きて田圃路たんぼみちになり、向うに一とむらの松林のある丘が見えて来る。キリレンコの家は、その丘の麓ふもとに数軒のさやかな文化住宅が向い合つて並んでいる中の、一番小さな、でも白壁の色の新しい、ちよつとお伽噺とぎばなしの挿絵さしえじみた家であつた。すぐカタリナが出て来て、階下の二た間つづきの奥の間の方へ案内したが、まん中に据すえてある鑄物のストープを囲んで主客四人が座を占めると、もう身動きもならないくらいな狭さであつた。四人はめいめい、長椅子の端の方や、頭の方や、一つしかない安楽椅子や、堅い木の椅子などに席を見つ

けて、適当に腰をかけたが、うっかり体を振り向けると、ストーブの煙突に触ったり、そこらのテーブルの上の物を肘で落したりする危険があった。階上が多分親子三人の寝室になっているのらしく、階下はこの二た間の外には裏にコック場があるだけのよう想像されるので、此処から見える次の間が食堂に使われるらしいのであるが、其方の部屋も此方の部屋と同じくらいな広さしかない。貞之助達は、彼処へどう云う風にして六人が列ぶのかと心配になったが、それにしてもおかしなのは、カタリナだけしかいない様子で、兄のキリレンコも問題の「お婆ちゃん」も一向現れるけはいがなかった。西洋人の晩飯の時刻は日本人より遅いものであるのに、時間をはつきり聞いておかなかつたので、早く来過ぎたのかも知れないけれども、もう窓の外は真つ暗になって来ているのに、家の中はひっそりとして、食堂の方にも何のしつらえもしてないのであつた。

「これ、どうぞ見て下さい、わたし始めて作りました。」

カタリナはそう云つて、三角棚の下の段から、第一回の試作品である舞妓の人形を出して来た。

「へえ、これ、ほんとうにあなたがお作りになつたんですか」

「そうです。しかし悪い所沢山ありました。皆妙子さん直してくれました」

「兄さん、その帯の模様見て御覧」

と、妙子が云つた。

「それ、うちが教せたげたのんと違いまつせ。カタリナさん自分で思い付かはつて、自分で画かはりましてん」

人形の締めているだらり「#「だらり」に傍点」の帯には、大方兄のキリレンコにでも知慧を借りたのであろう。黒地にペインテックスで桂馬

と飛車の将棋の駒が描いてあるのであった。

「これ、見て下さい」

と、カタリナは又、上海時代の写真帳を出して来て、「これ、わたしの前の旦那さん」「これ、わたしの娘」などと云った。

「この娘さん、カタリナさんによく似ています。別嬪ですね」

「あなた、そう思いますか」

「ええ、ほんとうによく似ています。あなた、この娘さんに会いたいと思いませんか」

「この娘、今英国。会うこと出来ません。仕方ないです」

「英国の何処にいるか、あなた分っているんですか。あなたもし英国に行ったら、この娘さんに会うこと出来ますか」

「それ、分らない。けれど、わたし、会いたい。わたし、会いに行くかも知れませんか」

カタリナは別に感傷的にもならず、平気でそんな風に語った。

貞之助と幸子とは、さつきから内々空腹を感じ出して、互にそつと腕時計を見ては眼を見合わしていたが、会話の跡切れた時を待って、貞之助が云った。

「あなたの兄さん、どうしましたか。今夜お留守ですか」

「あたしの兄さん、毎晩おそく帰ります」

「ママさんは」

「ママさん神戸へ買い物に行きました」

「ああ、そう、……」

では「お婆ちゃん」は御馳走の材料でも仕入れに行っているのではないか、とも思えたが、やがて柱時計が七時を打つても帰って来そうな様子がないので、狐につままれたようであった。妙子は自分が姉達を引っ張っ

て来た責任があるので、だんだん気が揉めて来て、何の支度もしてない食堂の方を無様に覗き込んだりしたが、カタリナはそれを感じているのかいないのか、時々、ストーブが小さくて石炭が直ぐ立ってしまうので、後から後から石炭を投げ込んでいた。黙ると一層空腹が身にこたえるので、何か話題を見付けてしゃべっていないかならなかつたが、そうそう話すこともなくなつて、ふつと四人とも無言になる時があると、石炭のごうごう燃える音だけが際立って聞えた。ポインタア系の雑種の犬が一匹、鼻で扉を押し開けて這入って来て、ストーブの火照りが一番よく当る場所を選んで、人間達の脚と脚の隙間へ割り込み、前肢の上に首を伸ばしてぬくぬくと蹲踞まつた。

「ボリス」

と、カタリナが呼んだが、上眼でじろりと其方を見ただけで、犬は火の前を動きそうにもしない。

「ボリス」

と、貞之助もしよざいなさそうに云つて、屈んで背筋を撫でてやつたりしていたが、そのうちに又三十分立ってしまったので、

「カタリナさん、……………」

と、突然云い出した。

「……………わたし達、何かミステークしているのと違いますか」

「何ですか」

「なあ、こいさん、僕達「#「僕達」は「谷崎潤一郎全集第10巻」(中央公論新社2015年の月2日初版発行)では「僕等」何ぞ聞き違えてるのんと違うやるか。もしそうやつたらえらい御迷惑かけることになるで。……………兎に角今夜は失礼した方がええのんやないやるか」

「そんなことない筈やねんけど、……………」

と、妙子が云つて、

「あのなあ、カタリナさん、……………」

「何ですか」

「あのなあ、……………ちよつと、中姉ちゃん云うてほしい。……………うち、
どない云うてええか分らへん」

「幸子、こんな時に仏蘭西語役に立てんかいな」

「カタリナさん仏蘭西語知ってはるのん、こいさん」

「知りやはれへん。英語やったらよう話しやはるが、……………」

「カタリナさん、アイ、……………アイム、アフレイド、……………」

と、貞之助がたどたどしい英語で始めた。

「……………ユー、ウエア、ナット、エキスペクテイング、アス、ツーナ
ト、……………」

「なぜですか」

と、カタリナは眼を円くしながら、流暢な英語で、しかし詰るような口
調で、

「今夜わたし達あなた方を招待しました。わたしあなた方を待っていた
のです」

八時が打つとカタリナは立つて台所の方へ行つて、何かごとごとやっ
ていたが、手早くいろいろなものを食堂に運んで、三人を其方の部屋へ呼
んだ。貞之助達は、テーブルの上に数々の前菜、いつの間に用意
してあつたのか、鮭の燻製、アンチヨビーの塩漬、鰯の油漬、ハム、チ
ーズ、クラッカー、肉パイ、幾種類ものパン、等々がまるで魔術のよう
に一時に出現して置き切れぬ程に並べられた光景を見ると、先ずほつと
した形であつた。カタリナは一人でよく働いて、紅茶を幾度も入れかえ
て出した。空腹を訴えていた三人は、目立たぬように、しかし相当に急

いで食べたが、分量があまり豊富なのと、次々とすすめられるので、すぐ満腹を覚え始めて、時々そつと、テーブルの下へ来ているボリスに食べかけを投げてやつたりした。

と、表の方でガタンと云う音がして、ボリスが玄関へ飛んで行った。

「お婆ちゃん帰って来やはつたらしいわ。………」

と、妙子が小声で二人に云った。

真つ先に「お婆ちゃん」が、こまごました買い物の包みを五つ六つ提げて、すつと玄関を通り抜けて台所へ消えて行った後から、兄のキリレンコが五十がらまりの紳士を連れて食堂へ這入って来た。

「今晚は。もう御馳走ちそうになっています」

「何卒々々なにぞぞ、………」

と、お辞儀をすると同時に揉み手をしながら、西洋人の男にしては小柄できゃしゃな体格をしたキリレンコは、羽左衛門型の細面の両頬ほおを、春寒の夜風に吹かれて来たらしく真つ紅にして、何か露西亞語で妹と二言三言云い合っていたが、日本人には「ママチカ、ママチカ」と云う語だけが聞き取れて、多分露西亞語の「母」の愛称なのであろうと推量された。

「わたし、今ママと神戸で会って一緒に帰って来たんです。それからこの人、」

と、キリレンコは件の紳士の肩を叩たたいて、

「妙子さんこの人御存じですね。私の友達のウロンスキーさん」

「はあ、私知ってます。これ、私の兄さんと姉さん、」

「ウロンスキーさんと仰おっしゃるんですか、『アンナ・カレニナ』の中に出て来ますね」

と、貞之助が云った。

「おお、そう。あなたよく知っています。あなた、トルストイ読みますか」

「トルストイ、ドストイェフスキー、日本の人は皆読みます」

と、キリレンコがウロンスキーに云った。

「こいさん、どうしてウロンスキーさん知ってるのん」

と、幸子が聞いた。

「この人、この近所の夙川ハウス云うアパートに住んではるねんけど、えらい子供好きで、何処の子供でも可愛がりはるのんで、『子供の好きな露西亞人』云うたら、この辺で有名やねんわ。誰も『ウロンスキーさん』云わんと、『コドモスキーさん』云うてるわ」

「奥さんは」

「持つてはれへん。何や、気の毒な話あるらしいねんけど、……………」

ウロンスキーは成る程子供好きらしい、柔和な、何となく気の弱そうなところのある淋しい眼元に微笑を含んで、眼尻に小皺を寄せながら、自分が噂されているのを黙って聞いていた。キリレンコよりは大柄であるが、引き締った肉づき、日焼けしたような茶褐色の皮膚の色、胡麻塩の濃い毛髪、黒い瞳の色など、日本人に近い感じで、何処やらに船員上りと云った風な様子があった。

「今夜は悦子さん入らっしゃらないんですか」

「はあ、あの児、学校の宿題があるものですから、……………」

「それは残念ですね。わたし、ウロンスキーさんに、今夜は非常に可愛らしいお嬢さんを見せて上げると云って、連れて来たところだったんです」

「まあ、えらい悪いことで、……………」

その時「お婆ちゃん」が挨拶に這入って来た。

「わたし、今夜大変ウレシごぜえます。………妙子さんのもう一人の姉さん、小さいお嬢さん、なぜ来ること出来ません？………」

貞之助と幸子とは、その「ごぜえます」を聞いて妙子を見ると可笑しくなるので、なるべく妙子と眼を見合わせないようにしたが、妙子があらぬ方を向いて一生懸命に取り澄ましている顔つきが、又可笑しくてならなかった。が、「お婆ちゃん」とは云うけれども、西洋の老婦人に多い肥満型ではなく、後姿などはすっきりしていて、踵の高い靴を穿いた、恰好のよい細い脚で、床をコツンコツン云わせながら鹿のように軽快に、

粗暴と云つてもよいくらいに、勢よく歩くところは、妙子が話したスケート場に於ける颯爽ぶりを想像せしめるものがあつた。笑うと齒の抜けているのが分り、頸から肩へかけての肉にたるみがあつて、顔にも縮緬皺が一面にあるにはあるけれども、肌が抜ける程真っ白なので、遠目ではそう云う皺やたるみがよく分らず、どうかした拍子に二十歳ぐらいは若く見えることがありそうであつた。

「お婆ちゃん」はテーブルの上を一度片づけて、新たに自分が仕入れて来た生牡蠣や、イクラや、胡瓜の酢漬や、豚肉鶏肉肝臓等々の腸詰や、又しても幾種類ものパン等を並べた。漸く酒が出て、ウオツカと、ビールと、ビールのコップに盛られた熱燗の日本酒とが交ぜこぜに勧められたが、露西亞人達のうちでも「お婆ちゃん」とカタリナとは日本酒を好んで飲んだ。矢張心配した通りテーブルの周囲には掛けきれないで、カタリナは火を焚いてない煖炉棚のところ立って凭りかかりながら、「お婆ちゃん」は用事をする相間々々に人々の背後から手を伸ばしながら、飲み食いした。フォークやナイフが不揃いであつたり足りなかつたりして、時々カタリナは手づかみで物を食べていたが、そんなところを偶「#二の字点、1-2-22」客に見付けられると真っ赧な顔をするので、貞

之助達はそれに気が付かない風をするのに骨が折れた。

「あんだ、その牡蠣食べんときなさい。………」

と、幸子はこつそり貞之助に耳打ちをした。生牡蠣とは云つても特別に吟味した深海牡蠣ではなくて、そこらの市場で買って来たものに違いない色をしているのに、それを勇敢に食べている露西亞人は、そう云う点では日本人よりずっと野蛮であるとしか思えなかった。

「ああ、もうほんとうにお腹が一杯です」

と云いながら、日本人側は盛に主人側の眼を掠めては、持て余した物をテーブルの下でボリスに与えていたが、貞之助はいろいろな酒をちゃんぽんに飲まされたのが利きいて来たらしく、

「あの写真、何ですか」

などと、ツアーの肖像に並べて掲げてある壮麗な建築物の額を指しながら、ひどく高調子になっていた。

「あれ、ツアルスコエセロの宮殿です。ペテログラード（この人達は決して「レニングラード」と云わない）の近所にあつたツアーの宮殿ですね」

と、キリレンコが云った。

「ああ、あれが有名なツアルスコエセロ、………」

「わたし達の家、ツアルスコエセロの宮殿大変近いございました。ツアー、馬車お乗りになりますね、ツアルスコエセロの宮殿出ていらつしゃいますね、それわたし、毎日々々見ましたごぜえます。ツアー、お話しになるの声、わたし聞くこと出来た思いましたごぜえます」

「ママチカ、………」

と、キリレンコは母を呼んで、露西亞語で説明を求めてから云った。

「馬車の中のツアーの話声がほんとうに聞えた訳ではないんですけれど

も、聞えるくらいに感じた、それほど近い所をその馬車がお通りになつたと云うんですね。何しろわたし達の家はあの宮殿の直ぐ傍にあつたんですよ。わたしは子供の時のことで、ほんやりとしか覚えていないんですが」

「カタリナさんは」

「わたし、まだ小学校へ行く前、何も覚えありませんね」

「彼方あちらの部屋に、日本の両陛下のお写真が飾つてありましたが、あれはどう云うお心持ですか」

「おお、それ、当り前のことごぜえます。わたし達、白系露西亞人の生活します、天皇陛下のお蔭。」

と、「お婆ちゃん」が俄にわかに表情を嚴肅にして云つた。

「白系露西亞人は誰でもそう思っているんですよ、共產主義に対して最後まで闘うものは日本であると。」

キリレンコはそう云つてから言葉を継いで、

「あなた方、支那はどうなると思えますか。あの国は今に共產主義になつてしまふんではないでしょうか」

「さあ、私達には政治のことはよく分りませんけれども、何にしても日本と支那とが仲が悪いのは困つたことですよ」

「あなた方、蔣介石チャンカイシーをどう思えますか」

と、さつきから、空のコップを掌もてあそで弄びながら聞いていたウロンスキーが云つた。

「去年の十二月、西安シアンであつたこと、どう思えますか。張学良チャンシュエリヤン、蔣介石を捕虜にしましたね。けれども、命助けました。それ、どう云う訳？……」

「さあ、………何か、新聞に書いてあつただけではなさそうな気がしま

すけれども、……」

貞之助は政治問題の中でも国際間の出来事に関しては相当に興味を感じており、新聞や雑誌に書いてある程度の知識は持っているのであるが、どんな時にも決して傍観者の態度から一步も出たことはなく、時節柄、うっかりしたことを口走って係り合いになつては詰まらぬと云う警戒心が強いので、取り分け気心の知れない外国人の前などでは、何も意見を云わないことに極めていた。が、母国を追われて漂泊しているこの人達に取つては、こう云う問題は一日も捨てて置けない自分達の死活問題なのであろう、それから暫く、彼等の間だけで議論「#」議論」は「谷崎潤一郎全集第26巻」（中央公論新社2015年9月10日初版発行）では「議論」が「つづいたが、ウロンスキーが一番その方面の消息に通じ、何かしら主張めいたものを持っているらしく、他の人達は大体に於いて聞き役に廻っていた。彼等は貞之助達のために努めて日本語でしゃべつたが、ウロンスキーは少し話が込み入つて来ると露西亞語を使い、キリレンコが時々それを貞之助達に訳して聞かせた。「お婆ちゃん」も一廉ひとかどの論客で、男達の云うことを大人しく聴いてばかりはいず、盛に議論を上下したが、熱して来ると彼女の日本語はいよいよ支離滅裂になり、日本人にも露西亞人にも理解出来ないものになるので、

「ママチカ、露西亞語で云いなさい！」

と、キリレンコが注意した。そして、どう云う切掛きっかけでそうなつたのか貞之助達には分らなかつたが、論議はいつの間にか「お婆ちゃん」とカタリナの親子喧嘩げんかにまで発展して行つた。何でも「お婆ちゃん」が英吉利イギリスの政策と国民性とを攻撃し出したのに対して、カタリナが躍起になつて反対しているらしいのであつた。カタリナに云わせると、自分は露西亞シヤンハイに生れたのだが、国を追われて、上海シヤンハイに来て、英吉利人の恩恵を受け

て成人したのである。英吉利の学校は私に学問を教えてくれた、而も月謝など一文も取りはしなかった、私は学校を出て看護婦になり、病院で月給を貰うようになったが、それもこれも皆英吉利のお蔭である、その英吉利がどうして悪いことがあるか、と云うのであるが、「お婆ちゃん」に云わせると、お前はまだ歳が若いからほんとうのことが分らないのだ、と云うのである。親子は次第に激昂して蒼白な顔色になって行つたが、好い塩梅に兄やウロンスキーの仲裁で、座が白けない程度にぶすぶす燻っただけで終つた。

「ママチカとカタリナ、いつも英吉利のことで議論します。わたしほんとうに困りますね」

と、済んでしまつてからキリレンコが云つた。

貞之助達は、それからもう一度次の間に席を改めて、ひとしきり雑談やトランプに時を過して、又もう一度食堂の方へ呼ばれた。が、日本人側に関する限り、最早や如何なる御馳走も受け付けられないで、専らボリスの胃袋を肥やす結果に終つたが、それでも酒だけは、貞之助が最後まで奮闘してキリレンコやウロンスキーと太刀打ちをした。

「氣イ付けなさい、あんた足もとがふらふらやわ。……」

と、漸く十一時過ぎになつて、暗い田圃の中の路を帰途に就きながら幸子は云つた。

「ああ、この冷たい風がええ氣持や」

「ほんまのところ、さつきはあたし、どうなるか思つたわ。カタリナだけしかいえへんし、いつ迄たつても食べるもんも飲むもんも出てけえへんし、お腹はますます減つて来るし、……」

「そこへさしているいろなもん出されたんで、つい卑しん坊してしもた。露西亞人云うたら、何であない大食いやねんやろ。飲む方やつたら

負けへんけど、食う方やつたらとても敵わんわ」

「そいでも、みんなで呼ばれに行っただげたのんで、お婆ちゃん喜んでほつたらしいわ。露西亞の人は、あんな小さな家にいたかてお客するのんが好きやねんな」

「あの人等、やっぱりあないしてるのんが淋しいて、日本人に交際求めてるねんで」

「兄さん、あのウロンスキー云う人なあ、
と、二三歩あとの暗闇から妙子が云った。

「あの人、気の毒な事情がおますねんで。何でも若い時に恋人がおましてんけど、革命でお互に居所知れんようになってしもてん。それ

から何年か立つて、その恋人が濠洲にいてる云うことが分つたのんで、あの人、濠洲まで訪ねて行きやはりましてん。そしたら、やっと居所が知れて、会えたことは会えたけど、直きその恋人が病氣になりやはつて、死んでしもたんで、それから一生操立てて、独身通してはりますねん」

「成る程なあ、そう云えば確かにそんな感じする人や」

「濠洲で一時苦勞しやはつて、鉾山の坑夫にまでなつてんけど、後で商売して、お金儲けはつて、今では五十万円から持つてはりますねん。カタリナの兄さん、あの人から幾らか資本出してもるてるらしいねんわ」

「おや、何処かで丁子が匂うてる。」

と、別荘街の、生垣つづきの路へ這入ると幸子が云った。

「あーあ、まだ桜が咲くまでには一と月あるねんなあ、待ち遠やわ」

「わたし、待ち遠ごぜえます」

と、貞之助が「お婆ちゃん」の口真似をした。

「# 5 字下げ」十八「# 十八」は中見出し」

「#ここから1字下げ」

「#ここから32字詰め」

「#ここから罫囲み」

原籍地 兵庫県姫路市豎町二〇番地

現住所 神戸市灘区青谷四丁目五五九番地

「#地から1字上げ」野村巳之吉

「#地から1字上げ」明治廿六年九月生

学歴 大正五年東京帝大農科卒業

現職 兵庫県農林課勤務水産技師

家庭及び近親関係 大正十一年田中家ノ次女徳子ヲ娶リ一男一女ヲ生ム。

長女八三歳ノ時死亡。妻徳子八昭和十年流感ニテ死亡。ツイデ十一年長

男モ十三歳ニテ死亡ス。両親八早ク世ヲ去リ、妹一人アリ、太田家ニ嫁

シ、東京ニ住居ス

以上

「#ここで罫囲み終わり」

「#ここで字詰め終わり」

「#ここで字下げ終わり」

台紙の裏に本人自筆のペン字でこう云う事項を記載した手札型の写真が、幸子の女学校時代の同窓である陣場夫人から郵送されて来たのは三月の下旬頃のことであつた。幸子はそれを受け取る迄はつい忘れていたのであつたが、そう云えば去年、ちょうど瀬越との間の話が停頓して、一月の末の或る日、大阪の桜橋交叉点のところ、陣場夫人に行き遇つて二三分立ち話をした時に、雪子の噂が出、ふうん、そんならあの妹さん、まだ結婚しやはれへんの、と云うようなことから、ええとこがあつ

たら世話してほしいねんわ、とそう云って別れたことがあったのを思い出した。でもその時は瀬越の話が纏まりそうな気がしていたので、半分はおあいその積りで云ったのであったが、陣場夫人の方は心にかけていてくれたと見えて、その後妹さんはどうしておいでになるか、実はあの時はうっかりしていたが、私の夫の恩人に当る関西電車社長浜田文吉氏の従弟で、先年細君に死に別れて目下後妻を求めている人があり、是非良い縁を捜してくれるようにと、浜田氏から熱心な依頼を受け、本人の写真まで預かっている口があるので、ふっと妹さんのことを考えついた、夫はその人をよく知っている訳ではないが、浜田氏が保証するからには間違いのない人物であろうと云っている、兎も角も別便に託して、写真をお送りして見るから、お気持があるなら台紙の裏に書いてある事項に基づいて、詳細のことはそちらで調べて戴きたい、その上で適当な縁と思われたら、お申越次第いつでも御紹介の労を取ることにしよう、こう云う話はお目に懸ってお話するのが本当だけれども、押し付けがましくなっても如何と思うので、一往手紙でお伺いする、と、そう云って来て、その明くる日に写真が届けられたのであった。

幸子はそれを受け取ったと云う挨拶を兼ねて、直ぐ礼状を出したことは出したけれども、去年井谷に責められて懲りているので、今度は安請合をしないことにして、御親切は身に沁みて忝ないが、この御返事は一二箇月待つて戴きたい、と云うのは、ついこの間一つ縁談があったのを破談にしたばかりのところなので、妹の心理状態を考えると、ここ暫く期間を置いて次の話を持ち出した方がよさそうに思う、そして今度は出来るだけ慎重を期し、調査も十分にした上で、お願いするものならお願いしたい、御承知のようにあの妹は大分婚期がおくれているので、あまりたびたび見合いをさせてそれが不結果に終るようになるのは、姉の身と

していかにも当人がいじらしいから、と、そう正直に云ってやった。で、まあ今度は慌あわてずに、自分達の手でゆっくり調べてから、よいとなったら本家に話をし、その上で雪子にも云うことにしようと、貞之助とそんな風に話し合っていたのであったが、正直のところ、幸子はそれほど気乗りがしている訳ではなかった。勿論調べてみないことには何とも云えないし、財産のあるなしが全然書いてないけれども、台紙の裏の記載を読んだだけでも、瀬越の時よりずっと条件の悪いことが分る。第一に年齢が貞之助より二つも上であると云うこと。第二に初婚でないと云うこと。尤も先妻の子は二人とも死んでしまっているので、それは気楽であるが、幸子が見て、何より雪子が好い返事をしないであろうと思われるのは、風采ふうさいの点で、写真で見たところえらく老おけていて、じじむさい感じのする顔なのである。実物は又違ちがうと云うこともあろうけれども、求婚のために送って来た写真がこうだとすると、恐らくこれ以上老けて見えることはあっても、若く見えると云うことはあるまい。何も好男子でなくてもよいし、実際の年は貞之助より上であっても構わないが、二人並んで盃さかずきをする時に、花婿はなむこの風采があまり爺々じいじいして見えるのでは、雪子が可哀かわいそうでもあるし、折角世話をした自分達にしても、列席の親類達に対して鼻を高くすることが出来ない。矢張りくらかは新郎らしい若々しさ、と云うのが無理なら、何処か澆刺はつちゅうとした、色つやのよい、張り切った感じの人であってほしい。それやこれやを考えると、幸子はどうもこの写真の人では気が進まないの、さしあたり急いで調べようともせず、そのまま一週間ばかり握り潰つぶしていたのであった。

が、そのうちに気が付いたことと云うのは、先日「写真在中」とした郵便物が届いた時に、雪子がちらと見て知ってはいなかったであろうか、そうだとすると、黙かえっていては却かえって隠しごとをしているようで、変に

感じはしないであろうか、と云うことであつた。幸子としては、雪子の様子に表面何の変つたところも認められないようなものの、この間のところが矢張多少は精神的に創痕そらいをとどめてはいないかと考え、そう矢継早やにあとの話を持ち出すことは控えた方がよいと思つていた訳であるが、何処からか写真を送つて来ているのに、中姉ちゃんはなぜ淡泊に打ち明けて云つてくれないのかと、此方の折角の心づかいを不自然な細工をしていられるように取つても困る、そのくらいならいっそ最初に写真を示して、肝腎かんじんの当人が何と云うか、反応を見るのも一つの方法であるかも知れない、と、又そう思い直したので、或る日神戸へ買い物に出ようとして、二階の化粧部屋で着換えをしているところへ這入はいつて来た雪子に、

「雪子ちゃん、又一つ写真が来てるねんで」

と、ふっと云いながら、答は待たずに、

「これやわ」

と、すぐ用筆筒ようだんすの小抽出こひきだしから出して見せた。

「その裏に書いてあるのん読んで御覧。」

雪子は黙つて受け取つて、写真はちよつと見ただけで、裏を返して読んでいたが、

「誰から送つて来やはつたん」

「雪子ちゃん陣場さん知つてるやる、女学校時分に今井云うてはつた」

「ふん」

「いつやつたか、あの人に路みちで会つた時、雪子ちゃんの話が出たよつてに頼んだことがあつてんわ。そしたら、気にかけてくれはつたと見えて、それ送つて来やはつてん」

「……………」

「別に今すぐ返事せんならんことないねん。実は今度は、先にすっかり調べてしもてから雪子ちゃんに云おう思うててんけど、何や隠してるみたいになつてもけつたいなさかい、まあ見せるだけ見せとくわな。」

手にある写真を持てあつかつて、違い棚だなの上に置くと、廊下の欄干のところへ出て行ってぼんやり庭を見おろしている雪子の、後姿に向つて幸子はつづけた。

「今のところ、雪子ちゃんは何も考えへん」「#「考えへん」は「谷崎潤一郎全集第19巻」(中央公論新社2015年6月10日初版発行)では「考へん」(旧かな)(新かなでは「考えん」となる)」「かてええねん。氣い進まんかつたら、こんな話聞かなんだことにしときなさい。折角云うて来てくれはつたよつてに調べてみよう思うてるけど。」

「中姉なかあねちゃん、」
雪子は何と思つたか、しずかに此方を向き直りながら、努めて口元に微笑を浮かべるようにして云つた。

「縁談の話やつたら、云うてほしいねんわ。あたしかて、そんな話がまるきりないのんより、何か彼かか云うてもろてる方が、張合があるような氣いするよつてに。」

「そうか」
「ただ見合いだけは、よう調べてからにしてほしいねん。外の事はそんなにむずかしゆう考えてくれんかてええねんわ」

「そうかいな。そない云うてくれると、あたしかてほんまに骨折がいがあるねん」

幸子は身支度をしてしまうと、そんならちよつと、晩の御飯までに帰つて来るよつてに、と云い置いてひとりで出かけたが、雪子は姉が脱ぎ捨

てて行った不断着を衣紋竹えもんたけにかけ、帯や帯締を一と纏めにして片寄せてから、なお暫くは手すりに靠もたれて庭を見ていた。

蘆屋あしやのこのあたりは、もとは大部分山林や畑地だったのが、大正の末頃からぼつぼつ開けて行った土地なので、この家の庭なども、そんなに広くはないのだけれども、昔の面影を伝えている大木の松などが二三本取り入れてあり、西北側は隣家の植え込みを隔てて六甲一帯の山や丘陵が望まれるところから、雪子はたまに上本町の本家へ帰って四五日もいから戻って来ると、生れ変わったように気分がせいせいするのであった。

彼女が今立って見おろしている南側の方には、芝生と花壇があり、その向うにささやかな築山つきやまがあつて、白い細かい花をつけた小手毬こてまりが、岩組の間から懸崖けんがいになつて水のない池に垂れかかり、右の方の汀みぎわには桜とライラックが咲いていた。但しただ、桜は幸子が好きなので、たとい一本でも庭に植えて自分の家で花見をしたいからと、二三年前に入れさせたもので、それが咲く時はその木の下に床几しょうぎを出したり毛氈もっせんを敷いたりするのだけれども、どう云う訳か育ちが悪くて、毎年頗る貧弱すいじやくな花をしか着けないのであるが、ライラックは今雪のように咲き満ちて、芳香を放つていた。そのライラックの木の西に、まだ芽を出さない梅檀めんだんと青桐あおぎりがあり、梅檀の南に、仏蘭西語で「セレンガ」と云う灌木かんぼくの一種があつた。雪子たちの語学の教師であるマダム塚本と云う仏蘭西人が、自分の国に沢山あるセレンガの花を、日本へ来てから見たことがなかったのに、この庭にあるのは珍しいと云つて、ひどく懐なつかしがつてから、雪子たちもこの木に注意するようになり、仏和辞典を引いてみて、日本語では「さつまうつぎ」と云うところの卯木うつきの一種であることを知つたが、この花の咲くのは、いつも小手毬やライラックが散つた後、離れ座敷そでがきの袖垣そでがきのもとにある八重山吹の咲くのと同時ぐらいなので、今はまだ、ようよう若葉が

芽を吹きかけているだけである。その「さつまうつぎ」の向うが、シュトルツ氏の裏庭との境界の金網になっていて、網に沿うた青桐の下の、午後の陽光がうらうらと照っている芝生の上に、悦子がさつきからローゼマリーと二人で蹲踞まりながら、飯事をしていた。二階の欄干から見おろすと、玩具の寝台や、洋服筆筒や、椅子や、テーブルや、西洋人形など、こまこました物が並んでいるのが残らず見分けられ、二人の少女の甲高い声はつきり聞き取られるのであるが、二人は雪子に見られて、いることに気が付かないで、遊びに夢中になっていた。ローゼマリーが、

「これ、パパさんです」

と、左の手に男の人形を持ち、

「これ、ママさんです」

と、右の手に女の人形を持って、両方から顔を押しつけては、口の中で「チュツ」と舌を鳴らしているのが、最初は何をしているのやら分らなかったが、なおよく見ると、二つの人形に接吻させているのらしく、自分で「チュツ」と舌を鳴らすのはその音のつもりらしいのであった。と、ローゼマリーは又、

「ベビーさん来ました」

と云いながら、ママの人形のスカートの下から赤ん坊の人形を取り出した。そして、何度も一つことをして、

「ベビーさん来ました、ベビーさん来ました」

と云いつづけるので、「来ました」と云うのが「生れました」と云う意味であることが察しられたが、西洋では、赤ん坊は鶴が咬えて来て木の枝に置いて行くのだと云う風に子供に教えると聞いていたのに、矢張お腹から生れることを知っているのだなと思いつつながら、雪子はひとり微笑ましさを泳えて、少女達のすることをいつ迄もこっそりと見守っていた。

「#5字下げ」十九「#「十九」は中見出し」

幸子は昔、貞之助と新婚旅行に行った時に、箱根の旅館で食い物の好き嫌いの話が出、君は魚では何が一番好きかと聞かれたので、「鯛やわ」と答えて貞之助に可笑しがられたことがあった。貞之助が笑ったのは、鯛とはあまり月並過ぎるからであつたが、しかし彼女の説に依ると、形から云つても、味から云つても、鯛こそは最も日本的なる魚であり、鯛を好かない日本人は日本人らしくないのであつた。彼女のそう云う心の中には、自分の生れた上方こそは、日本で鯛の最も美味な地方、従つて、日本の中でも最も日本的な地方であると云う誇りが潜んでいるのであつたが、同様に彼女は、花では何が一番好きかと問われれば、躊躇なく桜と答えるのであつた。

古今集の昔から、何百首何千首となくある桜の花に関する歌、古人の多くが花の開くのを待ちこがれ、花の散るのを愛惜して、繰り返し繰り返し一つことを詠んでいる数々の歌、少女の時分にはそれらの歌を、何と云う月並なと思ひながら無感動に読み過して来た彼女であるが、年を取るにつれて、昔の人の花を待ち、花を惜しむ心が、決してただの言葉の上の「風流がり」ではないことが、わが身に沁みて分るようになった。そして、毎年春が来ると、夫や娘や妹たちを誘つて京都へ花を見に行くことを、ここ数年来欠かしたことがなかつたので、いつからともなくそれが一つの行事のようになっていた。この行事には、貞之助と悦子とは仕事や学校の方の都合で欠席したことがあるけれども、幸子、雪子、妙子の三姉妹の顔が揃わなかつたことは一度もなく、幸子としては、散る花を惜しむと共に、妹たちの娘時代を惜しむ心も加わつて

いたので、来る年毎に、口にこそ出さね、少くとも雪子と一緒に花を見るのは、今年が最後ではあるまいかと思ひ思ひした。その心持は雪子も妙子も同様に感じていらしくて、大方の花に対しては幸子ほどに関心を持たない二人だけれども、いつも内々この行事を楽しみにし、もう早くから、あのお水取の済む頃から、花の咲くのを待ち設け、その時に着て行く羽織や帯や長襦袢の末にまで、それとなく心づもりをして、いる様子が余所目にも看取れるのであった。

さて、いよいよその季節が来て、何日頃が見頃であると云う便りがあつても、貞之助と悦子のために土曜日曜を選ばなければならぬので、花の盛りに巧く行き合わせるかどうかと、雨風につけて彼女たちは昔の人がしたような「月並な」心配をした。花は蘆屋の家の附近にもあるし、阪急電車の窓からでも幾らも眺められるので、京都に限ったことはないのだけれども、鯛でも明石鯛でなければ旨がらない幸子は、花も京都の花でなければ見たような気がしないのであった。去年の春は貞之助がそれに反対を唱え、たまには場所を変えようと云い出して、錦帯橋まで出かけて行つたが、帰つて来てから、幸子は何か忘れ物をしたようで、今年ばかりは春らしい春に遇わないうで過ぎてしまふような心地がし、又貞之助を促して京都に出かけて、漸く御室の厚咲きの花に間に合つたような訳であつた。で、常例としては、土曜日の午後から出かけて、南禅寺の瓢亭で早めに夜食をしたため、これも毎年欠かしたことの無い都踊を見物してから帰りに祇園の夜桜を見、その晩は麩屋町の旅館に泊つて、明くる日嵯峨から嵐山へ行き、中の島の掛茶屋あたりで持つて来た弁当の折を開き、午後には市中に戻つて来て、平安神官の神苑の花を見る。そして、その時の都合で、悦子と二人の妹たちだけ先に帰つて、貞之助と幸子はもう一と晩泊ることもあつたが、行事はその日でおしまいにな

る。彼女たちがいつも平安神宮行きを最後の日に残して置くのは、この神苑の花が洛中に於ける最も美しい、最も見事な花であるからで、円山公園の枝垂桜が既に年老い、年々に色褪せて行く今日では、まことに此処の花を措いて京洛の春を代表するものはないと云ってよい。されば、彼女たちは、毎年二日目の午後、嵯峨方面から戻って来て、まさに春日の暮れかかろうとする、最も名残の惜しまれる黄昏の一時を選んで、半日の行楽にやや草臥れた足を曳きずりながら、この神苑の花の下をさまよう。そして、池の汀、橋の袂、路の曲り角、廻廊の軒先、等にある殆ど一つ一つの桜樹の前に立ち止って歎息し、限りなき愛着の情を遣るのであるが、蘆屋の家に帰ってから、又あくる年の春が来るまで、その一年じゅう、いつでも眼をつぶればそれらの木々の花の色、枝の姿を、眼瞼の裡に描き得るのであった。

今年も幸子たちは、四月の中旬の土曜から日曜へかけて出かけた。袂の長い友禅の晴れ着などを、一年のうちに数える程しか着せられることのない悦子は、去年の花見に着た衣裳が今年は小さくなっているのださえ着馴れないものを窮屈そうに着、この日だけ特別に薄化粧をして、いるために面変りのした顔つきをして、歩く度毎にエナメルの草履の脱げるのを気にしていたが、瓢亭の狭い茶座敷にすわらせられると、つい洋服の癖が出て膝が崩れ、上ん前がはだけて膝小僧が露われるのを、「それ、悦ちゃん、弁天小僧」

と云って、大人達は冷やかした。悦子はまだ箸の持ち方がほんとうでなく、子供独得の変な持ち方をする上に、袂が手頸に絡み着いて洋服の時とは勝手が違うせいか、物をたべるのも不自由らしく、八寸に載って出た慈姑をひよいと挟もうとして、箸の間から落した拍子に、慈姑が濡れ縁から庭にころげて、青苔の上をころころと走って行ったのには、悦子

も大人達も声を挙げて笑ったが、それが今年の行事に於ける最初の滑稽こっけいな出来事であった。

明くる日の朝は、先ず広沢の池のほとりへ行つて、水に枝をさしかけた一本の桜の樹の下に、幸子、悦子、雪子、妙子、と云う順ならに列んだ姿を、遍照寺山を背景に入れて貞之助がライカに収めた。この桜には一つの思いい出があると云うのは、或る年の春、この池のほとりへ来た時に、写真機を持った一人の見知らぬ紳士が、是非あなた方を撮らして下さいと懇望するままに、二三枚撮つて貰もらったところ、紳士は慇懃いんぎんに礼を述べて、もしよく映つておりましたらお送りいたしますからと、所番地を控えて別れたが、旬日の後、約束を違たがえず送つて来てくれた中に素晴らしいのが一枚あつた。それはこの桜の樹の下に、幸子と悦子とがイたみながら池の面に見入っている後姿を、さざ波立った水を背景に撮つたもので、何気なく眺めている母子の恍惚こっごうとした様子、悦子の友禅の袂の模様模様に散りかかる花の風情ふせいまでが、逝ゆく春を詠歎する心持を工たくまずに現あらわしていた。以来彼女たちは、花時になるときつとこの池のほとりへ来、この桜の樹の下に立つて水の面をみつめることを忘れず、且かつその姿を写真に撮ることを怠おろそかないのであつたが、幸子は又、池に沿うた道端の垣根の中に、見事な椿つばきの樹があつて毎年真紅しんくの花をつけることを覚えていて、必ずその垣根のもとへも立ち寄るのであつた。

大沢の池の堤の上へもちよつと上つて見て、大覚寺、清涼寺せいりょうじ、天竜寺の門の前を通つて、今年もまた渡月橋とげつきょうの袂へ来た。京洛の花時の人の出盛り盛りに、一つの異風を添えるものは、濃い単色の朝鮮服を着た半島の婦人たちの群がきまつて交まじっていることであるが、今年も渡月橋を渡つたあたりの水辺の花の蔭に、参々ごご伍々ごごうごくまつて昼食をしたため、中には女だてらに酔つて浮かれている者もあつた。幸子たちは、去年は大悲閣

で、一昨年は橋の袂の三軒家で、弁当の折詰を開いたが、今年は十三詣りまいりで有名な虚空蔵菩薩こくそうぼんざうのある法輪寺の山を選んだ。そして再び渡月橋を渡り、天竜寺の北の竹藪たけやぶの中の径こみちを、

「悦ちゃん、雀のお宿よ」

などと云いながら、野の宮の方へ歩いたが、午後になってから風が出て急にうすら寒くなり、厭離庵えんりあんの庵室を訪れた時分には、あの入口のところにある桜が姉妹たちの袂におびただしく散った。それからもう一度清涼寺の門前に出、釈迦堂しゃかどう前の停留所から愛宕電車あたごで嵐山に戻り、三度渡月橋の北詰に来て一と休みした後、タキシードを拾って平安神宮に向った。あの、神門を這入はいって大極殿だいごくでんを正面に見、西の廻廊から神苑に第一歩を踏み入れた所にある数株の紅枝垂べにしだれ、海外にまでその美を謳うたわれていると云う名木の桜が、今年はどんな風であろうか、もうおそくはないであろうかと気を揉みながら、毎年廻廊の門をくぐる迄まではあやしく胸をときめかすのであるが、今年も同じような思いで門をくぐった彼女達は、忽たちまちち夕空にひろがっている紅の雲を仰ぎ見ると、皆が一樣に、

「あー」

と、感歎の声を放った。この一瞬こそ、二日間の行事の頂点であり、この一瞬の喜びこそ、去年の春が暮れて以来一年に亘わたって待ちつづけていたものなのである。彼女たちは、ああ、これでよかった、これで今年もこの花の満開に行き合わせたと思つて、何がなしにほっとすると同時に、来年の春も亦またこの花を見られますようにと願うのであるが、幸子一人は、来年自分が再びこの花の下に立つ頃には、恐らく雪子はもう嫁に行つているのではあるまいか、花の盛りは廻つて来るけれども、雪子の盛りは今年が最後ではあるまいかと思ひ、自分としては淋さびしいけれども、雪子のためには何卒どうぞそうであつてくれますようにと願う。正直のところ、彼

女は去年の春も、去々年の春も、この花の下に立った時にそう云う感慨に浸ったのであり、そのつど、もう今度こそはこの妹と行を共にする最後であると思つたのに、今年も亦、こうして雪子をこの花の蔭に眺めていられることが不思議でならず、何となく雪子が傷ましくて、まともにその顔を見るに堪えない気がするのであつた。

桜樹の尽きたあたりには、まだ軟かい芽を出したばかりの楓や檜があり、円く刈り込んだ馬酔木がある。貞之助は、三人の姉妹や娘を先に歩かして、あとからライカを持って追いながら、白虎池の菖蒲の生えた汀を行くところ、蒼竜池の臥竜橋の石の上を、水面に影を落して渡るところ、栖鳳池の西側の小松山から通路へ枝をひろげている一際見事な花の下に並んだところ、など、いつも写す所では必ず写して行くのであつたが、此処でも彼女たちの一行は、毎年いろいろな見知らぬ人に姿を撮られるのが例で、ていねいな人は態「#二の字点、1-2-22」その旨を申し入れて許可を求め、無躑躅な人は無断で隙をうかがつてシャッターを切つた。彼女たちは、前の年には何処でどんなことをしたかをよく覚えていて、ごくつまらない些細なことでも、その場所へ来ると思い出してはその通りにした。たとえば栖鳳池の東の茶屋で茶を飲んだり、樓閣の橋の欄干から緋鯉に鮒を投げてやつたりなど。

「あ、お母ちゃん、お嫁さんやわ」

と、突然悦子が声を挙げた。見ると、神前結婚を済ました一組が齋館から出て来るところで、花嫁が自動車に乗り移るのを、弥次馬共が両側に列んで覗き込んでいるのである。此方からは白い角かくしと、きらびやかな襦袢の後姿が、硝子戸の中でちらと光つたのを見ただけであつたが、実は此処でこう云う一組に行き合わすことも、今年が始めてなのではなかつた。そして、いつでも、幸子は何か胸を衝かれるように感じてその

前を通り過ぎるのであるが、雪子や妙子は案外平気で、時には弥次馬の中に交って花嫁の出て来るのを待っていたり、花嫁がどんな顔をしていたとか、どんな衣裳を着ていたとか、あとで幸子に話して聴かすのであった。

その夕、貞之助と幸子とは、二人だけ残ってもう一晩京都に泊った。夫婦は明るる日、幸子の父が全盛時代に高尾の寺の境内に建立した不動院という尼寺があるのを訪ね、院主の老尼と父の思い出話などをして閑静な半日を暮したが、ここは紅葉の名所なので、今は新緑にも早く、わずかに庭前の笈の傍にある花梨の杓が一つ綻びかけているのを、いかにも尼寺のものらしく眺めなどしながら、山の清水の美味なのに舌鼓を打ちつつコップに何杯もお代りを所望したりして、二十丁の坂路を明るいうちに下った。帰りに御室の仁和寺の前を通ったので、まだ厚咲きの桜には間があることが分っていたけれども、せめて枝の下にでも休息して木の芽田楽をたべるだけでもと、幸子は貞之助を促して境内に這入ったが、ぐずぐずしていて日が暮れると、又もう一晩泊りたくなることが、毎度の経験で知れているので、嵯峨にも、八瀬大原にも、清水にも、方々に心を残しながら、七条駅に駈け付けたのはその日の五時少し過ぎであった。

それから二三日立って、或る朝幸子は、貞之助が事務所へ出かけて行ってから、いつものように書斎の整理をしに這入ったが、ふと、夫の机の上に、書翰箋の書き潰しが展べてあつて、余白に鉛筆でこんな文句が走らしてあるのを見つけた。

「#ここから1字下げ」

四月某日嵯峨にて

住よき人のよき衣つけて寄りつどふ

都の嵯峨の花ざかりかな

「#ここで字下げ終わり」

女学校時代に自分もひとしきり作歌に凝ったことのある幸子は、近頃又、夫の影響で、ノートブックの端などへ思いつくままを書き留めたりして、ひとり楽しんでいたのであったが、それを読むと俄にわかに興が動いて、先日、平安神宮で詠よみさしたまま想が纏まらないでしまったものを、暫く考えて次のように纏めてみた。

「#ここから1字下げ」

平安神宮にて花の散るを見て

ゆく春の名残惜しさに散る花を

袂のうちに秘めておかまし

「#ここで字下げ終わり」

彼女はそれを夫の歌のあとの余白へ鉛筆で書き添えて、もとの通り机の上にひろげておいたが、貞之助は夕方帰って来て、それに気が付いたのかどうか何の話もせず、幸子も忘れてしまっていた。が、その明くる朝、彼女が書齋を片付けに行くと、机の上に昨日の通り紙きれが載っていて、彼女の歌の又あとへ、貞之助の手で、それをこう訂正してはと云うつもりなのでもあろうか、次のような歌が記されていた。

「#ここから1字下げ」

いとせめて花見ごろもに花びらを

秘めておかまし春のなごりに

「#ここで字下げ終わり」

「#5字下げ」二十「#「二十」は中見出し」

「あんた、ええ加減にしときなさい、そない一遍に精出したら、しんどおまつせ」

「そうかて、やり出したら止められへん。」

貞之助は今日の日曜に、先月花を見に行つたばかりの京都へ、もう一度幸子を誘つて新緑を見に行くつもりであつたが、幸子が今朝から気分が悪くて何となく体が大儀だと云うので、出かけることを見合せて、午後から庭の草むしりに熱中していた。

いったい此処ここの庭の芝生は、もとの家屋敷を譲り受けた時分には生えていなかったのであるが、此処は芝をお植えになつても着きませんよと云う前の持ち主の忠告を押し切つて、強しいて植えさせたのは貞之助であつた。それが、丹精よそのかいがあつて、どうやら今ではものになつて来たのだけれども、矢張余所よそのと比べると発育が悪く、緑の色の出かたが一般のよりは遅かつた。で、貞之助は自分が首唱者であつた責任上、人一倍芝生の手入れをするのであるが、育ちの悪い原因の一つは、芽の出始める春先に雀すずめがやつて来て傍からその芽を摘んでしまふせいでもあることを発見して以来、毎年早春の季節になると雀を防ぐことに努め、見つけ次第小石を投げて追い散らすのを仕事のようにして、家族の者たちにもやかましく云うので、ほら又兄さんの石投げが始まる時候が来たと、義妹たちはよく云い云いした。そして、陽気が暖かになると、折々今日のような風に、海水帽にもんぺを穿はいて、芝の間に繁殖するぺんぺん草や

車前を取ったり、芝刈器で、ジヨキジヨキ芝を刈ったりした。

「あんだ、蜂、蜂、大きな蜂やわ」

「何処に」

「それ、そつちへ」

テラスの上には、もう例年のように葎簧張の日覆いが出来ていた。幸子はその蔭の中にある、皮つきの白樺の丸太で作った椅子に掛けているのであつたが、蜂は彼女の肩をかすめて、支那焼の「#「土へん+敦」、第3水準「15-63」の上に据えられた芍薬の鉢の周りを二三度旋回して、ぶうんと呻りながら、紅白の平戸が咲いている方へ飛んで行った。夫は草むしりに釣られてだんだんと境界の金網沿いの、大明竹や檜の葉の生い繁った薄暗い方へもぐって行ってしまったので、彼女のところからは、ひとかたまりの平戸の花越しに、大きな海水帽の縁だけしか見えない。

「蜂よりか蚊の方がえらいねん。手袋の上から刺しよる」

「そやよつてに、もう止めなさい」

「それより、気分が悪い云うてたのんに、どうしたんや」

「臥てたら却ってしんどいさかい、こないしてたらいくらか晴れ晴れするやろ思うて。」

「しんどいて、どんな風にしんどいねん」

「頭が重うて、……嘔き気がして、……手足がだるうて、……何や、重い病気になる前兆みたいな」

「何云うてるねん、そら神経や」

そして、突然貞之助は、

「ああ、もう止めとこ」

と、ほっとしたような大声を出して、竹の葉をガサガサ云わせて立ち上ると、車前の根を掘るために持っていた切り出しを放り出して、手袋を

脱いで、蚊に螫された痕のある手の甲で額の汗を拭き拭き、ぐつと腰の蝶番を伸ばしながら身を反らした。それから、花壇の傍の水道の栓を開けて、手を洗って、

「モスキトンないか」

と、手頸の赤く脹れたところを掻きながらテラスへ上って来たが、

「お春どん、モスキトン持って来て」

と、幸子が奥へ怒鳴っている暇に、又庭へ降りて行って、今度は平戸の花の萎んだのを摘みはじめた。此処の平戸は四五日前に真っ盛りであったのが、今は六分通り萎んで、見苦しくよごれているのであったが、分けても白い花の、紙屑のように黄色く汚らしくなったのを、気にして一つ一つ取って捨て、あとに雄糞が髯のように残ったのを、丹念にむしって行くのであった。

「ちよつと！ モスキトン来てまっせ」

「ふん」

と云つてから、又暫く筆つていて、

「此処、掃除さしといてんか」

と、漸く妻のところへ上つて来た貞之助は、モスキトンの容器を受け取る途端に、

「おや」

と、彼女の眼の中を見た。

「何ですねん」

「ちよつと、此方の明るい所へ来て見なさい」

もうさつきから日が暮れかけていて、葎簀張の下は一層暗くなっているので、貞之助は幸子をテラスの端の方まで引っ張って行って、夕方の光線の中に立たせた。

「ふうん、お前、眼の中が黄色いなあ」

「黄色い？」

「ふん、白眼のところが黄色うなってる」

「そしたら、何やる、黄疸おうだんか知らん」

「そうかも知れん、何か脂あぶらツこいもん食べたか」

「昨日ピフテキ食べたやおませんか」

「そうや、それやで」

「ふん、ふん、それで分ったわ。こない胸がむかむかして、嘔き

気がするのん、黄疸に違いないわ」

幸子はさつき、夫に「おや」と云われた時は訳もなくぎよっとしたらしかつたが、黄疸ならばそんなに心配することもないと思うと、急にほつとしたと見えて、おかしなことだが却うって嬉うれしそうな眼つきをした。

「どれどれ」

貞之助は自分の額を妻のにあててみて、

「熱は大してないねんな。ま、こじらすと悪いよつてに臥ふてなさい。

兎うに角櫛くし田ださんに診みに来て貰もらおう」

と、彼女を二階へ上らしておいて、自分で直すぐに電話をかけた。

櫛田くしだと云うのは、蘆屋川の停留所の近くに開業している医師で、見立ての上手な、技倆ぎりょうの卓越した人であるだけに、この近所で引ひつ張はりたいこになつ

ていて、毎日夜の十一時過ぎまで夜食にも戻らずに往診に廻まわっていると言いう風なので、掴つかまえるのが容易でなかった。だから是非とも来て貰もらおうと云う時には、貞之助が電話口へ出て、内橋と云う古参の看護婦を呼

び出して、頼み込むようにするのであったが、それでも余程の重病でないと、此方の望む通りの時間には来てくれなかったり、すっぱかしたりすることがあるので、電話で容態を云う時に、実際よりは重おもそうかに駈かけ引ひき

をする必要があるのだった。その日も、待っているうちにとうとう十時が過ぎたので、

「榎田さん、今日はすっぱかしらしいで」

と云っていると、十一時ちよつと前になって、自動車の停る音がした。

「黄疸や、これは。間違いなし。」

「昨日ピフテキの大きいのん食べましてん」

「それが原因ですな。御馳走ちそうの食べ過ぎや。 蜆汁しじみじるを毎日飲むとい

いですな」

そんな風に、気さくな物云いをする人で、忙しいせいもあっていつも簡単に、さつと診察をして、さつと風のように出て行ってしまふのであった。

幸子はその明くる日から病室で臥たり起きたりして暮したが、あまり苦しくもない代りに、そうはかばかしく良くなりもしなかつた。一つには妙に蒸し暑い、降るのでも晴れるのでもない入梅前の天候が鬱陶うつとうしく、それだけでなくても体の持って行き場のないような、いやな陽気がつづくせいでもあるらしかったが、二三日風呂に這入はいらないので、汗臭くなつた寝間着を着換えて、蒸しタオルにアルコールを滴たらしたのを持って来てさせて、お春に背中をこすらせていると、そこへ悦子が上つて来て、

「お母ちゃん、その床の間に活いけてあるのん、何の花やのん」

と云つた。

「罌粟けしの花やわ」

「悦子その花気味悪いわ」

「何で」

「悦子それ見てたら、その花の中へ吸い込まれそうな氣イするねん」

「ほんに。」

成る程、子供は巧いことを云う。そう云えばこの間から、この病室にいと変に頭を圧えつけられるような、重苦しい気がするものが、つい眼の前に原因があるようでいて、それが何であるのやら突き止められなかったのを、ズバリと悦子が云ってくれたと云う感じで、いかにも、そう云われてみれば、この床の間の罌粟の花のせいが確かにある。この花は畑などに咲いているのを見るのは美しいが、こうして唯一輪、花器に活けられて床の間に据えられているのを見ると、何となく無気味で、

「吸い込まれそうな」と云う言葉がそっくり当て嵌まるのである。

「ほんに、あたしかて何や、そんな氣イしててんけど、大人には却ってそういう言葉出てけえへん」

雪子もそう云って感心しながら、取り敢えずその花を下げたあとへ、水盤に燕子花と姫百合とを配して持って来たが、幸子はそれさえ重苦しく感じて、いつそ何もなしにして貰い、せいせいするような歌の掛軸をでもと夫に頼んで、少し季節には早いけれども、香川景樹の嶺夕立、

夕立は愛宕の峰にかりけり清滝河ぞ今濁らん、の懐紙を床に掛けて貰った。

そんな病室のしつらいが幾分利き目があったのか、明くる日は余程気分が楽になったが、午後三時過ぎに玄關の呼鈴が鳴って来客らしい足音がするなと思っていると、お春が上つて来て、

「丹生「#ルビの「にう」は「谷崎潤一郎全集第6巻」(中央公論新社2015年6月10日初版発行)では「にゆう」「さんの奥さんでございます」と云う。

「下妻さんとか仰っしゃるお方と、相良さんとか仰っしゃるお方が御一緒にいらっしゃいます」

幸子は、丹生夫人には久しく会わないし、留守に二度も訪問を受けてい

るしするので、夫人だけなら病室へ上つて貰つてもよいと思つたのであるが、下妻夫人とはそう昵懇じっこんな仲でもないし、殊ことに相良と云うのはまだ聞いたこともない名なので、ちよつと当惑した。こう云う時に雪子が代りに出てくれるとよいのだけれども、彼女は決して、よくも知らない人などの相手は勤めないのであつた。でも、病気だと云つて玄関払いを食わせるのは、たびたび無駄むだ足を踏ふんでいる丹生夫人に気の毒でもあり、此方も無聊ぶりように苦しんでいる折柄でもあつたので、加減が悪くて臥たり起きたりしておりました失礼な恰好かっこうを致しておりますがと断らせて、兎も角も階下の応接間に通して置いて、大急ぎで鏡台の前にすわつたが、垢あかでよごれた顔の地肌じはだにおしろいを叩たたき込んで、小ざつぱりした単衣ひとえに着換えて降りて行く迄までには、それから三十分もかかつた。

「御紹介しますわ、「#」、」は「谷崎潤一郎全集第10巻」（中央公論新社2015年6月10日初版発行）では「。「」この方、相良さんの奥さん、

」

と、丹生夫人は、一と眼で洋行帰りと知れる、純亞米利加式アメリカの洋装の夫人を指しながら云つた。

「あたしの女学校時代のお友達よ。御主人は郵船会社にお勤めになつていらしつて、ついこの間まで、御夫婦でロスアンジェルズにいらつしやいましたの」

「初めまして、」

と云いながら、幸子は直ぐにこのお客達に面会したことを後悔した。病気でこんなやっに驚あれている時に、初対面の人に会うのはどうであろうかと思わないでもなかつたのだけれども、まさかその人と云うのが、こうまで凄すこいハイカラな夫人であろうとは考えてもいなかつたのであつた。

「あなた御病気？ 何処がお悪いの？」

「黄疸になつてんわ。見て御覽、 眼工黄色いでしょ」

「ほんと。とても黄色いわね」

「御気分がお悪いんじゃない？」

と、下妻夫人が聞いた。

「ええ。 でも今日は大分ええ方なんですの」

「済みませんわね、こんな時にお邪魔に上つて。丹生さん、あなたが気が利かないのよ、玄関で失礼すればよかつたのに」

「まあ、あたしのせいにするなんて人が悪いわ。いいえね、蒔岡さん、実は相良さんが昨日突然出ていらしつたんだけど、この方、あんまり関西を御存知ないのよ。それで私が専ら案内役を承つたんで、何か御覽になりたいものはつて云つたら、阪神間の代表的な奥さんに会わせるつて仰つしやるの」

「まあ、代表的云うて、どう云う意味の代表的？」

「そう云われると困るけれど、いろいろな意味の代表的よ。それであたし、考えちまつて、結局あなたに白羽の矢を立てたの」

「阿呆らしい」

「でもそう云う訳だから、見込まれたと思つて、少しぐらいの病氣我慢してでも相手をして下さらなくつちや。あ、それから、」

と、丹生夫人は、部屋へ這入りしなにピアノの椅子の上に置いた風呂敷包を解いて、素晴らしく大きい見事なトマトの詰まっている箱を二た重ね出した。

「これ、相良さんから、」

「まあ、何と云う立派な。何処でこんなトマトが出来るのでしょ」

「相良さんのお宅で作つていらつしやるのよ。なかなかそんなの売つてやしないわ」

「そうでツしやるなあ。 失礼でございますけれど、相良さんはどちらにお住まいでいらっしやいますの」

「北鎌倉なんですの。でもわたくし、去年帰って参りまして、その家に一二箇月おりましたただけなんであんすけど」

この、「………なんであんすけど」と云うところが、「ざあます」とも違ふ一種不思議な云い方で、幸子は自分には真似も出来ないが、こう云う癖を取るのが上手な妙子に聞かせたらと思うと、ひとり可笑しくてたまらなかつた。

「それでは何処ぞ、旅行でもなすつていらっしやいましたの」

「暫く入院しておりますして」

「まあ、何の御病氣？」

「神経衰弱のひどいのでして」

「相良さんのは贅沢病なのよ」

と、下妻夫人が引き取つて云つた。

「でも、聖路加病院ならいつ迄入院していらしたつていいでしょう」

「海が近いから涼しくつて、殊にこれから彼処はいいのよ。でも中央市場が近いもんだから、時々生臭い風が吹くの。それに本願寺の鐘が耳について。」

「本願寺はああ云う建物になりましたも、やっぱり鐘を鳴らすのでございましょうか」

「はあ、そうであんすの」

「何だかサイレンでも鳴らしそうだわね」

「それから教会の鐘も鳴るのよ」

「ああ」

と、下妻夫人は急に溜息をつきながら、

「あたし、聖路加病院の看護婦になろうかしら。ねえ、どうでしょう」
「それもいいかも知れないわね」

と、丹生夫人は軽く受け流したが、幸子は下妻夫人が、家庭的に面白くないことがあるような噂うわさを聞いていたので、今の言葉には意味深重なものがあるらしく感じた。

「そう云えば、黄疸わきて云う病氣、腋わきの下にお握りを挟はさんで置くといいんですってね」

「まあ」

と、相良夫人はライターを点じながら怪訝けげんそうに丹生夫人の顔を見て、
「あなた随分変なこと知ってるのねえ」

「両方の腋の下へお握りを入れて置くと、そのお握りが黄色くなるって云うわ」

「そのお握り、考えても汚いわね」

そう云ったのは下妻夫人であった。

「蒔岡さん、お握り入れていらつしやる？」

「いいえ、あたし、そんな話初耳やわ。蜆汁飲んだらええことは知ってますけど」

「どつちにしてもお金のかからない病氣ね」

と、相良夫人が云った。

幸子はこの三人がああ云う進物を持って来たりして、夕飯を呼ばれる心積りでいるらしいことは大凡おおよそ察しがついたけれども、これから夕飯の時刻までまだ二時間ぐらいあると思うと、最初の予想に反して、とてもその間を勤めるのが辛いつら気がした。彼女は相良夫人のような型の、気風から、態度から、物云いから、体のこなしから、何から何までパリパリの東京流の奥さんが、どうにも苦手なのであった。彼女も阪神間の奥さ

ん達の間では、いっばし東京弁が使える組なのであるが、こう云う夫人の前へ出ると、何となく気が引けて、と云うよりは、何か東京弁

と云うものが浅ましいように感じられて来て、故意に使うのを差控えたくなり、却^{かえ}つて土地の言葉を出すようにした。それに又、そう云えば丹生夫人までが、いつも幸子とは大阪弁で話す癖に、今日はお附合いのもりか完全な東京弁を使うので、まるで別の人のようで、打ち解ける気になれないのであった。成る程丹生夫人は、大阪っ児ではあるけれども、女学校が東京であつた関係上、東京人との交際が多いので、東京弁が上手なことに不思議はないものの、それでもこんなにまで堂に入っているとは、長い附合いの幸子にしても今日まで知らなかつたことで、今日の夫人はいつものおつとりとしたところ「#「おつとりとしたところ」は「谷崎潤一郎全集第6巻」(中央公論新社2015年9月10日初版発行)では「おつとりしたところ」(旧かな)(新かなでは「おつとりしたところ」となる)」がまるでなく、眼の使いよう、唇^{くちびる}の曲げよう、煙草を吸う時の人差指と中指の持つて行きよう、東京弁は先^まず表情やしぐさからあししなければ板に着かないのかも知れないが、何だか人柄^{にわか}が俄に悪くなったように思えた。

で、いつもなら少し気分のすぐれなくらいは辛抱しても人をそらさない幸子なのだけれども、今日ばかりは三人のしゃべるのを聞いていると苛^{いら}々^{いら}して来て、いやだと思つと一層体が大儀になり出して、つい顔色にも現れるので、

「ちよつと、丹生さん、悪いわ。もう失礼しましょうよ」

と、下妻夫人が気を利かしてそう云いながら立ち上つた時、強いてそれを止めようとしなひでしまった。

「#5字下げ」二十一「#「二十一」は中見出し」

幸子の黄疸は^{おうだん}大して重いと云うのでもなしに長いこと^{かいふく}恢復しないでいて、
どうやら直りかけたのは入梅に^{はい}這入ってからであつたが、或る日彼女は
本家の姉から見舞の電話を^{もら}貰つたついでに、意外な事を耳にした。と云
うのは、今度義兄が、東京の丸の内支店長に栄転するについて、近々本
家は上本町を引き払い、一家を挙げて東京へ移住しなければならなくなつ
た、と云うのである。

「ふうん、それ、いつやのん」

「兄さんは来月から、云うことやねん。そんで、取りあえず兄さんだけ
先に行つて、住む家捜しといて貰わなならんよつてに、あたし等の行く
のんは後になるけど、子供の学校の関係もあるさかい、どうでも八月一
杯には立つて行かんと、……」

姉はそう云ううちにもおろおろ声になりつつある様子が、電話でもよく
分るのであつた。

「そんな話、前からあつたん？」

「それがなあ、ほんまに突然やねんわ。兄さんかてなんにも聞いてえへ
なんだ云うてはるぐらいやねん」

「来月とはえらい急な話やないか。大阪の家はどないするのん」

「どないしてええか、まだちよつとも考えてえへん。何せ、東京
に行くようなこと、夢にも思うてえへなんだよつてに」

いつも電話で長話をする癖のある姉は、切りかけては又しゃべり出し、
しゃべり出しして、生れてからまだ一遍も離れたことのない大阪の土地
を、三十七と云う年になつて離れなければならぬ^{つら}辛さを、それから三
十分にも^{わた}亘つて綿々と訴えるのであつた。

姉に云わせると、親戚しんせきや夫の同僚の誰彼など皆御栄転でおめでたいと云つて祝つてくれる人達ばかりで、自分の心持を分つてくれる者が一人もない、たまに一端を洩もらしてみても、今時そんな旧弊なことをと、誰も一笑に附して真面目まじめに取り合つてくれない。ほんとうに、その人達の云う通り、これが遠い外国とか、交通不便な片田舎へ遣やられでもすることか、東京のまん中の丸の内へ勤務することになつて、勿体もったいなくも天子様のお膝元ひざもとへ移住すると云うのに、何が悲しいことがあるうと、自分でもそう思い、われとわが胸に云い含めているのだけれども、住み馴なれた大阪の土地に別れを告げると云うことが、たわいもなく悲しくて、涙さえ出て来る始末なので、子供達にまで可笑おかしがられているのだと云う。そう聞かされると、幸子も矢張可笑しくなつて来るのであるが、一面には姉のその心持が理解出来ないでもなかつた。姉と云う人は、早くから母の代りに父や妹たちの面倒を見た人で、父が亡なくなり、妹たちがようよう成人する頃には、既に婿むこを迎えて子持ちになつてい、夫と共に傾きかけた家運の挽回ばんかいに努めると云う風な廻めぐり合せになつたりして、四人の姉妹のうちで一番苦勞をしているけれども、又或る意味では、一番旧時代の教育を受けているだけに、昔の箱入娘の純な氣質を、今もそのまま持つているところがあつた。で、今時大阪の中流階級の夫人が、三十七歳にもなつていて一度も東京を見たことがないなど云うのは、不思議な話であるけれども、姉は事実東京へ行ったことがないのであつた。尤も大阪では、家庭の女が東京の女のように旅行などに出歩かないのが普通であつて、幸子以下の妹たちも、京都から東へはめつたに足を伸ばしたことがないのであるが、それでも学校の修学旅行その他の機会に、三人ながら一度か二度は東京へ行った経験を持つていた。然しかるに姉は、早くから家事を担当させられたので、旅行などに行く暇がなかつたせいもあるが、

一つには大阪程よい土地はないと云う風に考え、芝居は鴈治郎^{がんじろう}、料理は播半^{はりはん}かつるや、と云ったようなことで満足していて、見知らぬ土地へ出たがらなかつたところから、機会があつても妹達に譲り、自分は好んで留守番役に廻つていたのであつた。

そう云う姉が現在住んでいる上本町の家と云うのは、これも純大阪式の、高い塀^{へい}の門を潜^{くぐ}ると櫺子格子^{れんじこうし}の表つきの一構えがあつて、玄関の土間から裏口まで通り庭が突き抜けてい、わずかに中前裁^{なかせんざい}の鈍い明りがさしている昼も薄暗い室内に、つやつやと拭^ふき込んだ梅^{とが}の柱が底光りをしていようと云う、古風な作りであつた。幸子たちはこの家がいつから其処^{そこ}に建てられているのかを知らない。恐らく一二代前の先祖が建てて、別宅や隠居所に使つたり、分家や別家の家族に貸したりしていたらしいのであるが、父の晩年に、それまでは船場の店の奥に住んでいた彼女達が、住宅と店舗とを別にする時代の流行を追つて、その家に引き移るようになった。だから彼女達は、自分達が住んだ期間はそう長くはないのだけれども、幼年時代、親戚の者が住んでいた頃にも幾度か出入りをしたことがあるし、父が最期の息を引き取つたのも其処であつたしして、その家には特別な追憶を持つてている訳であつた。で、姉の大阪に対する郷土愛の中には、その家への執着が余程多くを占めているのであるうと幸子は察した。現に姉の昔気質^{かたぎ}を可笑しがる幸子でさえも、電話で突然その話を聞いた時に、何かしらはつと胸を衝^つかれる思いがしたのは、もうあの家へも行けなくなるのかと云うことに考え及んだからであつた。その癖平生は、あんな非衛生的な日あたりの悪い家はないとか、あんな家に住んでいる姉ちゃん達の気が知れないとか、あたし達は三日もいたら頭が重くなるとか、雪子や妙子達とよくそんな蔭口をきくのであるが、でも大阪の家が全然なくなると云うことは、幸子としても生れ故郷の根拠

を失つてしまふのであるから、一種云い難い淋しい心持がする道理であつた。いつたい、そう云えば、本家の義兄が先祖代々の家業を止めて銀行員になつてしまつた時以来、地方の支店へ転任を命ぜられると云う場合も有り得べきことになつたのであるから、姉がいつ何時今の家を離れるようなことが起るかも分らなかつた訳であるが、迂濶なことには、姉自身も、幸子以下の妹たちも、嘗てその可能性に想到したことがなかつた。尤も一度、八九年前に福岡の支店へ遣られそうになつたことがあつたが、その時は辰雄が、大阪の土地を去りにくい家庭の事情があることを訴え、月給は上らなくとも現在の地位に留つていたいと云う希望を述べて許して貰つたことがあり、銀行の方でも、それからは旧家の婿と云う辰雄の身分柄を考えてくれて、彼だけは転任させられないものと認めているらしい様子だつたので、はつきりそう云う諒解を得たのではなかつたけれども、何となく、永久に大阪に定住出来るように思い込んでいたのであつた。従つて、今度のことは彼女達には青天の霹靂であつたが、それは一つには、銀行の重役級に異動があつて方針が變つたせいでもあり、一つには、辰雄自身、今度は大阪を離れても地位の昇進を望む氣持になつていたせいでもあつた。と云うのは、辰雄にしても、同輩の者達がだんだん出世するのに自分だけ呉下の旧阿蒙でいるのは余り腑甲斐なくもあるし、その後子供たちの数も殖えて、生活費が嵩んで行く一方、經濟界の変動や何かで、養父の遺産と云うものが以前のようには頼りにならなくなつて来たからであつた。

幸子は、郷土を追われて行くように感じている姉の胸のうちもおしく、家にも名残が惜しまれるので、見舞をかねて早速訪ねようと思ひながら、差支えが出来て二三日ぐずぐずしていると、姉は又電話をかけて来て、いつ大阪へ歸つて来られることか分らないけれども、さしあたり

この家へは「音やん」の家族に留守番かたがた安い家賃で住んで貰うことにした、ついては、八月と云えば間もないことだから荷物の整理もして置かなければと、近頃は毎日土蔵の中で暮しているが、父が亡くなつてからこのかたの家財道具が溜たまっているので、何処どこから手をつけてよいのやら、いたずらに取り散らかした品物の山を眺ながめて茫然ぼうぜんとしている、きつとそれらの品物の中には、あたしには用がなくても幸子ちゃんが見れば欲しいものがあるだろうから、一度見に来てくれてはどうか、と云うような話であつた。「音やん」と云うのは金井音吉と云つて、父が昔浜寺の別荘で使つていた爺じいやで、今では悴せがれが嫁を貰つて南海の高嶋屋に勤めてい、気楽な身の上になつているのであるが、その後も始終出入りをしていた関係から、彼の一族に跡を託すことになつたのであるう。その、二度目の電話のあつた明るる日の午後、幸子は出かけたが、行つてみると、中前裁の向うに見える蔵の戸前が開いているので、

「姉ちゃん」

と、観音開きの所から声をかけながら這入はいつて行くと、姉は二階で、ただでさえ入梅のじめじめする日に、黴臭かびい匂においの中にうずくまりながら、姐あねさん被かぶりをして一生懸命片付け物に熱中していた。姉の前後左右には、春慶塗胡桃脚膳くるみあしぜん二十人前、吸物椀すいものわん二十人前、などと記した古ぼけた箱が五つ六つ積み重ねてある傍に、長持の蓋ふたが開けてあつて、中に一杯こまこました小箱の詰まつまっているのが見えていた。姉は丹念にそれらの箱の真田紐さなだひもを解いて、志野焼の菓子器とか、九谷くたにの「#」九谷の「は」谷崎潤一郎全集第二巻」（中央公論新社2015年9月10日初版発行）では「久谷の」「徳利とか、一つ一つ調べては元通りにして、持つて行く物、置いて行く物、処分してしまう物、と云う風に分けているのであるが、姉ちゃん、これ、いらんの？」

と、尋ねてみても、

「ふん、ふん」

と、上の空で返事をしてはせつせと手を動かしていた。幸子はふと、姉の取り出した箱の中から端溪たんけいの硯すずりが現れたのを見ると、父がそれを買わされた時の情景を思い浮かべた。父と云う人は書画骨董しよゝうこつどうには一向に眼の利きがなかった人で、何でも高価な物でさえあれば間違いがないと云う風に考える癖があり、時々馬鹿々々しい物を掴つかまされたらしいのであるが、この硯なども、お出入りの骨董屋が持って来て何百円とか云ったのを云われるままに買ったものなので、幸子は当時その場に居合わせて見ていたのであった。そして、子供心に、硯にもそんなに高いものがあるのかと思ひ、書家でも画家でもない父がそんなものを買って何にするのかと思つたことであつたが、それよりもなお馬鹿々々しく感じたのは、たしかこの硯と一緒に、印材にする「#「奚+佳」、第3水準¹・93・66」血石けいけつせきと云う石を二つ買った。父はそれを、後日懇意な医学博士で漢詩を作る人の還暦の祝に贈ろうとして、めでたい文句を選んで彫らせようとしたところ、失礼ながらこの石には交り物があつて彫る訳には行かないと、篆刻家てんこくかから返却して来たことがあつたが、高い金を出して求めた品なので、捨てることもならず、長い間何処かに突っ込んであつたのを、その後も折々見かけたものであつた。

「姉ちゃん、あの、「#「奚+佳」、第3水準¹・93・66」血石たら云う石があつたわなあ。」

「ふん、………」

「あれ、どないしたやる。」

「………」

「なあ、姉ちゃん」

姉は高台寺時絵手文庫と書いてある箱を膝の上に載せて、固くなった棧蓋の間に無理に指を挿し込みながら、それを開けることに気を取られていて、そんな言葉など耳にも這入らない様子であった。

幸子は姉のこう云うところを見せられるのは珍しくなかった。こう云う風に、人の云うことも聞えないくらい熱心に、寸分の隙もなく立ち働く姉を見れば、知らない者は誰でも感心して、何と云うシツカリした、甲斐々々しい主婦であろうと思うのであるが、ほんとうは、姉はそのようなシツカリ者ではないのであった。いつでも何か事件が起ると、最初にまず茫然としてしまって、放心したような状態になるが、暫くして、その期間が過ぎると、今度はまるで神憑りになったように働き出す。だから、そんなところを端から見ると、いかにも骨身を惜しまない活動的な世話女房のように思えるけれども、実はもう興奮しきっていて、何が何やら分らなくなり、ただ夢中で動いているだけなのであった。

「姉ちゃん云うたら可笑しいやないか。昨日の電話では泣き声出して、あたしが涙こぼして話しても誰も相手になつてくれへん、幸子ちゃん是非聞きに来てほしい云うてた癖に、今日行つてみたら、蔵の中へ這入つたきり、荷物の整理に夢中になつてて、『姉ちゃん』云うたかて返事もせえへんなんだわ」

彼女は夕方帰つて来ると、妹たちとそんな噂をしたが、
「そう云う人やわ、姉ちゃんは」
と、雪子も云った。

「それでも、見てて御覧。今に氣イ弛んだら、又泣き出すに違いないよつてに」

雪子は、それから中一日置いて、ちよつと来て貰いたいと姉から電話が

懸ったので、どんな様子か今度はあたしが見て来ようと云って出かけたが、一週間ばかり泊って来て、

「荷物の整理は大方済んだらしいねんけど、まだ神憑りに憑ってるわ」と云って笑った。雪子の話だと、姉が彼女を呼び寄せたのは、義兄の名古屋の実家まで夫婦で暇乞いに行くことになったので、彼女に留守を頼むためなのであったが、夫婦は雪子が行った翌日の土曜の午後立ち、日曜の夜おそく帰って来た。ところで、それから今日でもう五六日になるのだが、その間姉は何をしているかと云うと、毎日机に向ってお習字をしている。何のためのお習字かと云うと、名古屋で辰雄の実家を始めて親戚廻りをして、方々でもてなしに与ったについて、その家々へ礼状をしたためなければならぬのであるが、それが姉には大仕事なのである。殊に辰雄の嫂に当る人、こと 実家の兄の妻と云うのが、字の上手な婦人なので、それに負けないように書きましようと思うと、一層気が張るのであるう、いつも、名古屋の義姉に手紙を書こうと云う時は、字引や書翰文範を机の左右に置き、草書のくずし方一つでも「#」言+墟の「つくり」、う 第⁴水準²⁻⁸⁸⁻⁷⁴」にならぬように調べ、言葉づかいにも念を入れて、幾度か下書きをすると云う風にして、一本の手紙を一日がかりで書くのであるが、まして今度は五六本も書くのであるから、下書きだけでも容易に出来上らないで、お稽古に日を暮している。そして、雪子ちゃん、これでええやるか、何ぞ書き洩らしてえへんやるかと、雪子にまで下書きを見せて相談をする始末なので、今日雪子が出て来る時までは、やっと一通しか書き上っていないかった。と云うのである。

「何せ姉ちゃんは、重役さんの家へ挨拶に行く時かて、二三日も前から口上の言葉を口の中で暗誦して、独りごとにまで云うぐらいやさかいにな」

「それで、云うことがいな、東京へ行く云う話が余り突然やったんで、この間じゅうは悲しいて悲しいて涙が出てしようがなかったけど、もうちゃんと覚悟出来たよつてに、どないもあらへん。こないなつたら、一日も早う東京へ行つて、親類の人等びつくりさしてやらんならん、やて」

「ほんに、そんなことを生きがいにしてる人やねんわ」

そう云つて三人の妹たちは、ひとしきり姉を俎上そじょうに載せて笑い話をしたことであつた。

「#5字下げ」二十二「#「二十二」は中見出し」

辰雄は七月一日から丸の内の店に出勤するので、六月末に先に立つて行って、当分麻布あざぶの親戚の家に寄食しながら、手頃な借家を自分でも捜し、人にも捜して貰もらつていたが、大森に一軒見付かったから大体それにきめたと云う手紙が来た。で、家族は八月の地藏盆を済ましてから、廿九日の日曜の夜行で上京する、辰雄もその時は前日の土曜日からかけて大阪へ歸つて来、出発の当夜駅頭に於おいて改めて親戚知友の見送りを受ける、と云うことに極まつた。

姉の鶴子は八月に這入ると、親戚や夫の銀行関係の方面などへ、毎日一二軒ずつ挨拶廻りをしていたが、廻るべき所へ一通り廻つてしまつたあとで、最後に蘆屋あしやの分家、幸子の所へ、二三日泊りがけでやつて来た。これは形式張つた暇乞いとまごいとは違つて、この程じゅう引き揚げの準備万端のために眼の廻るような思いをし、所謂「神憑りかみがか」で働いた骨休めをかねて、久し振に姉妹四人が水入らずでくつろぎ、ゆつくりと関西に於ける名残の時を惜しもうと云うのであつた。それで、その間は何

も彼も忘れていたからと、音やんの女房に留守を頼み、身軽になって、末の三つになる女の児だけを子守に背負わせて連れて来たが、ほんとうに、四人がそう云う風に一つ屋根の下に集って、時間の制限もなく、呑気に語り暮すと云うことは、何年ぶりになるであろう。考えてみれば、鶴子は今までに蘆屋の幸子の家へ数えるほどしか来ていなかったし、来てもほんの一二時間、家事の相間を見て来るだけであつたし、幸子の方から上本町へ訪ねて行つても、子供が大勢纏わり着くので、おちおち話している暇もなかったと云うような訳で、少くともこの二人の姉妹は、お互に結婚生活をするようになってから、しんみり語り合う機会を持たなかつたと云つてもよいのであつた。だから今度は、姉の方も妹の方も、前からその日の来るのを楽しみにし、こう云う話もしよう、ああ云う話も聞いて貰おうと、娘時代から此方十何年来溜っている話題の数々を考えていたのであつたが、さて、その日になつて、泊りに来てみると、姉はこの間じゅうの、と云うよりは、十何年来の所帯の疲れが一遍に出た形で、何よりも按摩を呼んで貰い、昼間から二階の寢室に上つて、勝手に寝ころばして置いて貰うのを喜ぶと云つた有様であつた。幸子は、姉が神戸をよく知らないの、オリエンタルや南京町の支那料理屋などへも案内しようと思つていたのに、そんな所へ連れて行つてもらつたりは、此処で誰に気がねもなくのんびりと手足を伸ばしていたい、御馳走なんぞ食べさしてくれないでも、お茶漬で結構だから、と云つたりして、一つは炎暑のせいもあつたが、足かけ三日の間、何のこれと云う纏まつた話もせず、ただごろごろして過してしまつた。

鶴子が帰って行つてから数日過ぎて、いよいよ出発の日が二三日後にさし迫つた頃、亡くなつた父の妹に当る人で「富永の叔母ちゃん」と呼ばれている老女が、或る日ひよっこり訪ねて来た。幸子は、今まで一度も

見えたことのない叔母が、暑い日ざかりに大阪から出て来たのには何か用件があることと察し、その用件も大凡おおよそ分っているような気がしたが、矢張思った通り雪子と妙子の身柄に関しての問題であった。　つま

り、今までは本家が大阪だったから、二人の妹たちが彼方あちら此方こちらへ往いつたり来たりもよかつたけれども、これからそうは行かないとすると、もともと二人は本家に属する人なのであるから、これを機会に本家と一緒に東京へ行くべきであると思う、ついては、雪子は別に支度をする必要もないことであるから、明日にも上本町へ帰つて、家族と一緒に立って貰いたい、妙子の方は仕事を持っていることだから、跡始末のために多少おくれるのは仕方がないとして、一二箇月後にはこれも間違ひなく引き揚げて貰いたい、尤ももつと仕事その物を止めさせようと云うのではないから、東京へ来てからでも人形の製作に耽ふけることは差支えない、むしろ東京の方がああ云う仕事には便宜が多いくらいであろう。義兄も、折角世間に認められ出した仕事であるから、当人の製作態度が真面目まじめでさえあるなら、東京に於いて又仕事部屋を持つことを許してもよいと云っている、

と云うようなことなのであるが、実はこの問題は、先達せんだつて鶴子ちゃんに泊りに来ていた間に相談すべきであつただけけれども、休養させて貰いに来て、そう云う肩の凝る話を持ち出さなくなつたので、何も云わないでしまつたから、大儀ながら叔母ちゃんが行つて話してほしいと云うことで、今日は私が鶴子ちゃんの使で出向いて来た、と云うのであつた。この叔母の話は、本家が東京へ行くことになつたと聞いた日から、いずれは持ち上るであろうと予期されていたところのもので、目指された二人は、口に出して語り合いこそしなかつたけれども、内々うつつ少からず憂鬱ううつを感じていたのであつた。本来ならば、この間から鶴子がひとりで引越しの準備に忙殺されていることは分つていたのだから、雪子と妙子とは

云われなくても上本町へ戻って、姉の手伝いをすべきであったのに、二人ともなるべく本家へ行くことを避けていたのは、それでも雪子は呼び付けられて一週間ばかり泊って来たけれども、妙子の如きは急に製作が忙しくなつたと云い出して、仕事部屋に立て籠つたきり、蘆屋にさえ、先日姉が来ていた間にちよつと一晩戻つただけで殆ど寄り着かず、大阪の方へは全然帰らずじまいであつたのは、何よりもその問題に先手を打つて、自分達は関西に居残りたいのだと云う意志表示をしている積りなのであつた。が、叔母はなお言葉をついで、これは此処だけの話だが、どうして雪子ちゃんやこいさんは本家へ帰るのを厭がるのであろうか、辰雄さんとの折合がよくないのだとも聞いていられるけれども、辰雄さんは決して雪子ちゃん達の考えるような人ではないし、二人に対して何の悪感情も持つてはいない、ただ、名古屋の旧家に生れた人で、考え方が非常に律義なので、今度のような場合に、二人が本家へ附いて来ないで大阪に居残ると云うのは、世間体が悪く、むずかしく云えば兄としての体面に関すると思つていらしいので、もし云うことを聴いてくれないと、鶴子ちゃんが板挟みになつて苦しまなければならぬ、それで、この際幸子ちゃんへ折入つての頼みと云うのは、二人は幸子ちゃんの云うことなら聴くのだから、幸子ちゃんから巧い工合に説き付けて貰えないであらうか、誤解してくれては困るが、こう云つたからとて、二人が戻つて来ないのを幸子ちゃんのせいにしていのではない、いっぱし分別のある大人で、もう奥様と云われてもよい年頃になつていゝものが、厭だと云うのを、端から何と云つたつて、そう無造作に、子供を引き戻すような訳に行かないことは云う迄もないが、誰から云うよりも、幸子ちゃんから云つて貰うのが一番利き目がありそうだと云うことに相談がきまつたので、是非一つ承知させて貰いたい。そう云つて叔母は、

「今日は雪子ちゃんもこいさんもお内にいてやおまへんか」
と、昔ながらの船場言葉で云った。

「妙子はこの頃ずっと製作が忙しいで、めったに戻ってけえしえへん。……」

と、幸子も古めかしい云い方に釣り込まれながら、

「………雪子はおりやつけど、呼んで来まおか」

雪子はさつき、玄関に叔母の声が聞えた時から姿が見えないのであるが、多分二階の部屋へ逃げ込んで小さくなっているであろうと、幸子は察して、上って行ってみると、果して六畳の居間の、悦子の寝台に腰かけたまま俯向うつむいて考え込んでいる様子が、簾越すだれしに見えた。

「とうとう叔母ちゃんが来やはってんわ」

「………」

「どないする、雪子ちゃん、」

曆の上では秋に這入っているのだけれども、この二三日暑さがぶり返して、土用のうちと変らない熱気ねつこの籠こもった、風通しの悪い室内に、珍しく雪子はジヨウゼットのワンピースを着ていた。彼女は余りにも華奢きゃしゃな自分の体が洋服に似合わないことを知っているので、大概な暑さにはきちんと帯を締めているのであるが、一と夏に十日ぐらいは、どうにも辛抱しきれないでこう云う身なりをする日があった。と云っても、日中から夕方迄の間、家族の者達の前でだけで、貞之助にさえそう云う姿を見られることを厭いとうのであるが、それでも貞之助は、どうかした拍子に見ることがあると、今日は余程暑いんだなと、心づいた。そして、濃い紺色のジヨウゼットの下に肩胛骨けんこうこつの透いている、傷々いたいたしいほど瘦やせた、骨細な肩や腕の、ぞうつと寒気を催ほさせる肌はだの色の白さを見ると、俄にわかに汗が引ひつ込むような心地もして、当人は知らぬことだけれども、端の者には

確かに一種の清涼剤になる眺めだとも、思い思いした。

「明日にも帰って来て、皆と一緒に立つてほしい、云うてはるねんけど、」

雪子は黙って頂垂れたまま、裸体にされた日本人形のように両腕をだらしと側面に沿うて垂らして、寝台の下にころがっていた悦子の玩具の、フットボール用の大きなゴム毬に素足を載せながら、時々足の蹠が熱くなる毬を廻して別な所を踏んでいた。

「こいさんは？」

「こいさんは仕事の都合もあるやるさかい、今直ぐとは云わんけど、きつと後から引き揚げて来ないかん云うのんが、兄さんの意見やそうな」

「……………」

「叔母ちゃんは、そこはあんじょう云うてはるけど、結局あたしが雪子ちゃんを引き留めると見て、あたしを説き付けに来てはるねんわ。そやよつてに、気の毒やけど、あたしの立ち場も考えて貰わんと、……………」

幸子は雪子を可哀そうに思う一方に、ややともすると自分が雪子を家庭教師代りにしていると云う批難があるのに、反抗する気分も強かった。

本家の姉が大勢の子供をどうにか手一つで育てて行っているのに、分家の妹はたった一人の女の児の面倒をさえ見られないで、人手を借りている、と云う風に世間が取っているとすれば、雪子までが幾らかそんな風に思い、多少でも恩に着せる気持がもしあるとすれば、彼女は自分の内部にある母としての誇が傷つけられるように感じた。なるほど、今のところ雪子は役に立っていてくれるけれども、雪子がいなかったらと云って悦子の躰に困るような自分ではない積りであるし、早晚嫁に行く雪子であつてみれば、そう云う人を当てにしている訳もない。悦子も雪子がいなくなれば淋しがりはするであろうが、聞き分けのない児

ではないから、当座の寂寥せきりょうに堪えて行くことは明かで、雪子自身が案じているであろうように、泣いたり駄々だだを捏ねたりはしまい。自分は婚期におくれている妹を慰めてやりたいと思うだけで、義兄に楯たてを突いてまで引き留める気はないのであるから、本家から連れ戻しに来た以上、その命令に従うように本人に説きすすめるのが道でもあるし、又、兎も角も一度帰って貰って、雪子なしでも立派にやって行けるのだと云うところを、雪子にも、世間にも見て置いて貰う方がよいかも知れない。

「ここは一遍、富永の叔母ちゃんの顔を立てて、帰りいな」

雪子は無言で聞いているだけであつたが、幸子の意志がそうはつきりしているからには、それに聴従する外はないと観念しているのが、様子で分るような打ち萎しおれた姿勢をしていた。

「東京へ行つたかて、行ききり云うことあれへんさかい、………それ、いつか陣場さんの持つて来やはつた話なあ、あれかて、あのままになつてるけど、もし見合いでもすることになったら、是非帰つて来て貰わんならんし、そうでのうても、きっとええ折があるさかいにな」

「ふん」

「そんなら、雪子ちゃんは明日間違いのう帰ります云うてもええなあ」

「ふん」

「そう極まつたら、機嫌きげん直して叔母ちゃんに会いなさい」

雪子が顔のこしらえをして、ジヨウゼツじょうせつを浴衣ゆかたに着換えている間、幸子は先に応接間へ降りて行つて云つた。

「雪子今降りて来やつけど、よう分つてくれて、もうちゃんと承知してやすさかいに、叔母ちゃんからは何もその話せんと置いとくれやす」

「そうですか、それであたしも使に來た甲斐かいがごわしたわ」

すっかり気をよくした叔母は、そのうちに貞之助も戻つて来やすさかい

に、ゆっくり晩の御飯でもたべて行つとくれやすとすすめるのを、いえ、それよりは早う鶴子ちゃんを安心さしてやりましょう、こいさんに会えんでえらい惜しゅうごわっけど、幸子ちゃんからあんじよう話しといっておくれやすと云つて、夕方、少し片蔭の出来るのを待つて歸つて行つたが、明くる日の午後には雪子も、幸子や悦子にほんの当座の挨拶あいさつをして、ちよつと行つて来る、と云う形で出て行つた。荷物なども、蘆屋に滞留中は三人の姉妹が必要に応じて晴れ着を融通し合うことにしていたので、自分の物と云つては、着換えの羅衣ろいものや下着類が二三枚来ていただけなのであるが、それに読みさしの小説一冊を縮緬ちぢめんの風呂敷に小さく包んだのをお春が持つて、阪急の駅まで送つて来たところは、二三日の旅に出るほどにも見えない身軽さであつた。悦子も、昨日富永の叔母が見えた時はシュトルツ氏方へ遊びに行つていて、夜になつてから始めて事柄を聞かされたのであつたが、暫く手伝いに行くだけで直き戻つて来るように話されたせいもあるかして、幸子の思つていた通り、そんなに跡を追う様子もなく済んでしまつた。

出立の日は、辰雄夫婦と、十四歳を頭に六人の子供と、雪子と、九人の家族が、女中一人と子守一人を連れ、総勢十一人で、大阪駅を午後八時半発の列車に乗り込むことになつた。幸子は見送りに行くべきだけれども、自分が行けば尚更なおさら姉ちゃんなせが泣き出したりして見つともない光景を演じるであらうからと、わざと遠慮して、貞之助が一人で行つたが、待合室には早くから受付が出、百人近くも集つた見送り人の中には先代の恩顧を受けた芸人、新町や北の新地の女将や老妓らうぎも交つていたりして、さすがに昔日の威勢はなくとも、旧い家柄ふるを誇る一家が故郷の土地を引き払うだけのものはあつた。妙子は、とうとう逃げ廻つて最後の日まで本家へ顔を出さずにいて、漸せうじやうく出立の間際まぎわに駅頭へ駈かけつけ、混雑に紛

れて義兄にも姉にも簡単な挨拶をしたただけであつたが、帰りしなに、プラットフォームから改札口へ歩いて行く途中で、

「えらい失礼ですけど、あんさん蒔岡はんの娘ちゃんですか」

と、うしろから呼びかけられて、振り返つて見ると、それは舞の名手として有名な新町のお栄と云う老妓であつた。

「そうです、わたし妙子です」

「妙子さん云やはんのん、何番目の娘ちゃんでしたかいな」

「一番下の妹です」

「まあ、こいさんでつか。えらい大きうなつてでしたなあ、もう女学校卒業しやはりましたんでつか」

「はあ、……」

と云つたきり、妙子は笑いに紛らしたが、まだ女学校を出たばかりの二十歳前の小娘のように見られることは毎度なので、こう云う場合の胡麻ごま化かし方には馴なれていた。それにしても、父の全盛時代にこの老妓、

事実その時分からもう好い加減な老妓であつたこの人が、船場の家へもよく挨拶にやつて来て、家族の者達に「お栄さんお栄さん」と親しまれたのは、自分がやつと十になるかならぬ頃、かれこれ十六七年前のことなので、それから数えれば今の自分がそんな若さでないことは大凡おおよそ見当が付きそうなものだのに、と思うと心中可笑おかしくもあつたが、今夜は又特別に娘つばい型の帽子や服を着けて来たせいでもあることは、自分にはよく分つていた。

「こいさん幾つになりはりましたん」

「もうそない若いことあれしまへんで。……」

「わたし覚えてはりますか」

「はあ、知つてます、お栄さんでっしゃる。……あの時分から、ちよつ

とも変つてはれしまへんなあ」

「変らんことがおまつかないな、ええお婆ちゃんになりましたがな。

こいさんは何で東京へ行かはれしまへんのん」

「当分蘆屋の中姉ちゃんここに置いて貰うてまんねん」

「そうでつか。本家の兄さんや姉さんが行つてしまやはつて、えらい淋しいことですか」

妙子は改札口を出てお栄に別れて、二三歩行きかけたところで、

「妙子さんじゃありませんか」

と、又一人の紳士に呼び止められた。

「どうも暫く。僕関原です。この度は蒔岡君がご栄転で、

関原と云うのは辰雄の大学時代の同窓で、高麗橋筋にある三菱系の某会

社に勤めていた関係から、辰雄が蒔岡家へ養子に來た当座は、まだ独身

で始終遊びに來、鶴子の妹達とも馴染んでいたものであったが、その後

結婚し、倫敦支店勤務を命ぜられて五六年英国に滞在し、つい二三箇月

前に大阪の本社へ呼び戻されたばかりの男で、妙子は彼が最近帰朝した

噂は聞いていたけれども、会うのは矢張八九年ぶりであつた。

「僕さつきからこいさんに気がついていたんですが、

と、関原は直ぐ「妙子さん」を止めて昔の「こいさん」と云う呼び方に

戻りながら、

「随分久し振りですなあ、最後にお目に懸つてから何年になるか

なあ」

「このたびは又、御無事に帰朝なさいましてお目出とうございます」

「はあ、有難う。実は今、プラットフォームでちらとお見かけして、た

しかにこいさんに違いないと思つたんですが、それにしてはあんまりお

若く見えたもんだから、………」

「うふ、ふ、ふ」

と、妙子はさつきと同じように胡麻化し笑いをした。

「それじゃ、蒔岡君と一緒に汽車に乗っておられたのが、雪子ちゃんですな」

「はあ」

「僕はつい挨拶をしそびれちまったんだが、………お二人とも実にお若いことですか。こんなことを云っちゃ失礼ですが、僕は彼方にいる時分にも、始終船場時代のことを思い出しましてね。今度帰って来る時も、もう雪子ちゃんは勿論もちろんとして、多分こいさんも結婚してしまわれただろう、そしていい奥さんやお母さんになっておられるだろうと思っていたんですが、蒔岡君からまだお二人ともお嬢さんでいらっしゃると聞いた時は、何だかこう、自分が五六年も日本を離れていたと云うことが「#「言+壺のつくり」、第⁴水準²⁻⁸⁸⁻⁷⁴」のような、長い夢を見ていたような、………こんなことを云っちゃ悪いかも知れませんが、不思議な気がしましてね。ところが今夜お目に懸って見ると、雪子ちゃんにしてもこいさんにしても、ちっとも歳を取っておられないのには二度びっくりして、自分の眼を疑ったくらいなんですよ」

「うふ、ふ、ふ」

「いや、ほんとうに、お世辞じゃありませんよ。なるほど、こんなにお若くっちゃ、まだ結婚なさらないのも一向不思議はないですな。………」
関原は感心したように妙子の帽子の頂てっぺん辺から靴くつの先まで見上げ見下ろしながら、

「そう云えば、幸子ちゃんは今夜は？」

「中姉ちゃんは遠慮しましてん、別ぎわれ際に姉妹で泣いたりしたら可笑しい云うて、」

「ああ、そう云う訳ですか。さつき姉さんは僕に挨拶される時にも、眼に一杯涙を溜めておられました。今でもなかなかいい所がありますな」

「東京へ行くのんに泣く者があるやるか云うて、笑われてますねん」

「いや、そんなことはありませんよ。僕なんか久し振で日本女性のああ云うところを見せられて、懐しい気がしますよ。……こいさんは関西に居残りですか」

「はあ、わたしはちょっと……此方に用事がありますよつてに、……」

「ふん、そうそう、こいさんは芸術家なんだそうですね。僕聞きましたよ。偉いもんですな」

「阿呆らしい。そんなん、英吉利仕込みと違えますか」

妙子は関原がウイスキー好きであったことを思い出して、その晩も多少這入っているであろうと察した。そして、如何です、ちよつとその辺でお茶でも、……と云うのを手際よく外して、阪急の方へ急いだ。

「#5字下げ」二十三「#」二十三「は中見出し」

「#ここから1字下げ」

拝啓

あれからとうとう忙しくて毎日手紙を書く暇がなく御無沙汰してしまいました。お赦し下さいませ

出発の夜、姉ちゃんは汽車が走り出すと泳いでいた涙が一時に溢れて寝台の帷の蔭へ顔を隠しました。それから間もなく秀雄ちゃんが高い熱を出してお腹が痛いと言出し夜中に何遍も便所へ通う騒ぎで姉ちゃんも私も殆ど一睡もしてませんでした。それよりもつと困ったことは、あてに

していた大森の借家が急に家主の都合で解約になりました。そのことは出発の前日に東京からそう云って来て分つたのですが今更仕様がなないので立って来たのです。そして兎も角麻布の種田さんの所に泊めて戴き、今でもまだ此処にいるのですが、突然のことで十一人もの大勢が御厄介になっっているのですから種田さんのお家の御迷惑はどんなでしようかお察し下さい。秀雄ちゃんは早速お医者さんに来て貰いましたら大腸加答児だそうで昨日あたりからやつと快くなつて来ました。家の方はいるいろの人に頼み八方へ手分けして大急ぎで捜して貰い漸く渋谷の道玄坂に一軒見つかりました。借家普請の新建ちで二階が三間に階下が四間前裁も何もない家で家賃五十五円と云うのですから、まだ見ていないのですけれども狭さは想像されます。そんな所へこの大家内が住めそうにも思われませんが、種田様の御迷惑を思い、そのうち又変るにしても一先ずそこを借りることにきめ今度の日曜に移ることになりました。渋谷区大和田町と云う所で、電話も来月は引けるそうです。兄さんが丸ビルへ通うにも輝雄ちゃんが今度の中学へ通うにもわりに便利で健康にはよろしい土地だそうです

先は取敢えず御報まで

貞之助兄上、悦ちゃんこいさんによろしく

九月八日「#地から2字上げ」雪子「#「雪子」は底本には記載なし。

「谷崎潤一郎全集第6巻」（中央公論新社2015年9月10日初版発行）に
よる」

幸子姉上様

「#ここから2字下げ」

今朝来の風の肌触り東京はもうすっかり秋ですがそちらは如何ですか、
何卒御身御大切に

「#ここで字下げ終わり」

幸子がこの手紙を受け取った日の朝は、関西方面も一夜のうちに秋の空気が感じられる爽かさに変わっていた。悦子が学校へ出て行ったあとで、彼女は貞之助とさし向いに食堂の椅子にかけながら、我が艦上機が汕頭と潮州を空襲した記事を読んでいると、台所で沸かしている珈琲の匂が際立って香ばしく匂って来るのに心づいて、突然、

「秋やなあ、」

と、新聞の面から顔を上げて、貞之助に云った。

「今朝は珈琲が特別強う匂うて来るように思いなされへん？」

「ふん、……」

貞之助は貞之助で、新聞をひろげたまま読む方に気を取られていたが、そこへお春が珈琲と一緒に雪子の手紙を盆の端に載せて這入って来たのであった。

もう立つてから十日以上になるのに、と思っていた矢先だったので、幸子は急いで封を切ったが、用の相間に慌しく書いたらしい筆の跡を見て、姉や雪子がどんなに忙しい目に遭っているかを直ちに察しることが出来た。麻布の種田と云うのは、義兄の直ぐ上の兄に当る人で、商工省の官吏であることは知っているけれども、幸子などは十何年も前姉の結婚式の時にたった一度会ったきりで、顔もよく覚えていないくらいなので、姉にしても恐らくそんなに度々は会っていないであろう。義兄が先月来寄食していた関係から、取り敢えず其処に転がり込んだのであろうが、義兄は身内だからよいとして、姉や雪子は、知らぬ土地へ来て、名古屋側の親戚の、而も目上の人の家に厄介になっっているのでは、どんなにか窮屈なことであろう。そこへ持って来て病人が出来、医者を呼んだりす

るのでは尚更なおよさらである。

「その手紙、雪子ちゃんか」

と、貞之助はやつと新聞から眼を離して、珈琲茶碗ぢやわんに手をかけながら云った。

「何でちよつとも手紙来えへんのんか思うてたら、えらいことになってるねんわ」

「何やねん、一体」

「まあ、これ、読んで御覧。」

と、幸子は三葉の書簡箋しょかんせんを夫の方へ向けた。

それから五六日過ぎて、おくれ馳はせながら先日の見送りの礼と、転任の挨拶あいさつとを兼ねた活版刷りの住所変更通知が届いたが、雪子からはそれき

り何の便りもなかった。ただ、移転の手伝いや見舞い旁 「#二の字点、

「-2-22」土曜日の晩から上京した音やんの悴せがれの庄吉が、月曜の朝帰って

来、蘆屋へも東京の様子を話すように云い付けられたからと、その日の

うちに訪ねて来た。そして、昨日の日曜に無事引越しを済ませたこと、

東京の借家普請と云うものは大阪のよりは遙はるかに粗末で、殊ことに建具が悪

く、襖ふすまなどがとても安手でひどいこと、畳敷「#「畳敷」は「谷崎潤一

郎全集第16巻」（中央公論新社2015年の月10日初版発行）では「畳敷」

は階下が二畳、四畳半、四畳半、六畳、二階が八畳、四畳半、三畳だけ

れども、江戸間えどまであるから八畳が京間の六畳、六畳が京間の四畳半にし

か使えないこと、そう云う訳で甚はなだみすばらしい住居だけれども、取柄

を云えば、新建ちであるから感じが明るく、南向きで日あたりがよく、

上本町の薄暗い家から見れば衛生的であること、自分の家に庭はなくて

も隣近所に立派な邸宅や庭園が多く、閑静で上品な土地柄であること、

それでいて道玄坂まで出れば繁華な商店街があり、映画館なども幾軒か

あるので、子供達は何事も物珍しいと見え、却^{かえ}つて東京へ来たことを喜んでいられるらしいこと、秀雄も全快して今週から附近の小学校へ通^はう筈^{はず}であること、等々を語った。

「雪子ちゃんはどうないしてます」

「元気にしてはりましたで。秀坊^{ほん}がお腹^{こわ}壊しやはった時かて、看護婦よかよつぽど雪子娘^{とう}さんの方が看病の仕方心得てはる云うて、御寮^{しりょう}人様感心してはりました」

「あの人は悦子が病氣の時かてほんまにようしてくれますよつてに、きつと姉ちゃんも助かつたやろう思うてましてん」

「ただお氣の毒^{どく}な人は、何せそんな家ですさかい、娘^{とう}さんのおいでになる部屋があれしません。今のとこ二階の四畳半^{ぼんぼん}を坊^{ぼん}々の勉強^{べんきやう}部屋に使やはったり、娘さんの寢室^{ねしつ}に使やはったりしてはりますねんもん」「#」「してはりますねんもん」は「谷崎潤一郎全集第^二巻」(中央公論新社2015年の月^二日初版発行)では「したはりますねんもん」。旦那^{だんな}さんも、早^{はや}うもつと広いとこへ変つて、雪子ちゃんの部屋をきめてやらなんだから可^{かわい}哀^{あい}そうや、云うてはりますねん。……」

この庄吉と云うのは口数の多い方なので、それからちよつと声をひそめて付け加えた。

「旦那さんは、雪子娘さんがお戻りになつたんでえらい喜んではりますけど、今度は逃げられんようにせんならん思うてはりますねんな。そら、娘さんに対しては、一生懸命^{しやうけんめい}氣に触らんよう^{よう}にしておいでになつて、機^{きげ}嫌^{けん}取^とつてはりますのんが、よう分りまつせ」

そんなことで、幸子は大体東京の模様も想像出来るような氣がしたが、雪子からは矢張^{やじやう}何の音沙汰^{おとさた}もなかつた。尤^{もつと}も雪子も姉ほどではないが手紙を書くことを大層^{おほげ}がる方なので、いつもの筆不精^{ふしせい}をきめているのであ

るうし、それに、定まった自分の部屋と云うものがないのでは、落ち着いて物を書くことも出来ないであろうと思えもした。幸子は考えて、「悦ちゃん、一遍姉ちゃんに書いて出してお見」と云って、妙子の人形の絵端書に簡単な文句を綴つづって出させたが、それに対しても返事がなかった。

二十日過ぎになって、月見の晩に、

「今夜寄せ書きして出したらどうや」

と、貞之助が云い出したので、皆賛成して、夕食後、階下の日本間のお月見の供え物のしてある縁側の近くに、貞之助、幸子、悦子、妙子の四人が集ってお春に墨を磨すらせながら巻紙を展のべた。そして貞之助が歌を書き、幸子と悦子が俳句のようなものを書いたが、妙子はそう云うものは不得手なので、松の間に月が懸かつている景色をさつと墨絵風に写生した。

「#1字下げ」むら雲はやり過すりつつ待ちうけて月を捉とらふる庭の松が枝

「#地から2字上げ」貞之助

「#1字下げ」名月や一つ足らざる影法師「#地から2字上げ」幸子

「#1字下げ」姉ちゃんは東京で見るけふの月「#地から2字上げ」悦子

このあとが妙子の墨絵なのであるが、幸子の「名月や」は最初「一つ欠けたる」となってい、悦子の「姉ちゃんは」は「東京で見る月夜哉かな」となっていたのを、貞之助がこう直したのであった。最後に、

「お春どんも書き」

と云われると、お春も直ぐ筆を執つて案外すらすと、

「#1字下げ」名月や雲の中から見え初めぬ「#地から2字上げ」はると、ひどく小さな拙つたない字で書いた。それから幸子が月に供えた芒すすきを一本抜いて、尾花を剪きつて巻紙の間へ入れた。

「#5字下げ」二十四「#「二十四」は中見出し」

この寄せ書きに対しては間もなく幸子宛さちこあてに返事が来、あれを繰り返し身に沁しみみてうれしく読んだこと、自分もこの間の十五夜には二階の窓からひとり月を眺ながめていたこと、あれを読んで、去年蘆屋の家で月見をした時の情景を昨日のことのように思い浮かべたこと、などを感傷的に書いて来たが、それから又暫しばしく音信が跡絶とたえた。

雪子がいなくなつてからは、お春が悦子の寝台の下に寝床を敷いて寝るように極めてあつたが、半月ばかり立つと、悦子はお春を嫌きらい出してお花に代らせ、又半月ばかり立つと、お花を嫌い出して下働きのお秋に代らせた。悦子が子供に似合わず寝つきが悪く、寝入る前に二三分興奮しておしやべりをする癖があることは前に書いたが、女中達だとこの二三分間の相手が勤まらず、いつも悦子より先に眠ってしまうのが、彼女を苛いらだ立たせる原因であるらしく、苛立てば苛立つほど尚なお寝られなくなつて、夜中に荒々しく廊下を駈かけて来て、両親の寝室の襖ふすまをばたツと開けて、

「お母ちゃん、悦子ちよつとも寝られへんねん」

と、怒鳴り込みながら泣き出したり、

「お春^{はあ}どん癩^{しゃく}やわ。グウグウ軒^{いびき}かいて寝てるねん。嫌い！ 大嫌い！ 悦子お春どん殺してやるわ！」

と云ったりした。

「悦ちゃん、そないに興奮したら却^{かえ}って寝られへんねんで。無理に寝よう寝よう思わんと、寝られなんたら寝られんでも構^かめへん、思うて御覽」

「そうかて、今寝とかなんだら朝方しんどうて起きられへんねん。……又学校遅刻してしまいうやないの。……」

「何やねん、そんな声出して！ 静かにしなさい！」

と、幸子は叱^{しか}りつけて、寝台へ一緒に這入^{はい}ってやって寝かしつけるようにしたが、矢張^{やじやう}どうしても寝つかないで「寝られへん寝られへん」と訴えては泣き出すので、幸子も癩^{かん}が立^たって来て、つい又叱^{しか}りつける。すると一層^{いっしやう}大声で喚^{わめ}き出す。女中はそんな騒^{さわ}ぎが起^おっているのも知らずに寝ている。と云うようなことが始終^{しじやう}であった。

そう云えば、この間から何かと心が慌^{あわただ}しくて気が付きながら注射^{しゆしやう}をすることを怠^たっていたが、今年も亦^{また}「B足らん」の季節^{きせつ}になり、家族の誰もが幾分^{いくぶん}か脚^か氣^けに罹^かっているらしいので、悦子もそのせいではないか知らん。

幸子はそう思^{おも}って悦子の心臓部^{しんざうぶ}に手をあてて見、脈^{みやく}を取^とって見ると、かすかに動悸^{どうき}が打^うっているので、翌日^{あした}、痛^{いた}がるのを無理^{むり}に掴^{つか}まえてベタキシンの注射^{しゆしやう}をしてやった。そして、隔日^{かくにち}に四五回^{しよごかい}続^{つづ}けた結果^{けつこ}、動悸^{どうき}は静^{しず}まって脚^かは軽^{かろ}くなり、体のしんどいは多少^{たうしやう}直^{ただ}った様子^{ようす}であったが、不眠症^{ふみんしやう}の方はますますひどくな^なって行^いった。診^みて貰^{もら}う程^{ほど}でもあるまいと思^{おも}って榎田^{えの}医師^{いし}に電話^{でんわ}で相談^{さうだん}して、アダリンを一箇^{いっかん}寝^ねしな^しに飲^のますようにしてみ^みたが、一箇^{いっかん}ではな^なかなか利^きいて来^きないし、量^{りやう}を殖^殖やすと利^きき過^あぎて寝坊^{ねぼう}をする。朝^あ、余^{あま}りよく寝^ねているので、寝^ねかして置^おいてや

ると、眼が覚めるや否や枕元の時計を見てわツと泣き出して、今日も遅刻した、こんなに遅くては極まりが悪くて学校へ行かれないと云って喚く。そんならと云って、遅刻しないように起してやると、悦子ちよつとも昨夜寝られてえへんねんと、怒って布団を頭からすっぽり被って寝てしまい、眼が覚めると又遅刻したと云って泣き出す。女中達に対する愛憎の変化が激しくなつて、嫌い出すと極端な言葉を使い、「殺す」とか「殺してやる」とか云うことを屢「#二の字点、1-2-22」口走る。それに、発育盛りの年頃にしては前から食慾が旺盛でないのであるが、その傾向が募つて来て、毎食一二膳しか食べず、お数も、塩昆布とか、高野豆腐とか、老人の食べるような物を好み、お茶漬にして無理に飯を流し込む。「鈴」と云う牝猫を可愛がつて、食事の時は脚下に置いている。いろいろ物を与えるのであるが、少し脂っこい物は自分が食べるよりも大半鈴に遣つてしまふ。そのくせ潔癖が異常に強くて、食事の間に、猫が触つたとか、蠅が止つたとか、給仕人の袖が触つたとか云つて、二三度は箸に熱湯をかけさせるので、給仕する者は心得て、番茶の熱いのを土瓶に入れて食事の初めから食卓の上に用意して置く。蠅を恐れることは非常で、食物に止つた場合は勿論、近くへ飛んで来たのを見ただけでも、どうも止つたらしいと云つて食べなかつたり、確かに今の蠅は止まらなかつただろうかと、周囲の者に執拗く尋ねたりする。そして、箸から落したものは、洗いたてのテーブルクロスの上に落ちたのでも、汚がつて食べない。或る時幸子は、悦子を連れて水道路へ散歩に出て、路端に蛆の沸いた鼠の屍骸が転がっているのを見たことがあつたが、その傍を通り過ぎて凡そ一二丁も行った時分に、

「お母ちゃん、……………」

と、悦子が、さも恐ろしいことを聞くように擦り寄つて来ながら小声で

云った。

「……………悦子あの鼠の屍骸蹈めへんなんだ？……………着物に蛆が着いてえへん？」

幸子はぎよつとして、悦子の眼つきを窺わずにはいられなかった。なぜと云って、二人はその屍骸を避けるようにして二三間離れた所を通ったので、どう考えても、それを蹈んだと思い誤まる筈はなかったからである。

まだ小学校の二年生である少女でも、神経衰弱に罹ることが有り得るのだろうか。それまでは大して心配もせず、口先で叱ってばかりいた幸子も、この鼠の一件から事の重大さに心づいて、翌日櫛田医師に来て貰った。櫛田医師の意見では、小児の神経衰弱も決して珍しいものではないから、恐らく悦ちゃんのもそうであろう、案じるほどのことはないと思うけれども、専門の医師に紹介するからその先生に診てお貰いなさい、私は脚気の手当だけをして置く、専門医は西宮の辻博士がよいから、今日中にも往診してくれるように電話で頼んで置きましょう、と云うことであつたが、夕刻に辻博士が見え、診察後暫く悦子と問答などをして、神経衰弱と云う診断を下した。そして、先ず脚気を完全に治療する必要があるので、投薬に依つてでも食慾を促進させ、偏食を直すようにすること、学校は、気分次第にして遅刻や早退をさせるのはよいが、全然学業を廃して転地療養等をするのは不可であること、なぜなら、精神が或る一つの事に向けられていると、却っているいろな妄想を描く余裕がなくなるからであること、興奮させてはならないこと、分らないことを云つても頭から叱り付けず、諄々と説いて聴かせるようにすること、等々を注意して帰った。

雪子のいなくなった結果が、こう云う形を取って悦子の上に現れて来た

ものであるとは、必ずしも断定し難いし、幸子としてはそんな風には考
えたくなかったが、扱い方にはほとほと手を焼いて、どうしたらよいのか
分らず、泣きたくなるような折に出遣うと、雪子であつたら、こんな場
合に辛抱強く云い聴かせて納得させてしまうのに、と思うことは再三で
あつた。外のことと違い、事情が事情であるから、そう云つてやれば本
家の方でも一時雪子を貸してくれることに異存はなかるうし、又貸して
くれと云わないでも、雪子に宛てて悦子の状態を知らしてさえやれば、
義兄の許可を待つ迄もなく飛んで帰つて来ることは明かであつたが、二
た月立つか立たないのにもう降参して助け船を呼ぶと云われるのは、意
地とか張りとか云うものを余り持ち合せない幸子でも、気がさすかして、
まあもう少し様子を見て、……まあ、自分で何とかやつて行けるうち
は、……と、思い思い日を送つていた。が、貞之助の方はと云うと、
これは雪子に来て貰うことには寧ろ反対であつた。いつたい、食事中に
何度も箸を熱湯消毒したり、テーブルクロスの上に落ちた物をさえ食
べてはならないとするような躰かたは幸子や雪子の流儀で、こうなる前
から彼女達自身実行していたことなので、貞之助は、ああ云う遣り方は
よろしくない、あれでは神経質な繊弱な子供が出来てしまうから、あの
習慣は矯正してほしい、そのためには先ず大人達がああ云うことをする
のを止め、多少冒険でも蠅の止つたものぐらい食べて見せて、こうして
もめつたに病気に罹らないと云うところを實際に示すのがよい、お前達
は消毒ばかりやかましく云つて、規律と云うことを重んじないのは間違つ
ている、あんなことより規則正しい生活をさせることが第一であると、
いつも幸子に注意したものであつたが、貞之助の主張はなかなか行われ
なかつた。幸子の方には、夫のように頑健で抵抗力の強い人は自分達の
ような華奢で病気に罹り易い者の気持が分らないのだと云う考があり、

貞之助の方には、箆に黴菌ばいきんが着いたぐらいで病気に感染するようなことは千に一つの場合である、それを恐れてああ云う遣り方をしていたのではますます抵抗力が弱くなると云う考があり、一方が、女の子は規律よりも優雅と云うことが大切だと云えば、一方が、いや、その考え方が旧式なのだ、家庭でも食事や遊戯の時間などを規則正しくしなければならぬ、あんなならしのないことをさせて置いてはいけなさと云い、一方が、あなたは衛生思想のない野蛮人だと云えば、一方が、お前達のする消毒は少しも合理的に行われていない、箆に湯やお茶をかけたぐらいで病菌が死にもしまいし、食物がお前達の前に運ばれる迄に、どう云う所でどう云う不潔物に触れて来るか知れたものではない、お前達は欧米流の衛生思想を穿はき違えている、いつかの露西亞ロシア人達などは生牡蠣なまがきを平気で食べたではないか、と云ったりした。

本来貞之助は、孰方どちらかと云えば放任主義で、殊ことに女の児の躰は母親の方針に一任して置けばよいと云う建前であつたが、近頃は、目下の支那事変の発展次第では婦人が銃後の任務に服するような時期も有り得べく、そんな場合を考えると、これからの女子は剛健に育て置かなければ物の役に立たないと云うことを、憂慮するようになっていた。と、或る時貞之助は、悦子がお花と飯事ままごと遊びをするのに、注射の針の使いふるしたのを持って来て、苾しんが藁わらで出来ている西洋人形の腕に注射しているのを、ふつと見かけたことがあつた。そして、何と云う不健康な厭いやな遊戯をしていることかと思ひ、これなども例の衛生教育の余毒であると感じて、それからは一層、何とかして是正しなければいけないと云うことを始終考えていたのであつた。ただ、肝腎かんじんの悦子が誰よりも雪子の云うことを信じるようになっており、その雪子の遣り方を妻が支持しているのでは、下手な干渉をすると家庭に風波を起すだけで終つてしまう危険があるの

で、機会を待っていたのであるが、雪子がいなくなったことは、そう云う点からよいことであるように貞之助は見ていた。と云うのは、従来貞之助も雪子の境遇には密かに同情していたので、娘の躰ひそと云うことも大切ではあるが、雪子が受ける精神的打撃も考えてやらねばならず、彼女を儼ひがませないように、「邪魔にされた」と云う感じを持たせないように、悦子から遠ざけてしまうことは容易でなかったのに、それが今度は自然に解決した訳で、雪子さえいなくなれば、妻の方は扱い易い、と云う腹があつた。で、雪子ちゃんを気の毒に思う心持は僕もお前と同様なのだから、雪子ちゃん自身が帰って来たいと云うなら拒みはしないが、悦子のために呼び戻すと云うことは賛成しかねる、なるほど、悦子を扱うことは馴れているから、来て貰えばさしあたり助かるには違いないが、僕に云わせると、悦子が今のような神経衰弱になつた遠い原因は、お前や雪子ちゃんの躰方にあるのだ、だから、一時の困難を忍んでも、これを機会に雪子ちゃんと云うものの影響を悦子から除いてしまう方がよい、そして、徐々に、逆らわないようにしながら、躰方を変えて行くこうではないか、それには此処当分の間雪子ちゃんが帰って来てくれない方が都合がよい、と、そう云つて幸子を制していた。

十一月になつて、貞之助は仕事のことと二三日東京へ行く用が出来たので、始めて渋谷の本家を訪ねたが、子供達はもうすっかり新しい生活に馴なれ、東京弁も上手になり、家庭と学校とで言葉の使い分けをする程になつていて、辰雄夫婦も雪子も機嫌きげんよくしてい、狭い所で窮屈だけれども是非泊つて行つてくれると、皆がすすめるのであつた。しかし全く狭い家なので、貞之助は築地つぎじの方に宿を取つて、義理に一晚だけ泊つたが、その明くる朝、辰雄や上の子供達が出かけてしまい、雪子が二階を片づけに行っている隙すきに、

「雪子ちゃんも落ち着いてるようで、ええ塩梅あんばいですな」と、鶴子に云うと、

「それがなあ、あないしてたらどうもないように見えますけど、と云うような話になった。鶴子の云うのには、此方こちらに移って来た当座は雪子ちゃんも気持よく家事の手伝いをしてくれ、子供達の面倒を見てくれたのであるが、今でも決して態度が変わったと云う訳ではないが、ただ時々、二階の四畳半に引き籠こもったきり降りて来ないことがある、あまり姿を見せないなので、上って行ってみると、輝雄の机の前にすわり、頬杖ほおづえをついてじっと考え込んでいることもあり、しくしく泣いていることもある、それが、初めのうちは十日に一遍ぐらいであつたが、近頃だんだん頻ひん繁ぱんになりつつあつて、そんな日には階下へ降りて来ても半日ぐらい物も云わない、どうかすると、人前でも涙を隠し切れなくて、ぼたりと落すことがある、辰雄も私も、雪子ちゃんの取扱いには随分気を付けているつもりなので、別に何も機嫌を損ずる原因があるとは思われなから、結局これは、関西の生活が恋しい、まあ云ってみれば、郷愁病のようなものであると断ずるより外はない、それで、少しは気が紛れるようにと思つて、お茶やお習字のお稽古けいこを、又続けてみたらと云うのだけれども、そんなことも一向取り合つてくれない、鶴子はそう云つて、富永の叔母ちゃんの口利きもあつて雪子ちゃんが素直に帰つて来てくれたのを、私達はほんとうに喜んでいただけれども、それが雪子ちゃんに取つて、まさかこんなにも辛いつら、厭なことであるとは思つていなかった、此処にいることが泣くほど辛いのであるなら、又私達の仕様もあるが、いったい私達は何でそれほど雪子ちゃんから嫌きらわれなければならぬのであろうか、と、それを云う時、鶴子は自分も泣きながら、しかし恨めしくもあるけれども、雪子ちゃんの思い詰め

ている様子があまり一途いちずなので、可哀そうにもいじらしくもなつて来て、それほど関西がよいのなら、いつそ好きなようにさしてやるうかと、考えることもある、蘆屋へ預けきりにしてしまふことは辰雄が許すまいけれども、今のところ手狭なのだから、広い家へ移るまででも行っているとか、でなければ、せめて十日か一週間行かしてやったら、それだけでも慰められ、元気づけられはしないであろうか、ま、そう云つても、何か適当な口実がなくては工合が悪いが、兎に角雪子ちゃんが今のような有様では、私は気の毒で見えられない、あれでは当人より端はたの者が遣り切れない、と云うのであつた。

これは一場の座談として語られたので、貞之助は、そんな風では兄さんも姉さんもお困りであろう、それには幸子あたりにも責任があることで、申訳がない、と云つたような挨拶をしただけで、悦子の病氣のことなどは勿論云いはしなかつた。が、帰つて来てから、幸子との間に東京の話が出、雪子の近状を尋ねられてみると、事実を知らせるより仕方がなかつたので、鶴子が云つたことを何一つ隠さずに告げた。

「僕かて、雪子ちゃんがそないにまで東京を厭がつてるとは思おもてえへんなんだ」

「結局、兄さんと一緒にいてるのんが厭なんでツしやるか」

「それもあるかも知れん」

「そうか、悦子に会いたいのんか、」

「それやこれや、いろいろやるうな。もともと雪子ちゃん云う人が、東京の水に合わん人や」

幸子は、雪子が幼い時分から辛抱強く、どんなにつらいことがあつても口には出さないで唯ただめそめそと泣いてばかりいたことを思い出したが、今も机に凭よつて忍び泣きをしている妹の姿が、眼に見えるような気がし

た。

「#5字下げ」二十五「#二十五」は中見出し」

悦子の神経衰弱は、鎮静剤として折々臭剥を飲ませる外には食餌療法に依っていたが、脂っこい物でも支那料理なら好んで食べることが分つて、栄養分を取るようにしたのと、冬になって脚気が直つたのと、学校の先生が学課の方を気にしないで健康を取り戻すように諭してくれたのと、いろいろのことが効を奏して案じた程でもなく良くなって行つた。で、助け船を呼ぶ必要はなくなつてしまつた訳であつたが、幸子は東京の話を知りながらと云うもの、どうしても一度雪子の顔を見ないことには気が治まらなくなつていた。

今になつて考えると、あの、富永の叔母が掛合いに来た日、自分はあまりにも雪子に冷酷な仕打をし過ぎた、自分はああ云う風に命令的に、追いついてるやうにすべきではなかつた、妙子には二三箇月の猶予が与えられたのだから、雪子にも多少の時日を与えるやうに斡旋するくらいの情味があつてもよかつたのに、ゆっくり名残を惜しむだけの余裕も作つてやらなかつた、それと云うのも、雪子がいなくてもやつて行けると云う意地づ張りが、あの日に限つて妙に強く萌して来て、ついあんな態度に出たのであつたが、それでも雪子が一言半句の不平も云わずに大人しく納得したのが、思い出すとしおらしくて、不憫でならない。………そして幸子は、雪子がわりに機嫌よく、ほんの当座の旅行のような身支度で気軽に出て行つたのは、直きに口実を拵えて呼んで上げるからと、あの時気休めに云つてやつた言葉を、案外あてにしていたのであることが、今になると分つて来たのであつた。雪子にしてみれば、幸子のその言葉

があつたればこそ、それを頼みにして、一往本家の気が済むように東京まで附いて来たのであるのに、その後幸子の方で何の工作もしてくれていない様子がないとしたら、………而も、附いて来たのは自分だけで、妙子の身柄はそう問題にされず、今以て関西に居残つて暮しているとしたら、………自分一人馬鹿を見た、欺だまされたと思うのも尤もつとかも知れない。………

幸子は、姉がそんな気持になつていいるなら、本家の方は大して面倒はないとして、夫が何と云うか、今暫しばく見合せた方がよいと云うか、それとも、もう四箇月も立つたことだし、悦子も落ち着いて来たのであるから、十日や半月ぐらいの間なら呼び戻しても差支えないと云うか、まあ、春にでもなつたら夫に相談を持ちかけてみようと思つていいると、折よく正月の十日頃に、あれ以来何とも云つて来なかつた陣場夫人から手紙が来た。そして、去年写真をお送りした人の件はどうなつたでしょうか、あの時のお話では、急には返事が出来なけれども暫く待つてくれたらと云うことでしたので、お待ちしていたのですが、妹さんにお心持がありにならないのでしょうか、もし御縁がないものなら、お手数ながらあの写真をお返し下されたく、又いくらかでもお心持が動いておられるなら、今からでも遅くはないのです、先方さんのことは、その後お調べになつたかどうか知れませんが、大体あの写真の裏に本人さんが自分で書いておられる通りの経歴で、その外には申し上げる程のことはない、ただ一つあれに書き洩もらしたのは、自分には財産と云うものは何も無い、全く俸給に依つて暮しているのです、それはお含みを願いたいとのことです、そう云う訳で、妹さんには御不足であろうと存じますけれども、先方さんはお宅のことをすっかり調べておられ、妹さんの御器量なども何ど処こかでお見かけしたらしくて、待つのはいくらでも待つから、是非あの

方をと、浜田氏を通じて熱心に申し越しておられるのです、何にしても、一遍お会い下さると、私も浜田氏に対して顔が立つのですが、……と、そんな文面なのであったが、幸子には渡りに船であった。で、いつぞやの野村巳之吉みのきちと云う人の写真に、陣場夫人のこの手紙も添えて、こう云う話があるのですが如何ですか、陣場さんは兎に角見合いをさせることを急いでおられるようですが、雪子ちゃんはこの前のこともあり、調べを先にしてからでなければ会うのは厭いやだと云うでしょうから、宜よろしかつたら私達の手で大至急調べますけれども、先ず兄さんや姉さんの考を聞かして下さい、と云ってやると、五六日過ぎて、姉にしては珍しいことに長い返事の手紙が来た。

「#ここから1字下げ」

拝復

おくれ馳はせながら新年おめでとう存じます、そちら皆々様お揃そろいよきお正月をお迎えなされし由およろこび申します。此方こちらは初めての土地にて何やら一向それらしい気分も味あじわわず松の内もあわただしく過してしまいました、東京と云うところは冬が取り分けしのぎにくいと聞いていました、たが一日として名物のから風が吹かぬ日はなく寒に入ってから寒さはまことに生れて始めてのことにて今朝などは手拭てぬぐいが凍って棒のようになりバリバリ音がするのですが、こんなことは大阪では経験がありません、東京も旧市内だといくらかしのぎよいそうですがこの辺は高台で郊外に近いので一層寒いのだそうです、お蔭で家内中順々に風邪を引き女中たちまで倒れる始末ですが私と雪子ちゃんだけはどうやら鼻風邪の程度で済んでいます、しかしこちらは大阪に比べると埃ほこが少く空気の清潔なことは事実にて、その証拠には着物の裾すそがよごれません、此方で十日ばか

り一つ着物を着通していましたが、わりに汚れませんでした。兄さんのワイシャツが大阪では三日で汚れますが、此方では四日間は大丈夫です

さて雪子ちゃんの縁談のこと、いつもそちらでいるいろ心配して下さってほんとうに有難く思います、あの手紙と写真を早速兄さんに見せ相談しましたが、兄さんも近頃は心境が変化して前のようなうるさいことは云わず、大体あなた方に任せる気持になつていようです、ただ農学士で四十何歳になり水産技師をしているのではこの先そう月給が上る見込はないし、出世の道は止つていようように思う、それで財産もなしに暮して行くのだと余り楽ではないだらうけれども、本人が承知なら兄さんは反対はしない、見合いも、本人の気が進んでいるならいつでも適當と思つ時機にさせてくれて差支えないとのことですので、ついでには、もっとよく調べた上で見合いをさせるのが順序ですけれども、先方さんがそう云う希望なら、委くわしい調べは後廻しにして見合いを急ぐことにしたら如何いかでしょうか、多分貞之助さんから聞いてくれたことと思いますが、雪子ちゃんには私も手を焼いているので、何とか機会を拵えて一遍そちらへ行かしてやりたいと考えていたところなのです、昨日雪子ちゃんにも一寸話してみました、現金なもので、関西へ行けるとなつたら見合いのことでも直ぐ承知しました、そして今朝から急に元気づいてニコニコ出したのには、全く何と云う人だらうと呆あきれてしまいました

そちらで大体日取りをきめて下されば此方はいつでも立たせてやります、見合いが済んだら四五日で帰ると云うことにしておきますけれども、多少のところは延びても構いません、兄さんにはよいように云っておきます

東京へ来てからまだ一遍も手紙を上げなかつたので書き出したら長くな

りました、今も背中へ水を浴びせられるような寒さで筆を持つ手も凍えるようです、蘆屋は暖かいでしょうけれども何卒くれぐれも風邪を引かないようにして下さい

貞之助さんによるしく

「#ここから2字下げ」

正月十八日「#地から2字上げ」鶴子

「#ここから4字下げ」

幸子様

「#ここで字下げ終わり」

東京をよく知らない幸子には、渋谷とか道玄坂附近とか云われても実感が湧いて来ないので、山手電車の窓から見た覚えのある郊外方面の町々、

谷や、丘陵や、雑木林の多い入り組んだ地形の間に断続している家々

の遠景、そのうしろにひろがっている、見るからに寒々とした冴えた空

の色など、大阪辺とはまるで違う環境を思い浮かべて、勝手な想像をす

るより外はなかったが、「背中に水を浴びせられるような」とか「筆を

持つ手も凍える」とか云う文句を読むにつけ、万事に旧式な本家では、

大阪時代から冬も殆ど煖炉を使っていなかったことを思い出した。上本

町の家では客間に電熱が引いてあって、電気ストーブを取り付けるよう

にはなっていたけれども、実際に使うのは稀に来客のあった場合、それ

もよくよく寒い日に限り、平素は火鉢だけだったので、幸子は正月年始

に行つて姉と対坐していると、いつも「背中に水を浴びせられるような」

気持を味わい、風邪を引いて帰って来ることがしばしばあった。姉に云

わせると、大阪の家庭で煖房と云うことがそろそろ普及し出したのは大

正の末期頃で、万事に贅沢であった父でさえも、居間に始めて瓦斯スト

ーブを引いたのは亡くなる前の年ぐらいであったが、それも、引いては見たものの上気せると云つて実際にはあまり使わなかった、自分達は皆、幼少の頃からどんな寒い日でも火鉢で育つて来たのだと云うのであるが、そして確かにそう云われてみれば、幸子なども、貞之助と結婚して数年後、今の蘆屋の家に移つた時から煖炉を使い出したのであるが、一度味を覚えてからは、とてもそれなしでは冬をしのぐことが出来なくなり、子供の時分に火鉢一つでしのいで来たことが、今になると不思議にさえ感じられた。然るに姉は東京へ行ってまで旧弊を押し通しているらしいので、芯が丈夫な雪子だからこそ堪えているものの、自分であつたら肺炎か何かを起しているであらうと思へた。

見合いの日取り決定については、陣場夫人と野村氏の間、浜田氏と云うものが介在していて、連絡を取るのに手間が懸つたが、なるべく節分前にと云う先方の希望が明かになつたので、直ぐに雪子を寄越すように云つてやつたのが、月のうちの二十九日であつた。幸子は又、この前電話で失敗したことを思い出して、夫に頼んで離れの書齋へ大急ぎで卓上電話を引いて貰いなどしたが、三十日の午後、行き違いに姉から端書が来て、下の子供が二人一遍に流感になり、四つになる女の児梅子の方は肺炎になりそうなので大騒ぎをしている、看護婦を雇う筈だけれども狭くて寝かすところもないし、雪子ちゃんなら本職よりも頼りになることが秀雄の時で分つているから、看護婦は止めにした、そう云う訳だから勝手ながら陣場さんをお願いして今暫く待つて貰うようにしてほしい、と云つて来、又追つかけて、梅子がとうとう肺炎になつた旨を知らせて来た。幸子は、これは十日や一週間では埒があきそうもないと見たので、陣場夫人に事情を云つて一先ず延期を申し込んだが、先方はいつ迄でも待つと云うのであるから心配はないようなものの、何かと云うと看護婦代り

に使われたりして損な役にばかり廻される雪子に、ひとしお不憫が懸るのであった。

ところで、見合いが延びた間に、かねて手配をして置いた調査の方が扱つて、興信所から報告書を送つて来たが、それに依ると、野村氏の地位は高等官三等で、年俸三千六百円程度、外に賞与が若干とあるから、月に割ると三百五十円前後になる。父の代には郷里姫路で旅館業をしていたらしいのであるが、現在郷里には家屋敷が残っていない。親戚は、実妹が東京の太田某と云う薬剤師に嫁いでいる外に、姫路に叔父が二人あつて、一人は骨董商を営みつつ茶道の宗匠をしてい、一人は登記所の司法書士をしている。その外に、関西電車の社長浜田文吉が本人の従兄に當つてい、これが唯一の誇るに足る親戚でもあれば庇護者でもある。(そしてこれが又、陣場夫人の所謂「恩人」であつて、夫人の夫は昔浜田家の玄関番をしつつ通学させて貰つたと云う恩義があるのだそうである) 報告書の記載は大体以上で尽きているが、なお調査の結果、昭和十年に亡くなつた先妻の病気が本人の記す通り流感に間違いのないこと、二人の子供の死んだ原因も決して遺伝性の病気ではなかつたこと、等々も判明した。次に本人の性行や人物について、貞之助が二三の方面へ手蔓を求めて問い合せたところ、他にこれと云う欠点はないけれども一つ奇癖のあることが知れた、と云うのは、兵庫県庁に勤務する同僚の話に依ると、野村氏は時々、極めて突然、全く無意味と云つてもよい取り止めのない独語を洩らす癖がある、それは大概傍に聞いている者がいないと思う時に洩らすらしいのであるが、本人は聞かれていないつもりでも誰かに聞かれていることが度々あつて、今では同僚の間で知らぬ者は一人もない、亡くなつた細君や子供もその癖をよく知っていて、おかしなことを云うお父さんだと云つて笑つたものであると云う。一例を挙げると、或る時

同僚の一人が役所の廁かわやの仕切りの中でしゃがんでいると、隣の仕切りに人が這入はいつて来たけはいがして、やがて、「もしもし、あなたは野村さんですか」と、二度繰り返して問う声が聞えた。その同僚はもう少しで「いえ、僕は何某です」と答えようとしたが、「あなたは野村さんですか」と云うその声が野村氏自身の声に紛れもないので、例のひとりごとだなど心づいた、と同時に、きつと野村氏は隣の仕切りに人がいることを知らないのに違いないと思うと、気の毒になってじつと息をつめていた。が、なかなか時間が懸かるので、待ちくたびれて先に出してしまったが、顔は見られないで済んだ。恐らく野村氏も隣から人が出たことを知って「しまった」とは思ったであろうが、その人が誰であったか彼には分らずじまいに終り、後で何事もなかったように平気で執務していたと云う。そんな工合で、ひとりごとと云っても一向たわいのない、罪のないことを云うのだけれども、それだけになお聞いた者は出し抜けで可笑おかしく感じる。そして、ついうっかりと出てしまうのであるらしいけれども、全然無意識に洩らすのでないことは、人がいると云わないようにしているのでも明かであつて、誰かに聞かれそうな心配のない時は驚くほど大声を発することがあり、たまたまそんな時に物蔭に居合せた者は、発狂したのではないかと思つてびっくりさせられる、と云うのである。で、まあ、格別人に迷惑や不愉快を与えるような癖ではないし、それがためにどうこうと云う程のものではないかも知れないが、何もそう云う人を選びよりに選つて夫に持たないでもよいには違いないし、それより何より、写真の顔が四十六歳と云う年よりも非常に老ふけていて、爺じじむさく、五十歳以上の老人に見えると云うこと、これが幸子の考では最大の難点で、雪子の気に入らないことはほぼ確実と云つてよく、第一回の見合いに於いて落第する運命にあるのは先ず明かであつた。そう云う訳で今度

はあまり張合いのない縁談だけれども、それが雪子を呼び寄せ表面の口実であつてみれば、兎も角も「見合い」をさせるだけはさせなければ、と、云つたようなところが幸子たち夫婦の正直な気持であつた。そして、どうせ纏まりそうもないものなら、厭なことは知らせる迄もないので、奇癖の件は雪子に云わないで置くことに相談をきめていた。

「#5字下げ」二十六「#二十六」は中見出し」

ケフカモメデタツ」ユキコ

悦子は学校から帰つて来ると、洋間に雛人形を飾るべく、母とお春に手伝つて貰つて雛段を組み立てていたが、そこへ待たれていたこの電報が届けられた。

一般に、関西の雛の節句は一と月おくれにする習慣で、本当はまだ一箇月早いのだけれども、四五日前に近日出て来ると云う雪子からの便りがあつた時、たまたま妙子が悦子のために菊五郎の道成寺の人形を拵えて来たので、幸子がふつと思いついて、

「悦ちゃん、この人形と一緒にお雛さん飾ろう。」

と、云いだしたのであつた。

「お雛さんかて、姉ちゃんを歓迎したいやるさかいにな」

「何で、お母ちゃん。お雛さんは来月やないの」

「まだ桃の花が咲いてへんよ」

と、妙子も云つた。

「季節外れにお雛さん出しといたら、女の子が縁遠くなる云うやないの」「そうそう、子供の時分に、いつもお母ちゃんがそない云やはつて、お節句が過ぎたら慌ててお雛さん直しやはつたわなあ。けど、早う飾るの

んは構^かめへんねん。後まで飾つとくのんが悪いのやわ」

「ふうん、そうか、そら知らなんだ」

「よう覚えとき。物識りのこいさんにも似合わんやないか」

この家の雛と云うのは、昔悦子の初節句の時に京都の丸平^{まるへい}で作らせたもので、蘆屋^{あしや}へ移つて来てからは、結局家族たちの団樂^{だんらん}の部屋に使われて
いる階下の応接間が、洋間ではあるけれどもそれを飾るのに一番適當だ
と云うことになって、毎年そこに雛段が組み立てられるのであった。で、
幸子は半年ぶりに戻つて来る雪子を喜ばすために、この行事を一箇月早
めて、新曆の節句から一と月おくれの節句まで、一箇月の期間飾つて置
こう、多分雪子もその一箇月間ぐらひは滞在することになるであろう、
と云い出したのであったが、その提案が容^いれられて、新曆の三月三日と
云う今日、飾り付けが始められたところなのであった。

「ほうら、悦ちゃん、お母ちゃんの云うのんが当たつたやろ」

「ほんに、やっぱり今日やってんなあ」

「姉ちゃんお節句にやって来やはつた。お雛さんと一緒やわ」

「縁起がよろしゅうございますわ」

と、お春が云つた。

「今度はお嫁に行くやるか」

「悦ちゃん、姉ちゃんの前でそれ云わんときなさいや」

「ふん、ふん、分つてるよ、そんなこと」

「ええか、お春どんも氣イ付けなんだら、この前みたいなことになるで」

「は、分つとります」

「どうせ知れることやさかい、蔭^{かげ}で云うのんは構^かめへんけど、……」

「は、……」

「こいちゃんに電話かけんでもええ？」

と、悦子が興奮した声で云った。

「かけて参りましょか」

「悦ちゃん、自分でかけなさい」

「ふん」

と云うと、悦子は電話口へ飛んで行って松濤アパートを呼び出した。

「……………ふん、そうやねん、やっぱり今日やってん。……………こいちゃん

早う帰って来なさい。……………『つばめ』やないねん、『かもめ』やねん。…

……………大阪までお春が迎えに行くねん。……………」

幸子は内裏雛の女雛の頭へ瓔珞の附いた金冠を着せながら、悦子の甲高い声がひびいて来るのを聞いていたが、

「悦ちゃん」

と、電話口の方へ怒鳴った。

「こいさんになあ、暇やったら姉ちゃん迎えに行つたげ、云いな

さい」

「あのなあ、お母ちゃんがなあ、こいちゃん暇やったら迎えに行つたげなさいて。……………ふん、ふん、……………大阪九時頃やわ。……………こいちゃん行く？……………そんならお春どん行かんかてええなあ？……………」

妙子には、大阪駅まで雪子を迎えに行つてやれと云う幸子の言葉の意味が、よく分っている筈であった。去年、富永の叔母が雪子を連れ戻しに来た時の話では、二三箇月後には妙子も東京へ呼び寄せると云うことであつたのに、上京以来本家が引き続きごたごたして、なかなかそれどころではないので、ついあれなりになつており、お蔭で妙子は前より一層自由気儘な境遇に置かれていたのであつたが、それだけに、雪子に貧乏圖を抽かせて自分ひとり巧いことをしているような、済まない気がしていたので、義理にも出迎えぐらいしなければならぬ訳であつた。

「お父さんにもかけとこか」

「お父さんはええやないか、もう帰って来やはるわ」

夕方帰宅した貞之助も、あれから半年過ぎた今日となつては、ひどく雪子をなつかしいものに感じ、一時にもせよ、彼女に戻つて貰いたくないと思つたりしたことで、自分を責める気持にさえなつていた。そして、着いたら直ぐに風呂へ這入れるようにしておけとか、夕飯は汽車の食堂で済まして来るだろうとか、きつと寝しなにもう一度何か食べるだろうとか、細かいことに気を遣つて、彼女の好物の白葡萄酒を二三本も出して来させて、手ずから罎の埃を払い、年数を調べなどした。悦子は、明日ゆつくり会えるのだからと、皆がすすめて、どうしても待つていと云つて聴かないのを、漸く九時半頃にお春に云いつけて二階へ連れて行かせたが、間もなく表門のベルが鳴つて、犬が其方へ走つて行く足音を聞くと、

「あ、姉ちゃんや」

と云つて、又降りて来てしまった。

「お帰り」

「お帰りなさいませ」

「只今」

ジヨニーが喜んで跳び着こうとするのを、「これッ」と云つて制しながら玄関の土間に立つた雪子は、衣裳靴を持たせられて後から這入つて来た妙子の、近頃殊に張り切つてゐる血色に比べると、汽車の疲れで、顔に著しい變れを見せていた。

「お土産何処に這入つてるのん」

と、悦子は早くも自分で靴を開けて、中を調べ始めたが、一束の千代紙とハンカチの箱とを直ぐ見つけ出した。

「悦ちゃんこの頃ハンカチの蒐集しゅうしゅうしてるのんやてなあ」

「ふん、有難う」

「まだもう一つあるわ、その下の方見て御覧。」

「あつた、あつた、これやる」

そう云つて悦子は、銀座の阿波屋あわやの包紙に包んである箱を取り出したが、中から出て来たのは紅いエナメルの草履であつた。

「まあ、ええこと。穿はき物は矢張東京やわなあ。」

と、幸子もそれを手に取つて見ながら、

「これ、大事に直しといて、来月お花見に穿はきなさいや」

「ふん。いろいろ有難う、姉ちゃん」

「何や、悦子のお待ち兼ねはお土産の方やつたんか」

「さあ、もうええやる、これみんな二階へ持つて行きなさい」

「今夜は姉ちゃんと一緒やで」

「分つてる、分つてる」

と、幸子が云つた。

「姉ちゃん今からお風呂やさかい、先へ行つてお春どんと寝てなさい」

「早う来てね、姉ちゃん、」

雪子が風呂から上つたのは十二時近くであつたが、それからひとしきり、貞之助と三人の姉妹とは応接間の煖炉だんろにはちばちはねる薪まきの音を聞きながら、久しぶりに顔を揃そろえてチーズと白葡萄酒の小卓を囲んだ。

「温ぬくいわなあ、此方こっちは。 さつき蘆屋の駅へ下りた時にやつぱり東

京と違うなあ思うたわ」

「もう関西はお水取が始まつてるさかいにな」

「そない違つか知らん」

「えらい違いやわ。第一空気の肌触はだぬきわりが、こない柔かいことあれへん。」

何せ名物のからッ風がひどうて、 二三日前にも、高嶋屋へ買い物に行つて、歸りに外濠線そとぼりの通りへ出たら、さつと風が吹いて来て持つてる包つつみ吹き飛ばしてしもうて、それ追いかけて取るうとすると、ころころと何処迄でも転ころこんで行くよつてに、なかなか取られへんねん。そのうちに着物の裾すそが又さつとまくれそうになるのんで、片っ方の手でそれも押えてんならんし、ほんに、東京のからッ風云うたら 「#「言+墟のつくり」、第⁴水準 2-88-74」やない思うたわ」

「しかし、僕は去年渋谷で厄介やっかいになつた時にそう思うたが、子供云うもんは何でああ早う土地の言葉を覚えるねんやる。 あの時十一月

やよつてに、まだ東京へ行つて二三箇月しか立つてえへんのんに、本家の子達はもうちゃんと東京弁使うてるねんが。それも小さい子供ほど上手やねんで」

「もう姉ちゃんの年になつたら、あかんやるなあ」
と、幸子が云つた。

「そらあかん。第一姉ちゃんは覚えよう云う氣ないねんもん。この間もバスの中で大阪弁で話しかけるさかいに、外のお客がみんな姉ちゃんの顔見るのんで難儀したけど、姉ちゃん云うたら、ああ云うところはえらい心臓やねんな。顔見られても平気で話してるねんわ。そしたら、それ聞いて、『大阪弁も悪くないもんだね』云うてる人もあつたけど」

雪子は、「大阪弁も悪くないもんだね」と云う東京弁のアクセントを上手に真似まねた。

「年増の女はみんな心臓や。僕の知ってる北の芸者で、これはもう四十以上の老妓おらひやねんけど、東京へ行つて電車に乗ったら、わざと大阪弁で『降りまッせえ』と大きな声で云うてやりまんねん、そしたらきつと停めてくれはります云う女があるねんが」

「輝雄ちゃんなんか、お母ちゃんは大阪弁を使うさかいに一緒に歩くの
ん御免や云うてますねん」

「子供はそうかも知れんな」

「姉ちゃんは旅にでも出てる気持やるか」

と、妙子が云った。

「ふん、大阪と違うて、どんなことしても誰も何とも云うもんはあれへ
んし、気楽なところもあるらしいねんわ。それに東京と云うところは、女が
めいめい個性を賣んで、流行云うもんに囚とらわれんと、何でも自分に似合
うもんを着ると云う風やさかい、そう云う点は大阪よりもええ云うてる
わ」

葡萄酒のせいもあるかも知れないが、雪子はさすがによく燥やほいで例にな
くおしゃべりをした。その様子には、口に出してこそ云わないけれども、
半歳ぶりに関西の土地へ戻ることが出来たうれしさ、 蘆屋の家の
応接間に、こうして幸子や妙子たちと夜を更ふかしていられる嬉うれしさを、
包みきれないものがあつた。貞之助は、

「もうそろそろ寝ようやないか」

と云いながらも話が弾はむので、又立つて行つて何本目かの薪をくべた。

「そのうちに一遍、あたしも東京へ連れて行つて貰もらおう思つてるけど、
渋谷の家はえらい狭いのんやてなあ。一体いつ宿変えるのん」

「さあ、 何も家搜いしてゐるような様子ないけど」

「そんなら、せえへんつもりやるか」

「そうやないやるか。去年はこんなに狭かつたらどうもならん云うて、
宿変えるする云うてたけど、今年になつたら、あんまりそんなこと云
わんようになってしもてん。何や、兄さんも姉ちゃんも考が變つたらし
いねんわ」

雪子はそう云つて、意外なことを語り出した。これは自分の観察であつて、姉ちゃん達夫婦の口からはつきりそうと聞かされた訳ではないのだけれども、もともと、夫婦があれほど離れるのを嫌がつていた大阪の土地を離れて、東京へ出る決心をした動機は、兄さんが出世慾を起したこと、そして又、その出世慾を起すに至つた原因はと云えば、親子八人もの家族を抱えて亡父の遺産では食べて行けなくなつたと云う、少し大袈裟おおげさに云えば生活難を感じ出したことにあるのだから、東京へ来た当座こそ、家の狭さを啣かこつていたものの、だんだん住み着いてみるにつれて、これでも辛抱出来なくはない、と云う氣持になつて来たのであるまいか。それには何よりも、五十五円と云う家賃に誘惑されたのであろう。兄さんも姉ちゃんも、何しろこんな家だけれども家賃も安過ぎると、誰に言訳するともなく云い云いしていたが、そんなことを云つてゐるうちに、いつかその安さに釣つられて居すわる料簡りょうけんになつたのである。それと云うのが、大阪にいればこそ家名や格式を氣にする理由もあるけれども、東京へ来てしまえば「蒔岡まきおか」などと云つたつて知つてゐる者はないのだから、下らない見えを張るよりは、少しでも財産を殖やすように心がけた方がよい、と云つた風な実利主義に転向したとしても不思議はない。その証拠には、兄さんは今度支店長になつて月給も上り、それだけ懐ふところにも余裕を生じた筈なのであるが、万事が大阪時代から見ると締まり屋になつた。姉ちゃんも兄さんの旨むねを含んで、驚くほど儉約になり、日々の台所の買い物なども眼に見えて始末をする。尤もつとも、六人もの子供の食事を賄まかなうのだから、お菜な一つ買うのにも頭を使うと使われないとでは随分な違いになる訳であるが、賤いやしいことを云えば、お惣菜そうざいの献立なども大阪時代とは變つて来て、シチュウとか、ライスカレとか、薩摩汁さつましるとか、なるべく一種類で、少しの材料で、大勢の者がお腹一

杯食べられるような工夫をする。そんな風だから、牛肉と云ったって鋤焼などはめったに食べられず、僅かに肉の切れっ端が一片か二片浮いているようなものばかりを食べさせられる。それでもたまに子供たちが一立て済んでから、大人たちだけ別な献立で、兄さんの相手をしながらゆっくり夕飯を楽しむ折があつて、鯛は東京は駄目だとしても、赤身のお作りなどが食べられるのはまあそんな時だけであるが、それも実際は、兄さんのためと云うよりは、夫婦があたしに気がねして、いつも子供たちのお附合いばかりさせて置いては雪子ちゃんが可哀そうだから、と云うようなことであるらしい。

「姉ちゃん等の様子見てたら、そうやないやるか云う氣イするねん。……
まあ、見てて御覽、あの家変れへんよつてに」

「ふうん、そうかなあ。東京へ行って、すっかり姉ちゃん等人生観が變つてしもたんかなあ」

「そら、雪子ちゃんの觀察が或は當つてるかも知れん」
と、貞之助も云つた。

「東京へ移住したのを機会に、今迄みたいな虚栄心を捨てて大いに勤儉貯蓄主義で行こう。兄さんやつたらそんな考になるのんも無理の

ないとこやし、誰に聞かれても結構なことやないか。あの家かて、狭いことは狭いけど、辛抱しよう思えば出来んことはないさかいにな」

「けど、そんならそうとはつきり云うたらええのんに、今でも時々、雪子ちゃんの部屋がないのんが不都合やなあ云うて、人の顔を見たら言訳するのんが可笑しゅうて、」

「まあ、人間云うもんはそう一遍にガラリ變つてしまふ訳には行かんさかいに、多少は体裁も作るわいな」

「うち、今にそんな狭いとこへ行かんならんのん？」

と、妙子は自分に一番痛切なことを聞いた。

「さあ、………こいさんが来たかて寝るとこも何もあれへんけど、………」

「そしたら、まだ当分は大丈夫が知らん」

「兎に角今のとこ、こいさんのことなんぞ忘れてるらしいわ」

「おい、もう寝よう。」

暖炉だな柵の置時計が二時半を打ったので、貞之助がびっくりしたように立ち上った。

「雪子ちゃんかて今日は疲れてるやる」

「見合いのことで相談があつてんけど、ま、明日にするわな」

雪子は幸子のそう云う言葉を聞き流して、先に二階へ上つて行つたが、寢室に這入つて見ると、悦子は枕まくらもとのテーブルの上にさっきの土産物の数々を、阿波屋の草履の箱までも列ならべて眠っていた。その、スランドの灯影ほかげの中にある安らかな寝顔を覗のぞき込んだ時、彼女は又もう一度、この家へ戻つて来られたことの嬉しさが込み上げて来るのを感じた。そして、悦子の寝台と、彼女の藁布団わらぶとんの寢床との間に落ち込んで正体もななくうたた寝をしているお春を、

「お春どんお春どん」

と、二三度揺り起して、漸く下へ降りて行かしてから眠りに就いた。

「#5字下げ」二十七「#」二十七「は中見出し」

見合いは、場所や時刻は追つて御知らせ申しますけれども、八日が日吉よいようですから、八日にさせて戴いたきたいと、陣場夫人から云つて来たので、そのつもりで雪子を呼び寄せたのであったが、五日の夜中に思い

もかけぬ事件が起つたために、又しても延期を申し込むことになつてしまつた。と云うのは、同日の朝、幸子は有馬温泉で病後の療養をしてゐる或る奥さんを見舞うべく、かねて約束してあつた友達二三人と連れ立つて、電車にすればよかつたのに、バスで六甲越えをして有馬へ行つた。尤も帰りは神有電車で帰つたのであつたが、その夜寢床へ這入つてから、急に出血を見て苦痛を訴え始めたので、櫛田医師に來診して貰つたところ、意外にも流産らしいと云う。で、直ぐ専門医を呼んで貰つたが、矢張櫛田医師の診察の通りで、明くる朝流産を見たのであつた。

貞之助は、夜中に幸子が苦しみ出してから自分の寢床を上げさせてしまひ、ずっと枕もとに着き切つていたが、翌日も、流産の後始末の時にちよつと席を外しただけで、妻の苦痛がうすらいでからも、とうとう事務所を休んでしまつて病室に詰めていた。そして、胴丸の火鉢に両肘をつき、火箸の頭に両方の掌を重ねたままの姿勢で、俯向き加減に坐つたきり、一日何をするのでもなくじつとしていたが、時々、一杯涙を溜めた妻の眼が自分の方を見上げているのを感じると、ちらりと見返して、

「まあ、ええがな、………」
と、慰め顔に云つた。

「………出来たことはしようがないが」

「あなた、堪忍してくれはるわな」

「何が？」

「あたしが不注意やつてんわ」

「そんなことがあるもんか。僕は却つて前途に希望が湧いたような氣イしているねん」

そう云う途端に、妻の眼の中にある涙の玉が大きく膨らんで、破れて、頬に伝わる。

「そうかて、残念やわ。……………」

「もう云わんとき。……………きつと又出来るよつてに。……………」

夫婦は一日のうちになんか問答を何回となく繰り返した。そして貞之助は、血の気の失せた青白い妻の顔を視守りながら、自分も落胆の色を隠しきれずにいた。

ありていに云うと、幸子はこのところ二度ばかり続けて月のものを見なかつたので、ひよつとしたら、と云う予感がしなくてもなかつたのであるが、何分悦子を生んでから十年近くにもなるし、事に依つたら手術をしないと後が出来ないかも知れないと、医者に云われたこともあつたしするので、よもやと思つて油断していたのが悪かつたのであつた。でも、夫が後を欲しがっていることは知っていたし、自分にしても、姉ほどの子福者にはなれないとしても、女の子一人きりでは余り淋しく感じていたので、そうであつてくれればよいがと願うところから、三月になつたら念のために診て貰う積りではいたのであつた。それで昨日、連れの人々が六甲越えをして行こうと云い出した時に、大事を取つた方がよくはないかと、ふつとそんな気もしたのだけれども、何を阿呆らしいことをと、それを打ち消す気持の方が遙かに強く働いていたので、折角皆が楽しみにしているらしい計画に、反対する迄もないと思つたのであつた。そう云う訳で、油断をしたのには一往理由のあることなので、必ずしも彼女が責められるべきではないのであるが、惜しいことをしましたねと、櫛田医師にも云われるし、自分も、なぜこんな時に有馬などへ行く約束をしたのか、なぜうかうかとバスへ乗ってしまったのかと、悔し涙が出て仕方がなかつた。夫は、もうお前の体には子供は出来ないであろうと諦めていたのが、凶らずも妊娠可能であることが証明されたのだから、僕は悲観するところではない、むしろ将来に希望が持てるようになった

のを喜んでいると云って、慰めてくれるのであるが、そう云う夫自身、内心ではひどくがっかりしていることが様子にも分るので、やさしく労わってくれるほどなお気の毒で、何と云われても自分の越度おちどであることは、それも軽からぬ越度であることは、否いなみようもなく思えるのであった。

二日目には夫も気を取り直して快活になり、いつもの時刻に事務所へ出かけたが、幸子はひとり二階で臥ねていると、悔んでも仕方のないことだと思いながら又一つ所へ考が落ち込むのを防ぎようがなかった。折角おめでたい話のある矢先なので、雪子を始め子供や女中達には見られないようにしていたけれども、ひとりになると、いつか涙が溜ためって来る。……自分がもし、あんな不注意なことをしなかったら、十一月には生れていただであろうに、そして来年の今頃は、あやせば笑うくらいにはなっていないであろうに、……きつと今度は、男の児こだったのではなからうか、……自分として、全然気が付かなかったのなら諦めようもあるけれども、あの時虫が知らしたのに、なぜバスで行くことを止めなかったのか、咄嗟とつさに適當な口実が浮かばなかったせいでもあるが、何とでも云って、自分一人だけ後から行くようにすればよかつたし、口実ぐらいいくらでも考え出せたのに、なぜそうしなかったのか、悔んでも悔んでも一番このことが悔み足りない。夫が云うように幸いにして後が出来てくれたらよいが、そうでなかったら、恐らく自分は何年立っても、ああ、今頃生きていたらこのくらいになっているのになあと思い思おもいして、いつ迄までも忘れられないであろう。大方このことが一生癒いやし難い悔恨となつて付き纏まとうであろう。……そして幸子は、もう一度強く己れを責め、夫と、失われた胎児たいとに償いような罪を犯したことを謝しつつ、又しても新たな涙が

一杯溜つて来るのを感じた。

陣場夫人のところへは、度々のことであるから、本来ならば誰かが出向いて断りを云うべきなのであったが、貞之助は全然面識がないことでもあり、且かつ先方は、いつも夫人が交渉の任に当っていて、主人の陣場仙太郎なる人はまだ表面に出て来たことがないので、取りあえず六日の晩に、幸子の代筆として貞之助が書面をしたため、又々延期と云うことは寔まことに申しにくいものだけれども、生憎あいにくな時に妻が風邪で熱を出したので、何とも勝手ながら、さしあたり八日は日延べを願いたい、但ただし念のために申し添えるけれども、全くそれだけの事情なので、他に何の理由もあるのではないから、その点は誤解のないようお願い申したく、風邪と云つても大したことはないらしいから、一週間も待つて戴いたいたら大丈夫だと存じますと、速達便を以て申し送った。が、先方はそれをどう取ったのか、七日の午後に突然陣場夫人が訪ねて来、お見舞旁「#二の字点かた、^が「-2-22」お伺いしたのですが、もし奥様にお眼に懸れたらちよつともお会いしたいと云い入れたので、兎に角病室へ通つて貰った。と云うのは、ほんとうに自分がこうして臥しているところを見せた方が却かえつて先方も安心し、諒解りょうかいしてくれることと思つた訳であつたが、氣心の分つた旧友の顔を見ると、幸子はだんだん親しみが湧わいて来て、病氣と云うのが実は何であるかを、ついでに云つてしまふ氣になつた。で、おめでたい話の折柄であるから、手紙にはああ書いたけれども、あなたには隠す迄もないと思うから、と前置きをして、五日の夜中の出来事を手短かに語り、自分の苦しい胸の中もいくらかは聞いて貰つて、これはあなただけに打ち明けるので、先方へは何とか然しかるべきように云つて置いてほしいけれども、事情と云うのは全くそう云う訳なのだから、何卒なにせぞくれぐれも氣持を悪くしないで貰いたい、それに、経過も良好で、一週間もしたら

出歩けるでしようと、医者も云っているくらいだから、そのつもりでもう一度日取りを考え直して貰いたい、と、そう云うと、そら惜しいことをしやはったわなあ、あんたの旦那さん、どんなにがっかりしやはったやろ、と、陣場夫人はそう云いかけたが、途端に幸子の眼の中が潤うるんで来たのを見て取ると、慌てて話題を変えて、一週間でええのんやつたら、十五日はどうか知らん、と云い出した。そして云うのには、今朝速達便を受け取ったので、此処ここを訪問するまでに先方と打ち合せを遂げて来たのであるが、今月は十八日から二十四日までがお彼岸なので、その間を避けるとなると、八日以後では十五日より外に適当な日がない、もし十五日が駄目であると、後は来月になってしまおうが、今からちようど一週間あることだからなるべく十五日にして貰えないであろうか、実は浜田さんからもそうお願いするように頼まれたのであるが、と云うので、幸子はこの上我が儘ままを云う訳にも行かず、まあ、医者もああ云っていることだから、少しくぐらいの無理を押ししても出られないことはあるまいと思つて、夫に相談する迄もなく、大体承諾の旨を答えて帰したのであつた。ところが、その後経過は順調に進んでいたものの、十四日になつてもまだ時々少量の出血を見、臥たり起きたりしていると云う程度であつた。

貞之助は初めから、

「そんな約束してしもて大丈夫かいなあ」

と、危ぶんでいたのであるが、そうなつてみると、大切な席で粗相があつてはならないし、幸い陣場夫婦だけはほんとうの事情を知っていることでもあるから、陣場にまでよく訳を話して、幸子は欠席することにし、貞之助が一人雪子に付き添つて行くと云う方法も考えられた。けれどもそれも不都合であると云うのは、幸子が欠席しては双方を紹介する者がいないのであつた。雪子は心配して、私のために何も無理をしてくれな

いでもよい、もう一度延期を申し込んで、万一そのために破談になるようなことがあったら、それ迄と思つて諦めよう、こう云う時にこう云うことが起るのも、もともと縁がないのかも知れない、と云うのであったが、幸子は又、そんな風に雪子に云われてみると、この間から自分の悲しみのために忘れていた妹への同情心が、急に高まつて来るのを覚えた。これ迄にも雪子の見合いと云うと、故障が起つて一遍にすらすらと運ばないことが多かつたので、今度もそれを予期すると云つては可笑しいけれども、何か、そんなようなことがなければよいかと案じていた矢先に、先ず本家の姪めいの病氣と云う邪魔が這入り、それが済んだと思つたら、今度は流産と云う不吉な事件に打つかつたところから、幸子は自分たち迄が、繫つながる縁で妹に纏まとわる運勢の中へ捲まき込まれたような、薄気味の悪い心持もせざるを得なかつたのであるが、案外人は何とも感じていないらしいので、その顔を見るとなおいじらしさが増して来るのであった。それで、十四日の朝、貞之助が事務所へ出て行く時は、彼は幸子を欠席させる方へ傾き、幸子自身はどうしても出席したいと云つていて、孰方どちとも決定が付かずにいたが、三時頃に陣場夫人から電話があつて、あんな、あれからどんな工合、と云われてみると、ふん、もう大方ええねんわ、と、幸子はいそいそ答えてしまった。そんなら明日よろしいなあ、と、先方は直ぐ追つかけてそう云つてから、明日、時間は午後五時、集合場所はオリエンタルホテルのロビーと云うことに、野村氏の方からきめて来たからそうして貰いたい、尤もホテルへは集合するだけで、簡単にお茶を飲んでから、何処かの料理屋へ席を移して晚餐ばんさんを取ることになる筈であるが、何処にするかはまだ極まつていない、見合いと云つても形式張らない小人数の会合のことだから、明日ホテルへ落ち合つてから相談の上で行く先をきめてもよいと云っている、野村氏の方は、当人一

人だけ、それに私達夫婦が浜田氏の代理として付き添うことになるので、あなたの方が三人とすると、六人である、と云うのであった。幸子はそれを聞いていている間にいよいよ行くことに腹をきめたが、そんならそれでよろしいなあと、先方が駄目を押すのを、ちよつと、と云って呼び止めて、実は殆ど全快したようなものだけれども、外出するのは明日が始めてであり、まだ完全に出血が止っている訳ではないから、まことに申しかねるけれども、あなたが気を利かして、なるべく歩くところがないように、短い距離に行く時でも必ずタキシードへ乗せるようにしてほしい、それさえ含んで置いてくれたら差支えないから、と、その点をよく頼み込んで置いた。

この電話があつた時、雪子は井谷の美容院へ明日の頭髪を拵えに行つていて留守であつたが、帰つて来て話を聞くと、外のことは承知したけれども、集合の場所をオリエンタルホテルにしたことについて難色を示した。この前、瀬越の時にオリエンタルであつたのに、又同じ所にするのは、幸先が悪いとか何とか云うことは問題でないとしても、ボーイや女給たちがあの時のことを覚えていて、ああ又あのお嬢さんが見合いしてはる、と云う風な眼で見られたら不愉快である、と云うのであつたが、幸子もさつき申込みを聞いた時にそう云う異議が出ないであろうかと思わないでもなかつたし、雪子が一度そう云い出したらなかなか機嫌を取りにくいことは分つているので、夫の書齋から陣場夫人を呼び出して、ありのままの理由を述べ、オリエンタルだけを考慮し直して貰うように申し入れた。と、二時間ばかり立って先方から懸つて来、いろいろ野村氏とも相談をしてみたのであるが、オリエンタルがいけないとなると、さしあたり適当な場所を思い付かない、それなら直接料理屋へ集ればよい訳であるが、さてその料理屋をきめるについても、此方の独断できめ

てしまつて又差障りがあつてもならないし、何かそちらによい案があれば聞かして貰いたい、此方の勝手を云えば、ほんの集合の場所に使うだけなのだから、枉まげて雪子さんに承知して貰つて、オリエンタルにしてくれると大変都合なのだけれども、そう云う訳に行かないであろうか、……何もそんなに気にしやはる程のこともないように思うけれども、……と云うのであつた。幸子は、ちようど貞之助が帰宅したので、夫とも話し合つた結果、矢張雪子の心持を尊重した方がよいと云うことになり、強情を張るようでは済まないけれども、……と、押し返して先方へ譲歩を求めると、では尚なほよく考えて、明朝改めて打ち合せをしましょう、と云う挨拶であつたが、十五日の朝電話があり、トーアホテルでは如何と云つて来たので、漸よううそれに話が落ち着いた。

「#5字下げ」二十八「#「二十八」は中見出し」

当日は、もうお水取が済んだにしてはうすら寒い日で、風はないけれども、雪模様の、どんよりした空あいであつた。貞之助は朝起きるとから、出血はまだ止まらないのか、と、第一にそれを気にしていたが、午後にも早く帰つて来て、どうや、出血はと、又尋ね、気分が悪かつたら今からでも断つたらええ、今日のところは僕一人でも勤まるさかいに、と云つたりした。幸子はそう聞かれる度に、幾らかずつ良い方で、出るものも微量になりつつあると答えてはいたものの、実は昨日の午後あたりから何度も電話口へ立つたりして体を動かしたのが障さわつたらしく、今日は却かえつて量が殖ええているのであつた。そして、長いこと風呂へ這入はいらない顔や襟えりくび頸くびを簡単に洗つただけで、鏡台の前に坐すわつて見ると、いかにも貧血しているのがよく分る色つやをしてい、我ながら糞ちんれが目立っていること

を感じたが、妹さんの見合いに付き添う時には精々地味に作るようにと、いつぞや井谷に注意されたこともあるし、このくらい衰えていたらちようどよいのではあるまいかと思つたことであつた。

ホテルの玄関で待ち構えていた陣場夫人は、雪子を中心に挟みながら夫婦が這入つて来たのを見ると、すぐ寄つて行つて、

「幸子さん、旦那さんに紹介して」

と云いながら、

「あなた」

と、自分のうしろに、二三步離れて謹直な恰好かっこうをして突つ立っている夫の仙太郎を磨さしまねいた。

「初めまして。わたくしが陣場です。いつも家内が御厄介やっかいになつとりまして。………」

「いえ、此方こちこそ。………この度は又奥さんに並々ならぬ御配慮おしやうに与りまして有難う存じます。殊ことに今日はいろいろと手前勝手を申しまして、何とも相済まぬことで、………」

「あのなあ、幸子さん、………」

と陣場夫人がその時小声になつて云つた。

「………野村さんそこに見えてなさるよつて、今紹介するけれど、何せわたし等らかて社長さんとここで一二遍会つたことがあるぐらいで、そんなに懇意と云うのんと違ふさかいに、何やけつたいな工合やねん。………それで、本人さんのことについては私等何も知らんよつてに、あんた等から直接何でも聞いてほしいねんわ」

夫人にしゃべらして傍で黙つて聞いていた陣場は、このひそひそ話が終るのを待つて、

「ではどうぞ彼方あちらへ」

と、物を押し戴くように片手をさし出して小腰を屈めた。

幸子達夫婦は紹介されるより前に、写真で見覚えのある紳士がロビーの椅子に独り腰かけているのを認めた。先方も、吸いかけていた煙草を灰皿にこすりつけて、性急な動作で二三度ゴシゴシと火を押し潰してから立ち上ったが、体格は思いの外頑丈で、しっかりしているように見えるが、幸子が案じていた通り、写真以上に老人臭い、じじむさい容貌をしている。第一に写真では分らなかつたけれども、髪の毛が、禿げてはいないが、半分以上白髪で、一面に薄く、ちぢれて、もじゃもじゃと、ひどく汚らしく生えていて、顔は非常に小皺が多い。先ずどう見ても五十四五歳ぐらいには見える。実際の歳は貞之助より二つしか上でないと云うのに、野村の方がたしかに十は上に見えよう。まして雪子とでは、彼女がまた実際よりも七八歳も若く、ようよう廿四五としか見えないので、まるで父子のような差があつて、こんな所へこの妹を引つ張つて来たと云うことだけでも、幸子は何か妹に済まないことをしたような気がした。

六人は双方の紹介が終つてから、そのままお茶のテーブルを囲んで話し合つたが、巧い工合に雑談が弾んで来ないで、時々皆が黙り込んでしまつた。それは野村と云う人が、何処か取り着きにくい感じのするせいでもあるが、介添役の陣場夫婦が又、野村に対してひどく遠慮して、固くなつていゝ風があつた。多分陣場にして見れば、相手が恩人たる浜田の従弟であると思うところから、自然に出て来る態度なのであるが、それにしても少し卑屈過ぎるように見える。いつもである、こう云う時に座を白けさせないくらいな如才なさは、貞之助夫婦の方で持ち合せているのだけれども、今日は幸子が氣勢が上らず、貞之助も亦妻の気分に影響されて多少陰鬱になつていた。

「野村さんの県庁でのお仕事は、主にどう云うようなことを、でも、そんなような質問からぼつぼつ話がほぐれ出して、仕事と云うのは兵庫県下の鮎あゆの増産に関する指導、視察等が主であること、県内では何処の鮎が美味であるかと云うこと、竜野や滝野の鮎のこと、等々が語られて行った。陣場夫人はその間に、

「ちよつと、……………」

と、幸子を物蔭へ引つ張って行って立ち話をし、野村の傍へ戻って来て耳打ちをし合い、電話室へ走って行き、又もう一度幸子を呼び立てるなど、何かと奔走していたが、夫人が席に復してしまつと、今度は幸子が、

「ちよつと」

と云つて、貞之助を呼んで立つて行った。

「何やねん」

「あのなあ、会場のことやねんけど、あんた、山手の北京楼ペキン楼云う支那料理屋知つてなさる？」

「いや、知らん」

「野村さんいつもそこへ行かはるのんで、そこにしてほしい云やはるねんで。そんでなあ、支那料理でも構かめへんけど、今日はあたし、椅子やつたら工合悪いよつてに、日本座敷にしてほしい云うてんわ。そんなら、そこは支那人のやつてる支那料理やねんけど、日本間も一つか二つある云うのんで、今陣場さんが電話で日本間予約してくれはりましたん。それでよろしいやるなあ？」

「お前さえよかつたら、僕は何処でもええけど、……………お前、そないに立ったり居たりせんと、少しじつとしてなさい」

「そうかて、あたしを呼ばはるねんもん。……………」

幸子はそれから化粧室へ這入って行ったきり、二十分程姿を隠していた

が、やがて一層青い顔をして戻って来た。と、陣場夫人がまた、
「ちよつと」

と云って呼んだので、貞之助は溜りかねて、

「いや、僕が行こう」

と、立って行つた。

「あの、あれはまだ体の工合がほんとうでないので、……… どう云う御用か、僕に仰おつしやつて下さいませんか。………」

「あ、左様でございますか。実はあの、自動車が二台来ているのでございますけど、一台の方へ野村さんと、雪子さんと、私が乗りまして、一台の方へあなた方御夫妻と、宅の主人が乗ることにしましてはどんなものでございましょうか」

「さあ、……… 野村さんの御希望なのでしょうか」

「いえ、そう云う訳ではないんですが、ただちよつと、そんな風にしたらどうかと思ひ付きましたものですから、………」

「さあ、………」

貞之助は何となく不愉快さが込み上げて来るのを、顔に現わさないようにするの骨が折れた。今日は幸子が体の支障を堪え忍んで、多少危険を冒しつつ出席するのであることは、昨日から通告してあるのだし、さつきからたびたびそれを匂におわしているのに、陣場夫婦はそう聞かされながら、一言半句も見舞や同情の言葉を吐かないのが、何より貞之助は不満であつた。尤も今日は縁起を担かついでわざとそのことに触れないでいるのかも知れないが、それにしても、蔭で幸子を労いたわると云う心持を示してくれてもよさそうなものなのに、あまりにも気が利きかな過ぎる。或はそんな風に思うのは此方の身勝手と云うもので、陣場夫婦の気持では、自分達の方こそ、今までに何回も延期々々で引張られて来たのだから、

此処へ来てそのくらいな犠牲を払ってくれるのは当り前だ、と云う腹があるのではあるうか。ましてこれは誰のためでもない、此方の妹のためであつて、陣場夫婦は親切ずくでしているだけのことなのだから、向うにすれば、姉が妹の見合いのために体の故障を忍ぶぐらいが何であろう、それを自分達に恩にでも着せるように云うのはお門違いである、と思つているのであるうか。貞之助は、此方の僻みかも知れないけれども、この夫婦にも矢張井谷と同じような考、婚期におくれて困つている娘を自分達が世話をしてやるのだ、と云つた考があつて、彼等こそそれを恩に着せる気味合があるのではなからうか、と云う風にも感じた。が、幸子の話だと、陣場と云う男は浜田文吉が社長をしている関西電車の電力課長であると云うから、社長に忠義立てをするために野村の意を迎えようとして一生懸命になり過ぎ、つい外の事に気が廻らなくなつていのだと解釈するのが、一番當つているかも知れない。それで野村と雪子とを一つ車へ乗せようとするのが、陣場夫人の忠義立てから思い付いた案なのか、野村の意を受けての提議なのかは明かでないが、何にしても今の場合少し非常識で、貞之助は馬鹿にされているような気がした。

「如何でございましょう、雪子さんがお厭でなかつたら、……………」

「さあ、雪子はああ云うたちですから、厭と云うことは申しますまいけれども、話が順調に運びさえしましたら、そう云う機会は今後いくらかもある筈ですから、……………」

「はあ、はあ」

と云いながら、夫人は漸く貞之助の眼の色を看て取つて、鼻を蝦のようにして苦笑いした。

「……………それに何ですよ、そう云う風にされますと、雪子は一層極まりを悪がつて口を利かなくなる方ですから、却つて結果が良くないだらう

と思うんですが、……………」

「ああ左様で。……………いえ、ただちよつと思ひ付きましたので、申し上げてみただけなんですから、それなら何でございませぬ、……………」

しかし貞之助の癩かんに触つたのは、これだけではなかつた。北京楼と云うのは省線の元町駅の山側の高台にあると云うので、自動車は横着けになるのでしようかと、念を押すと、大丈夫です、御心配には及びませんと云うことであつたが、行つて見ると、成る程門前へ横着けになるにはなるが、そこは元町から神戸駅へ通う高架線の北側に沿うた道路に面して、玄関まではなお相当に急な石段を幾階も上らねばならず、玄関から又二階の階段を上るのであつた。幸子は貞之助に勞わられつつおく後れてゆつくり上つて行つたが、二階へ上り切つてしまつたと、廊下に立つて海の方を展望していた野村が、そんなことには無頓着むとんじやくに、

「どうです時岡さん、此処ここはなかなか見晴らしがいいでしょう」

と、ひどく上機嫌じょうきげんな声で云つた。すると、並んで立つていた陣場が、

「成る程、これはいい所をお見つけになりましたな」

と、合槌あいづちを打つた。

「此処ここから港町みなとまちを瞰みおろしておりますと、ちよつと長崎へ参つたような異国情調を感じますな」

「そうですそうです、ほんとうに長崎の感じですよ」

「わたくし、南京町ナンキンの支那料理屋へはよく参りますのですが、神戸にこつ云う家があるとは存じませんでした」

「此処は県庁に近いもんですから、僕等は始終やつて来るんです。ちよつと料理も旨うまいんでしてね」

「ああ、左様で。……………それに異国情調と申せば、この建物が何処か支那の港町にあるような建て方で、変つてゐるじゃございませぬか。支那

人の経営している支那料理屋と云うと、兎角殺風景なものが多うございますが、この欄干や欄間の彫刻と云い、部屋の中の装飾と云い、特色があつて面白うございますな」

「港に一艘軍艦らしいものが這入っておりますなあ、と、幸子も今は仕方なしに気を引き立てて、

「あれ、何処の国の軍艦でございましょうか」

などとおあいそを云つていたが、階下の帳場へ掛合いに行つていた陣場夫人が、その時困つた顔をしてあたふたと上つて来た。

「幸子さん、えらい申訳がないねんけど、日本間塞ふさがつてるよつてに、支那間で辛抱してほしい云うねんわ。……さつき電話かけた時は、分りました、確かに日本間取つて置きます云うてんけど、何せ、このうちはボーイが支那人ばかりでっしゃろ、そやさかいに、何遍も念押ししたことは押したけど、やっぱり此方の云うことがあんじよう通じてえへんでんわ。……」

貞之助はこの二階へ上つた時から、廊下に面した支那間が用意してあるのを見て、変に思つていたのであるが、ボーイの聞き違いだとすれば強あながち夫人を責める訳には行かないようなものの、電話に出たのがそんな頼りない支那人のボーイであつたのなら、何とかその上にも念の入れ方があつたらうものを、畢竟幸子に対する労わりの心が足りないところから起つたのであるとしか思えなかつた。それに夫の陣場にしても、野村にしても、約束が違つたことについては何の弁解もしないで、頻しきりにこの場所の眺望ちやうぼうを褒ほめてばかりいるのである。

「そんなら、此処で辛抱してくれはる？」

と、陣場夫人は否いや応おつ云わせないように、両手で幸子の手を握り締めて、子供が物をねだるような料しなをしながら云つた。

「はあはあ、此処かて結構なお座敷やないの。ほんに、ええとこ教せて戴いて、」

幸子は自分よりは夫の不機嫌そうなのが気になるので、

「あんさん、」

と、夫の方へこなしながら、

「一遍此処へ悦子やこいさん等連れて来なされしませんか」

「うん、港の船が見えるよつてに、子供は喜ぶかも知れんな」

と、貞之助は浮かぬ顔つきをしながら云った。

野村と幸子とが向い合うようにして円テーブルを囲みながら、日本酒と紹興酒と前菜とで晚餐が始められ、陣場が昨今の新聞を賑わしている独塊合邦の話を持ち出したのを切掛けに、シユシユニツク塊首相の辞職、ヒットラー總統の維納入り等が暫く話題に上ったが、蒔岡側は時々口を挟む程度で、ともすると野村と陣場だけの遣り取りになりがちであった。

幸子は出来るだけ何気ないようににはしていたものの、トーアホテルで一回、此処へ来てから食卓に就く前に一回検べたところでは、明かに今夕家を出てから以後出血が殖えつつあつて、急に体を動かしたことが原因であるに違いなく、それに、案じていた通り、背の高い堅い食堂の椅子に腰掛けているのが工合が悪く、その不愉快を憶えるのと、粗相をしてはと云う心配とで、直きに気分が塞いで来るのを、どうにも仕様がなかった。貞之助は、考えれば考えるほど腹が立って来るのであつたが、妻が一生懸命に勤めている様子がよく分るにつけ、自分が無愛想にすれば尚更彼女へ負担をかけることになるので、結局彼も、酒の勢を借りてでも会話に穴をあけないだけの努力をしなければならなかった。

「そうそう、幸子さんこれが行けるんでっしゃる」

と、陣場夫人は、男達へお酌をするついでにお銚子を幸子の方へ向けた。

「あたし、今日は飲んだらあきませんねん。 雪子ちゃん、少し戴いたら」

「では雪子さん何卒、」

「そしたら、この方を、」

と、雪子は氷砂糖の這入った紹興酒の杯を舐めるようにした。

彼女は姉たちがそんな風で氣勢が上らないのと、野村が絶えず向う側からジロジロ視線を浴びせるので、一層きまり悪そうに下ばかり向いて、幅の狭い肩をいよいよ紙雑かみびなのように縮めていたが、野村は酔が循まわるにつれてだんだん饒舌じょうぜつになって行くのが、雪子と云うものを眼の前に見ている結果の、興奮のせいでもあるらしかった。彼は浜田文吉を親戚に持っていることが余程自慢であると思えて、浜田と云う名を何度となく口にし、陣場も「社長々々」と云って、ひとしきり浜田の噂うわさをし、暗に浜田が従弟の野村をどんなに庇護ひごしているかと云うことを匂わすのであったが、それより貞之助が驚いたのは、野村がいつの間にか、雪子自身のこととは素より、彼女の姉妹たちのこと、亡なくなった父のこと、本家の義兄夫婦のこと、妙子の新聞の事件のこと、等々蒔岡家に関する事柄を、よく調べ上げていることであつた。そして、御疑念の点は何事に依よらずお聞き下さいと云うと、いろいろ微細なことを質問し出したが、そんな問答の間にも、雪子を知るためには随分方々へ問い合せていることが分つた。恐らく蔭に浜田が附いていて、調査の手が揃そろっていたからであるうが、野村の口ぶりから察すると、井谷の美容院、榎田医師の所、マダム塚本の所、以前教わつたことのあるピアノの教師の所、などへも人を遣っていることは確かで、瀬越との縁談が何の理由で破談になつたかと云うこと、雪子が阪大でレントゲン写真を撮つたことまで知っているのは、井谷から聞いたと思うより外に心あたりがない。(そう云えば

井谷は、或る方面からお嬢さんのことを問い合わせて来ましたので差支えない限り話してやりましたと、いつぞや幸子に云っていたことがあった。それにつけても、幸子は雪子の例のシミが、今度帰って来てからは全く影を消しているので、今日は安心していたのであるが、まさか井谷がそんなこと迄しゃべったであろうとは思えないながらも、この時ちよつとヒヤリとした。貞之助は専ら自分^{もっぱ}が引き受けて対応の任に当っているうちに、野村と云う人がひどく神経質であることが分つて来、なるほどこれなら独語^{ひとごい}を云う奇癖があるとしても不思議でないような気がして来た。それにさつきからの様子を見てみると、野村には全然此方の腹の中が分らないで、もうこの縁は纏^{まと}まるものと思ひ込んでいるところから、そんな工合に、細かなことを立ち入って尋ねるのであるらしく、トリアホテルで会つた時の取り付きにくい印象とは別人のように活気づいて、ますます上機嫌になっていた。

貞之助達の正直な気持は、好い加減にこの会合を切り上げて一刻も早く帰宅したいことであつたが、帰り際^{きざい}になつて又一つ当惑したことが起つた。と云うのは、大阪へ帰る陣場夫婦が自動車で貞之助達を蘆屋まで送つて行き、そこから自分達は阪急に乗ると云うことであつたが、自動車が参りましたと云うので、出て見ると、一台しか来ていない。そして、野村さんのお宅は青谷で、同じ方向ですから、いくらか廻りになりますけれども乗せて行って上げて下さい、と云うのであつた。貞之助は、新国道を一直線に帰ると、青谷を廻つて帰るのでは、距離にしても大分相違があるばかりではない、青谷方面は路も悪く、勾配^{こうはい}も多いことであるから、動揺が激しいのは知れているので、重ね重ね思いやりがな過ぎるのに又しても忿懣^{ふんまん}を覚えながら、車がぐいと曲る毎に妻がどんな顔をしているかとヒヤヒヤしたが、男三人が前列に席を占めたので、その

つどうしるを振り向く訳にも行かなかつた。と、青谷の近くへ来た時に、野村が突然、如何です、珈琲コヒを一杯さし上げたいから皆さんでお立ち寄り下さいませんか、と云い出した。そのすすめ方が実に熱心で、此方が再三辞退したぐらいでは聴き入れず、むさくろしい家ですけれども見晴らしのよいことは北京楼以上です、座敷に坐りながら港が一と目に見えるところが自慢なんです、まあちよつと上つて、僕の生活ぶりも見て行って下さい、と、頻りに云う傍から陣場夫婦も口を添えて、折角ああ云われるのだから是非寄つて上げて下さい、野村さんのお宅には婆はあやと小女がいるだけだそうで、誰にも気兼ねはありません、こう云う機会にお住居の模様を見ておいて下さつたら何かの参考になるでしょう、などと云うのであつたが、貞之助も、そう云つても縁のものだから、雪子の考を聞いてみないうちは打壊しな行動も取りたくないし、この話がどうなるにしても又どんなことで世話になるかも分らないのに、陣場夫婦の顔を立てないのも如何であろうか、……この人達だつて、気は利かないが親切でしてくれているには違いないのだから、……と云つたような弱気が、もともと腹の底にあるので、そんならちよつとだけ寄せて戴きましようかと、先ず幸子が云い出したのを切掛けに、我を折つてしまった。しかし此処でも野村の家へ行く迄には、足場の悪い、細い急な坂路を二十間も上るのであつた。野村は非常な燥はぎ方で、子供のように喜んでしまつて、海の方が見える座敷の雨戸を大急ぎで開けさせ、書齋を見て戴きましようかと云つて、ついでに家じゅうの部屋を台所まで案内して廻つた。それが平屋建ての、六間ばかりしかない粗末な借家なのであつたが、野村は仏壇のある六畳の茶の間へ引つ張つて行って先妻と二人の子供の写真が飾つてある光景までも見せたりした。陣場は座敷に通されると、なるほどこの眺望は素敵ですな、仰っしゃる通り北京楼以上でございま

すなど、早速お世辞を云うのであったが、でもその座敷と云うのが、高い石崖の縁すれすれに建っていて、縁側にいると体が崖の外へ食み出しそうな、落ち着きの悪い気がするので、貞之助などは、自分であつたらこう云う家にはとても不安で住んでいられそうもなくて思えた。

珈琲を呼ばれるとそこそこに、待たせて置いた自動車に乗ったが、「今夜は野村さん、えらい御機嫌やったやないか」と、走り出してから陣場が云った。

「ほんに、野村さんがあないにしゃべらるのん、今まで見たことあれへんなんだ。やつぱり若い綺麗な人が傍にいたはったせえやねんな」

と、夫人も合槌を打ちながら、

「なあ、幸子さん、野村さんの気持はもう聞かなくて分ってるさかいに、あんた等の考一つやわ。財産のないのんが欠点には違いないけど、そんなでも浜田さんが附いてはるよつてに、どんなことがあつたかて生活に困るようなことはさせはれへん。何ならその点を、もっとはつきり浜田さんに保証して貰おやないの」

「いや、有難う。ほんとうにいろいろとお骨折に与りまして、……いづれ相談いたしましたして、本家の意見も聞きました上で、……」

と、貞之助は切り口上で答えたが、それでも車から下りしなには、陣場夫婦に少し気の毒をしたようにも感じて、

「今夜はえらい失礼をいたしましたして」と、二度三度詫びを云った。

「#5字下げ」二十九「#二十九」は中見出し」

中一日置いて、十七日の朝蘆屋へ訪ねて来た陣場夫人は、一昨日無理を

したために幸子が又臥していると聞くと、さすがに今度は恐縮しながら、三十分ほど枕もとで話して帰ったが、要するに、野村さんから是非お頼みに上つてくれと云われたので来た、大体野村さんの生活程度は家を御覧になったので御想像がつくであろうが、でも現在は独身だからああ云う所におられるので、奥さんを迎えたらもつと家らしい家に移ると云つておられる、殊に雪子さんが来て下さるなら、自分は献身的の愛を捧げるとつもりである、自分は豊かではないが、雪子さんに不自由な思いをさせないぐらいなことは出来る、と云つておられる、それで実は浜田さんにもお目に懸つて来たのであるが、野村がそんなに執心であるなら、どうか纏まるように尽力してやって貰いたい、当人に財産がないのが、来て下さる人にお気の毒なので、何とか考えてみるが、その点はまあ自分に任して貰いたい、自分として、今具体的にどうすると云う保証をしると云われても困るが、自分がいる以上決して生活の苦勞はさせないから、と云つておられた、については、あれだけの方がそう云つておられるのだから、それは信用なさつても大丈夫なのではあるまいか、野村さんと云う人は、風采はああ云う風で、恐い顔つきをしておられるが、非常に情に脆いやさしいところがあり、先の奥さんなども随分大切にした人だそうで、亡くなられた時の看病の仕方などは、他人が見ても涙がこぼれたくらいだと言う噂がある、現にこの間の晩も奥さんの写真がああして飾つてあつたではないか、不足を云えば際限がないが、女としては、何より彼より夫に可愛がつて貰えることが一番幸福なのだから、何卒くれぐれも考えて下さつて、精々早く返事をして下さるように、と云うのであつた。

幸子は、予め断る時の伏線を張つて、雪子自身はよいも悪いも私達次第なのだから、その方は面倒はないけれども、肝腎な本家が何と云うか、

私達はただ代理を勤めているだけなので、野村さんの身許調べなども一切本家がしているような訳だから、

と、雪子が悪く思われないように、専ら本家へ責任をなすりつけるような挨拶をして帰したのであったが、引き続いて気分がすぐれず、医者あいさつの忠告に従って絶対安静を守っていたので、そう早速に雪子の考を探ってみる折もなく過していた。が見合いの日から五日目の朝であったか、偶然病室が二人だけになった機会を捉えて、

「雪子ちゃん、　　どうやねん、あの人？」

と、気を引いてみた。そして雪子が、

「ふん」

と云ったきり後を云わないので、一昨々日の朝の陣場夫人の来訪の趣意を話して聞かせて、

「　　まあ、そない云やはるねんけど、雪子ちゃんが若う見えるところへさして、あの人、えらい老けて見えるよつてに、その点がどうやろうか、……………」

と、顔色を窺いながら云うと、

「　　それでも、あの人やったら、何でもあたしの云う通りになりやはるやろうし、好きなこととして暮せるとは思うねんわ」

と、ぼつりとそんな言葉を洩らした。幸子は、「好きなこととして暮せると云う雪子の意味は、聞かずとも分っていることで、つまり、いつでも来たいと思う時に蘆屋へ遊びに来さして貰いたいのであるう、普通の所へ嫁に行ったのではなかなかそうは出来にくいが、あのお爺さんならそのくらいな我が儘をしても大丈夫らしいから、そう云う慰安だけはある、と云うのであろう、そんな考で結婚されたのでは貰う方が遣り切れないのであろうが、あのお爺さんの様子ではそれでも構わないから来て下さい

と云うかも知れない、まあ行つてしまえばそうそう出て来られるものでもないし、雪子ちゃんのことだから、口ほどにもなくあのお爺さんの情愛に絆ほだされて、此方のことなんぞ直きに忘れてしまつかも知れず、そのうちに子供でも出来るようになれば尚更なおさらである、婚期におくれて困っている妹をそれほどに懇望してくれるのは、考えように依よつては有難いことで、頭から嫌きらつたりなどしては勿体もったいないようでもある、と云つた風にも思えたので、

「ほんに、考えようやわな。雪子ちゃんがそう云う氣イなら、それもええかも知れん。……」

と、だんだんそんな工合に持つて行つて、もつとはつきり突き止めようとすると、

「……そやけど、あまり執拗ひつこうちやほやされたら叶かなわんやろうし、……」
と、ニヤニヤ笑いながらはぐらかして、もうそれ以上は、話に乗つて来ないでしまった。

東京へはあの明るる日に、見合いが済んだことだけを臥ながら一筆走らせてやったが、姉からは何の返事もなかった。幸子はお彼岸の間じゅう臥たり起きたりして暮したが、或る日の朝、一遍に春らしくなつた空の色に惹ひかれて、病室の縁側まで座布団ざふとんを持ち出して日光浴をしていると、ふと、階下のテラスから芝生の方へ降りて行く雪子の姿を見つけた。彼女は直すぐ、雪子ちゃん、と、呼んでみようかと思つたけれども、悦子を学校へ送り出したあとの、静かな午前中の一時ひとときを庭で憩いこおうとしているのだと察して、硝子戸ガラス越しに黙つて見ていると、花壇の周りを一と廻りして、池の汀みぎわのライラックや小手毬こてまりの枝を検しらべてみたりしてから、そこへ駈かけて来た鈴を抱き上げて、円く刈り込んである梔子くちなしの樹のここ

るにしゃがんだ。二階から見おろしているので、猫に頬ずりをするたびに襟頸の俯向くのが見えるだけで、どんな顔つきをしているものとも分らないのであるが、でも幸子には、今雪子のお腹の中にある思いがどう云うことであるのか、明かに読めるのであった。恐らく雪子は、いずれ東京へ呼び戻される日も遠くないのだと云う予感を抱いて、この庭の春にそれとなく名残を惜んでいるのである。そして出来るなら、あのライラックや小手毬の花がもう直ぐ咲き揃うのを見届けるまでは滞在していられますようにと、祈っているであろう。尤も東京の姉からは、まだいつ帰れとも云って来ている訳ではないが、彼女が内心、今日は云って来るか、明日は云って来るかとビクビクしながら、一日でも多くの時を此方で過したいと願っている様子は、余所眼にもよく分っていた。幸子はこの内気な妹が、見かけに依らず出好きなことを知っているのので、自分が出歩けるようになったら、映画やお茶の附合いぐらいは毎日でもしてやるのだがと思っていたのであるが、雪子はそれを待ち切れないで、この間から天気の良い日には妙子を誘って神戸へ出かけて行き、何と云うことなしに元町あたりをぶらついて帰って来ないと、気が済まないらしかった。そして、いつでも、松濤アパートの妙子を電話へ呼び出して、落ち合う先を打ち合せてから、いそいそと出かけて行くのがさも楽しそうで、縁談のことなど全く念頭にないようであった。

雪子に始終引つ張り出される妙子は、時々幸子の枕もとへ来て、近頃仕事に忙しいのに、午後が一番大切な時刻にこう頻繁に附合いをさせられるのは叶わない、と云った風な不平を遠廻しに洩らしたが、或る時やつて来て、

「昨日おかしなことがあってんわ」

と、次のような話をした。

昨日の夕方、雪姉ちゃんきあんと元町を歩いて、スズランの店先で西洋菓子を
買っている、雪姉ちゃんきあんが俄にわかに慌あわて出して、「どうしよう、こいさん、

来たはるねんわ」と云うのであつた。「来たはるて、誰が来たはる
ねん」と聞いても、「来たはるねんが、来たはるねんが」と、ソワソワ
しているだけなので、何のことやら分らずにいると、奥の喫茶室で珈琲
を飲んでいた一人の見馴みなれない老紳士が、その時つかつかと雪姉ちゃん
の所へ立つて来て、慇懃いんぎんに挨拶をして、「如何です、お差支えなかつた
ら彼方あちらでお茶でも差上げたいと存じますが、ちよつと十五分ばかりお附
合いになって下さいませんか」と云うのであつた。雪姉ちゃんはいよい
よ慌てて、真まつ赧かな顔をして、「あのう、

あのう、
ドモドするばかりなので、「如何です」と、紳士は二三度そう云いなが
ら立っていたが、とうとう断念したらしく、「や、大変失礼いたしました
た」と、丁寧に辞儀をして又行つてしまつた。雪姉ちゃんは、「こい
さん、早うしよう早うしよう」と、大急ぎで菓子を詰めさせて外へ飛ん
で出たが、「誰やねん、あの人」と、聞くと、「あの人やがな、この間
会つたん」と云うので、それではあれが見合あひをした野村とか云う人な
のかと、やつと妙子に合点が行つた、と云うのである。

「何せ雪姉ちゃんの慌て方云うたらないねん、あんじよう断り云うたら
ええのんに、あのう、あのう、云うてウロウロしてるねんもん」

「雪子ちゃんそんな時にてんとあかんねんわ。あの歳になつても十七八
の娘と一緒にやねん」

幸子はちよつど話の出たついでに、妙子が何か聞いていることもあろう
かと、雪子ちゃんあの人のことどない思おもうてるのんか、何ぞ云うてえへ
なんだやるか、と云うと、それで、うち、あんたどない思おもうてるねん云
うて聞いてやつたら、縁談のことは姉ちゃんねえと中姉ちゃんなかあんに任してある

さかい、行け云われたら何処へなと行くつもりやねんけど、あの人のとこだけはよう行かんさかい、えらい我が儘云うみたいやけど、どうぞこれだけは断つてくれるように、こいさんから中姉ちゃんに云うてほしい云うて、頼まれててんわ、と、そう妙子は云うのであった。妙子も野村と云う人を始めて見て、話に聞いたよりもまだ老けているのにびっくりし、なるほどこのお爺さんでは雪姉ちゃんが厭だと云うのも当たり前だと感じたくらいで、雪姉ちゃんの嫌う理由はそこにあるのに違いないと思うけれども、雪姉ちゃんは風采ふうさいや顔つきのことなどは別に何とも云ってないで、それよりは、見合いの晩に青谷の家へ引つ張って行かれた時、仏壇に亡くなった奥さんや子供達の写真が飾ってあるのを見て、ひどく不愉快にさせられたと云う話をした。雪姉ちゃんの云うのには、二度目と云うことを承知で嫁に行くにしても、先妻やその子供達の写真が飾ってあるのを見せられて好い気持がする筈はずはないではないか、今は独身ひとりにいるのだから、密ひそかにそう云うものを飾ってその人達の冥福めいふくを祈る心情は分らなくはないが、あたしに家を見て貰おうと云う時に、何もそんなものが見える所へ出して置かなくともよさそうなものなのに、あの人は写真を急いで隠してもすることか、わざわざあれが飾ってある仏壇の前へ案内するとは何事だろう、あれを見ただけでも、とても女の繊細な心理などが理解出来る人ではないと思う、と云うので、何よりそれで愛憎あいそを尽かしたように云っていた、と云うのであった。

それから二三日後、幸子は漸ようやく出歩けるようになったので、或る日昼飯を済ましてから身支度をして、

「そしたら、陣場さんそこへ断り云いに行つて来るわな」と、雪子に云った。

「ふん」

「あの話、この間こいさんに聞いてんわ」

「ふん」

幸子がかねて考えていた通り、本家が不賛成だからと云うようなことで、婉曲えんきよくに断りの意味を通じて帰って来たが、雪子には、円満に話をして来たと云っただけで委くわしいことは云わず、雪子も別に聞こうともしなかった。陣場からはその後の節季にこの間の北京楼ペキンろうの勘定書を封入して来て、勝手ながらこの半額を受け持つて戴きたいと云って来たので、折り返して為替かわせを送ってやり、それでこの縁談は打切りになった。

それらの報告を書いてやったのに対しても、本家からは何とも云って来ないのであつたが、幸子は、雪子ちゃんももう一と月になることだし、余り長く留めて置いて後が利かなくなっても困るから、又来るにしても一遍帰ったら、と、ぼつぼつすすめていた。で、四月三日のお節句の日には、悦子が学校の友達を招いてお茶の会を催すのが毎年の例になつており、その時はいつも、雪子が手ずからパイやサンドイッチを作る習わしになつていたので、そのお節句を済ましたら帰る、と、当人も云つていたのであるが、さてお節句が済んでしまうと、もう三四日きおんで祇園ぎおんの夜桜が見頃だそうだから、と云うことになった。

「姉ちゃん、お花見してから帰りなさい、それまできつと帰ったらいかんよ。ええか姉ちゃん」

と、悦子は頻しきりにそう云つていたが、雪子を引き留めることについては、今度は一番貞之助が熱心であつた。折角今迄いて、京都の花を見ずに帰るのは雪子ちゃんも心残りであろうし、毎年の行事に大切な役者が一人欠けては不都合であるから、と、そう云うのであつたが、実は貞之助は、そんなことよりも、妻がこの間の流産以来妙に感傷的になつていて、たまたま夫婦二人きりになると、胎児のことを云い出しては涙ぐむのに悩

まされているので、妹たちと花見にでも行ったら少しは紛れてくれるでもあろう、と云う下心があるからなのであった。

京都行きは九日十日の土曜日曜に定められたが、雪子はそれまでに帰るのやら帰らないのやら、例の一向はつきりともせずにくずくずして、結局土曜日の朝になると、幸子や妙子と同じように化粧部屋へ来てこしらえを始めた。そして、顔が出来てしまうと、東京から持って来た衣裳いししょうかを靴ばんを開けて、一番底の方に入れてあった畳紙たたしを出して紐ひもを解いたが、何と、中から現れたのは、ちゃんとそのつもりで用意して来た花見の衣裳なのであった。

「何なんやいな、雪き姉あんちゃんあの着物持って来てたのんかいな」
と、妙子は幸子のうしろへ廻ってお太鼓を結んでやりながら、雪子がちよつと出て行った隙すきにそう云って可笑おかしがった。

「雪子ちゃんは黙もくってて何でも自分の思うこと徹とさな措おかん人やわ」と、幸子が云った。

「見てて御覽、今に旦那さん持ったかて、きつと自分の云うなりにしてしまふよつてに」
京都では貞之助が、花見の雑沓ざつとつの間にあつても、赤児を抱いた人に行き遇あわす毎に幸子がはつと眼を潤うるませるのに当惑したが、そんな訳なので今年ことしは夫婦が後に残るようなこともせず、日曜の晩に皆一緒に帰って来た。そして、それから二三日過ぎて、四月の中旬に雪子は東京へ立って行った。

1955（昭和30）年10月30日発行

2011（平成23）年3月20日112刷改版

2013（平成25）年6月25日114刷

底本の親本：「谷崎潤一郎全集 第十五巻」中央公論社

1968（昭和43）年1月

表題は底本では、「細雪^{こはゆき} 上巻」となっています。

「谷崎潤一郎全集第19巻」（中央公論新社2015年6月10日初版発行）は562頁より私家版手入れ本の著者による修正も参照して校合したとありますので、「谷崎潤一郎全集第19巻」（中央公論新社2015年6月10日初版発行）の表記も入力者により併記されています。

入力：砂場清隆

校正：小島大樹

2016年6月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。